今日のソ連邦

1978
2
1.15.



ソ連国民の住宅を受け取る権利

油田の火災と闘う人々

大学生の冬休み

今日のソ連邦

第2号　1978年1月15日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）
半年分送料……………………1200円
1年分送料……………………2100円
同時一括送りの部数が多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館
東京都港区麻布台2―1―1　電話(583)4224
（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3―9―13
郵便番号141　電話(03)447―3536(代表)
振替口座東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）



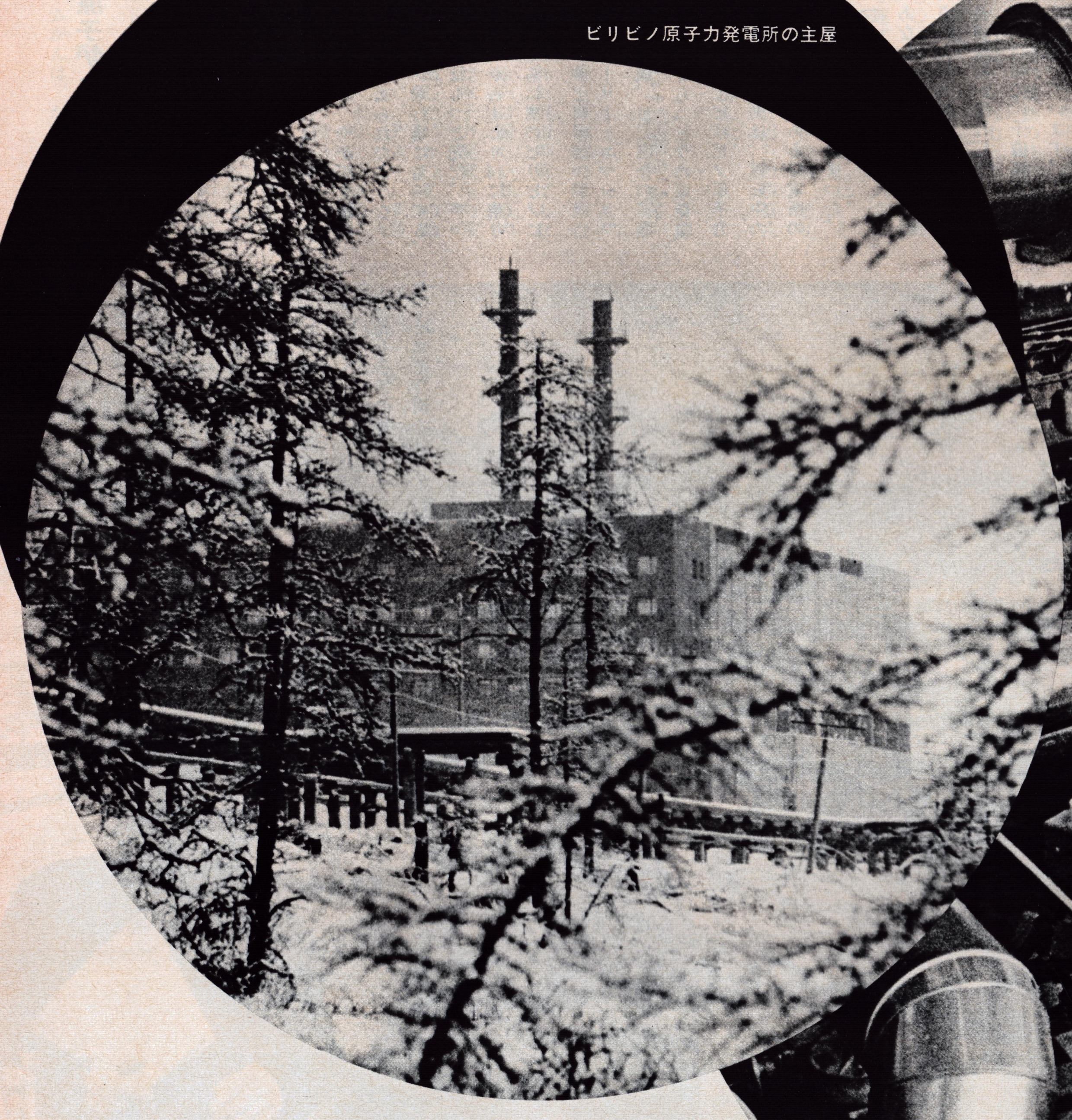


ビリビノ原子力発電所の機械室。ソ連人が原子に発電所での平和な仕事を教え込んでから、すでに24年目を迎えている。原子に隠された侵略性のコントロールには万全の措置が取られている。

チュコト半島の"原子の太陽"

極北のビリビノ原発を訪ねて

アロイズ・フィリペンコ
カメラ　V・レズニコフ他



ビリビノ原子力発電所の主屋

原子力発電の時代は一九五四年6月27日、モスクワ近郊のオブニンスク市で始まった。この日、この地に建設された世界最初の原子力発電所が活動を開始したのだ。その時からまだ1/4世紀もたっていないが、世界にはすでに一三〇を超す原子力発電所が操業している。ソ連は十分な石油、石炭資源、豊富な水力資源を保有しているが、原子力発電を最も将来性に富む発電部門として大規模に、急テンポで発展させている。第9次5ヵ年計画(一九七一―七五)の期間中に電力生産は40%の伸びを示したが、原子力発電所の電力生産は7倍に成長した。第10次5ヵ年計画(一九七六―八〇)では原子力発電所の総出力はほぼ5倍になる。

世界最北のビリビノ原子力発電所(ソ連東北端のチュコト半島)を訪れたノーボスチ通信社フィリペンコ記者のルポルタージュをご紹介しよう。

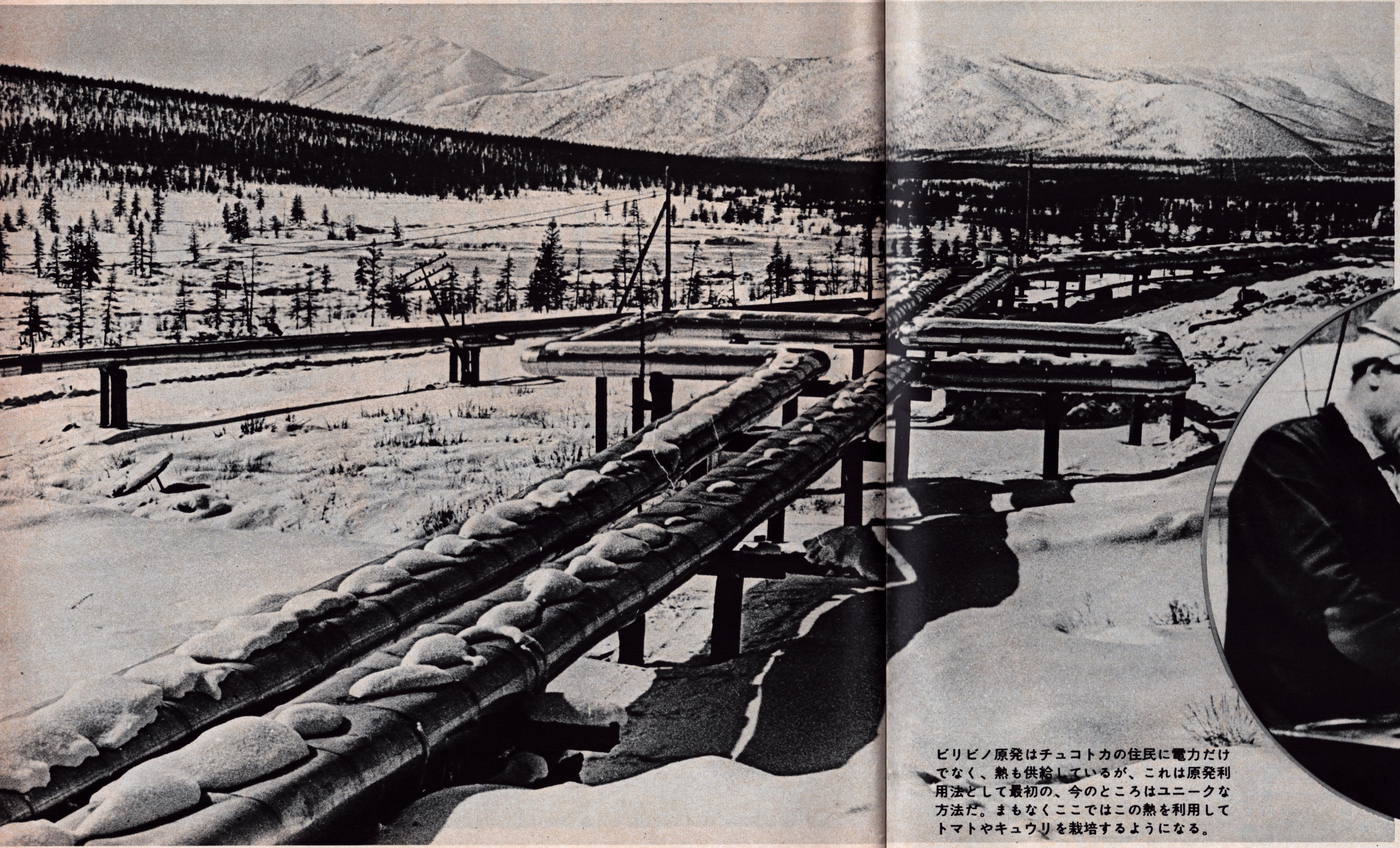
原子炉上のインタビュー

ここはほとんど世界の果てと言ってよい。モスクワから北東に進路を取った大陸横断旅客機IL＝18は、時間帯を7つも横切り、やがて北極圏の中に忘れ去られたようなチョクルダフ飛行場に着陸する。ビリビノはもっと先だ。チョクルダフからIL＝14に乗り換えてさらに東のビリビノに向かう。

私とユーリー・ユマシェフ技師（39歳、自己紹介の言葉を借りるなら〝ヒラの原発職員〟）、そしてビリビノ原子力発電所との対面は、運転中の原子炉の屋上にある発電所の広々とした部屋で始まった。ユマシェフは説明した。

「あなたの足の下では今、制御された核分裂のゆっくりした連鎖反応が進行しています。制御は自動で、予備装置が何重にもなっています。ここには合計4台の冷却水自然環流式ウラン＝黒鉛型原子炉があります。今のところ、このタイプの原子炉はここ以外にはどこにもありません。この原発のKWh当たりの発電コストは、以前ここにあったディーゼル式発電所の場合の$\frac{1}{3}$です」

一九七〇年の冬、このあたりでは当たり前の氷点下45度の厳寒の中で原子力発電所本体の鉄骨の最初の柱が据えつけられた。一九七三年、第1号発電ユニット（出力一万二〇〇〇KW）の原子炉に飛行機で運ばれた核燃料が装入され、発電所は発電を開始した。そして、一九七六年の末、ビリビノ原発は設計出力の四万八〇〇〇KWに達した。



ビリビノ原発はチュコトカの住民に電力だけでなく、熱も供給しているが、これは原発利用法として最初の、今のところはユニークな方法だ。まもなくここではこの熱を利用してトマトやキュウリを栽培するようになる。

右がユーリー・ユマシェフ技師



なぜ、ここに原発を？

地元の郷土博物館の陳列台に並べられた沢山の黄ばんだ写真、あるいは新しい写真の中から私は原子力発電所の写真を探し出した。かつての地質調査隊員で、チュコト半島の古老グラズイリンに原発についていろいろ聞いてみたいと思ったからだ。しかし、グラズイリン老人はどこか町外れで撮ったらしい別の写真から話を始めた。その写真にはドラムかんしか写っていない。このおびただしい数のドラムかんは、かつてこの極北

地方に何千kmもの距離をはるばると送られてきた燃料の容器なのだ。グラズイリン老人が私に質問する。

「こういうドラムかんが、今はもちろん空だが、この地区に何個たまっているか、知っていますか? 私にも分からない。正確な数を知っている者は一人もいない。何しろ、数十年にわたる蓄積なんだから。その代わり、ここではだれでも知っています——チュコト半島では燃料の入ったドラムかんは非常に高くつくということを。それでも以前は、この、ほとんど金の値段と同じ位になるドラムかんを輸送していました。船や飛行機や、そしてトナカイを使って。エネルギーがなければ、工業は(主として鉱山業)発展しないし、この地方の発展もない。しかも現地には今のところ燃料資源がないときている」

これがすなわち、なぜチュコト半島に原子力発電所を建てたのかという疑問にたいする答えだった。原子力発電所の一年間の核燃料消費量はキログラムの単位である。こうして原子は、遠く離れた辺ぴな地区のエネルギー産業を輸送の問題から解放する。

老人は私を連れて町の中を案内した。「ここは体育館。かつてのボイラー室があった建物です。児童クラブも以前のボイラー室の建物です。ほら、この倉庫も昔は……」

遠くから運ばれてきた石炭を使っていた数十の暖房用ボイラー室は、ビリビノではすでに廃止された。新しい5階建ての建物だけでなく、多くの古い住宅にも、現在では原子力発電所が熱を供給している。

原子力発電所を電力生産だけでなく、熱供給にも利用するというビリビノ原発の経験は、初めてのものであり、今のところユニークなものである。そしてこの経験は事実上、ほとんど地球的規模の新しい展望を開いている。なぜなら現在の世界では、全エネルギー資源の25—30%が都市や町のほかならぬ暖房のために消費されているからである。グラズイリン老人が説明した。

「われわれはまだ、原発が供給できる熱の1/5以下しか利用していません。しかし、2年ほどしたら、もう一度来て下さい。あそこの、今は何もないところに温室村が完成しているでしょう。設計はもうできています。ここでは何カ月も太陽が顔を出さないが、われわれは原子の熱で自分たちのトマトやキュウリを栽培するようになるのです。その隣には数百頭の乳牛を飼う酪農場も建設されます。粉ミルクではなくて、しぼりたての牛乳がどんなにおいしいものか、ここの子どもたちにも分かるようになるでしょう」

万全の安全対策

原子力発電所本体から玄関ホールへ通じる廊下の出口は、クロムめっきした鋼鉄、アルミ、ガラスでできた複雑な施設によって仕切られている。これは発電所を出る人すべての放射能汚染を検査する電子コントロール・システムである。

検査が終わると、目の前に「清浄」という単語の書かれた緑の電光板にランプがつき、玄関ホールへのゲートが開く。

米国の原子爆弾がヒロシマを焦土にしてから、32年が過ぎた。そして、ソ連人が原子に発電所での平和な仕事を教え込んでから、すでに24年目を迎えている。しかし、原子の最初の邪悪な職業のことを忘れている者はだれもいない。原子の中に隠された侵略性のコントロールは大丈夫なのだろうか? どんなに素朴な人でも、この問題には専門家に劣らない関心を抱いている。

正直言って、ユーリー・ユマシェフ技師が私を運転中の原子炉の屋上へ連れて行った時、「いやなことをする」と思った。そして出口の緑の電光板を見てほっとして、ようやく理解したのだった——あの〝ヒラの原発職員〟は発電所の最も〝熱い〟個所でさえも放射能防護対策が万全であることを実地に示してくれたのだ、と。ビリビノ原子力発電所の最新式の保安システムは、確率が一〇〇万年に一回という事故にたいしても備えている。

ビリビノ原発の外部放射能測定業務は、発電所を中心とする半径30kmの地域の土壌、水、空気、全生物を監視している。

監視は第1号原子炉が運転を開始する一年前の一九七二年に始まった。この時にこの地域の放射能のいわゆる自然バックグラウンドが測定された。それ以来、定期測定が常に確認しているが、放射能のレベルは、原発の操業前に存在したこの自然のバックグラウンドを超えていない。

清浄な、平和な原子は、確実に人間に奉仕している。



◀太陽が一日中昇らない極北の冬を、今では〝原子の太陽〟が照らし、暖めている。



ビリビノ原発のコントロール・パネル。ここにはユニークな冷却水、自然環流式のウラン＝黒鉛型原子炉が4基(合計熱出力6万2000KW)あり、電気出力は合計4万8000KWが定格。

・ビリビノ原発・

芸術家の使命とは？

サラホフ美術アカデミー会員に聞く



「あなたは社会生活における芸術家の使命をどのように考えていますか？」――モスクワの週刊誌『ノーボエ・ブレーミャ』の記者が、ソ連の著名な画家でソ連芸術アカデミー会員のタイル・サラホフ（49歳）にこういうテーマでインタビューをした。

自国民にたいする市民としての奉仕が、すべての真の芸術家にとって固有なものであると、私は確信しています。しかしこれとは異なった見地も多くあります。ある者は芸術家は不偏不党の年代記作者であるべきだと考えており、他の者は芸術家の使命は自分の社会にたいして判決を下す義務のある判事であるべきだと考えています。〈純粋芸術〉の奉仕者たちは芸術家を一種の神話創造者、人を幻想の世界、あるいはまったく空虚のなかに連れ去る慰め手と見なしています。

ロシア文学およびロシア美術について言えば、それはいつも人民の生活と密接に結びついていたことによって力強かったのです。

ソビエト美術もこの民族的な伝統を受け継いでいます。

ソ連ではその創作が社会主義リアリズムの概念に入らない芸術家には正常に仕事をする可能性がないといった話や論文を、西側諸国でしばしば耳にしたり、また読むことができるが…

社会主義リアリズムの意味

まずはじめに、一体われわれは社会主義リアリズムというものをどのように理解しているかを話し合う必要があります。

社会主義リアリズムをもっぱらソ連だけの現象と見なしている人たちは誤っています。社会主義の確立と発展に奉仕する芸術方法としての社会主義リアリズムは、世界芸術の発展の合法則的な一段階です。そしてその代表者たちは現在、ヨーロッパ、アジア、アメリカの多くの国で創作しています。その呼称からして明白なように、社会主義リアリズムは第一にリアリズムの伝統を発展させています。しかし社会主義リアリズムは世界芸術の他の諸傾向の達成をけっして拒否も、無視もしてきませんでした。それは非写実性、象徴、その他の芸術表現の先鋭な諸手段に反対していません。もちろん、それらの表現手段が人間の思考や感情の正しい表現に役立つ場合には、ですが。

だれかがルノアール、あるいはモネに、印象主義のわくに制約されてあなた方はどうして描くことができるのですかと、質問したと想像してみましょう。かれらはきっとこう答えるでしょう――〈私たちは自分から進んで、自由に、印象主義の信奉者となったのです。だからその制約を感じないし、また感じることができないのも当然です。私たちにとっては制約などまったく存在していません……〉と。

ところでわれわれは、社会主義リアリズムが画家を助けて現代の生活のもっとも特徴的な諸側面と矛盾を理解させ、自分の時代の真の主人公たちを見させることを確信しています。しかしこのことは、社会主義リアリズムのどの作品も自動的に、他の諸傾向で描かれた過去、あるいは現代のどんな絵画よりもすぐれているということを意味するものではありません。個々の画家が社会主義リアリズムのもつ広範な可能性を現実化することができるかどうかは、画家自身の才能と技量にかかっています。したがって、個々のソ連画家の灰色の、月並な諸作品を攻撃し、これらの作品を方法の欠陥のせいにしようとしているわれわれの批判者たちは、誤りを犯しているのです。

芸術家の“不自由”について

ソ連では芸術家に〈自由がない〉という千遍一律の論議をひんぱんに耳にすればするほど、私はますます強く、われわれの反対者が考慮に入れているのは創作ではなくて、ソ連の芸術家の政治的見解であるという結論に達するのです。われわれと、ソ連では創作の自由に〈制約〉があると不平をこぼす人たちとは、芸術の使命について異なった考えをもっているのです。根本の問題は、芸術家がかれの生活しているその社会のためになにをなすことを望んでいるかということです。

私は西側諸国の新聞雑誌紙上でしばしば見受けられる、ソ連におけるいわゆる〈アバンギャルド〉、あるいはまた〈反体制芸術家〉とも一般に呼ばれている前衛美術家にたいする〈迫害〉についての報道を知っています。

最近モスクワでつぎつぎと6回も〈アバンギャルド〉たちの展覧会が開かれました。〈かれらが一体どんなものを描いているか、ちょっと見てみようや！〉という声が、会場前に並んだ長い行列のなかで聞かれました。しかし展覧会を重ねるにつれて、人々の関心は消えて行きました。最後の展覧会では、列車の出たあとのプラットフォームのように、ホールはがらんとして静かでした。

実際に才能のある人は、〈アバンギャルド〉のなかのほんの少数者にすぎないことが分かりました。〈アバンギャルド〉の大多数は、カンディンスキー、サルバドール・ダリ、シャガールを模写するエピゴーネンです。

ついでに言えば、こういった興味ぶかい事実があります。西欧および日本の商社はソ連でソビエトのリアリストの画家たちの作品を何百点となく買い付けていますが、〈アバンギャルド〉たちの作品の買い入れはひじょうに渋っています……これは当然の話です――ソ連では才能ある画家たちが〈苦しい生活をしている〉と叫び立てることと、自分の財布を賭けることとは別問題ですから。

もちろん、ある画家に才能があっても、モダニズムの一般的な本質を変えるものではありません。言葉をかえれば、〈すぐれた〉モダニスト画家はありえても、しかしすぐれたモダニズムというものはありません。しかしソ連におけるモダニズム的諸傾向にたいする批判的な態度は、わが国では批判の言葉が刑法の言葉に翻訳されていることをけっして意味するものでありません。わが国では立体派、あるいはポップアートの作品を好む人はだれでも、自由にその派の画を描いて自分の喜びを充たすことができます。ただ反ソ主義、ポルノ絵画、戦争の宣伝をあおる作品だけが禁止されているにすぎません。しかしもちろん、批評も自由に批判する権利をもっています。西側諸国のある人たちは、〈アバンギャルド〉の作品についてのソ連における否定的な反響になぜ驚いているのでしょう？

しかし、話をもとに戻しましょう。私は芸術家というものを、諸事件の記録係や神話の創造者ではなくて、生活において一切のよりよきものを守り、人間の魂における崇高なものを守るための闘士であると思っています。私個人について言えば、もう20年も絵画の仕事をしていますが、いつか形式や、テーマの選択や、〈創作の自由〉という概念に含まれるすべての点で、自分が制約を受けていると感じたなどという場合は一度もありません。しかしこのことは、私にはどんな問題もないということではありません。年とともに生活は複雑となり、人はしばしば、なにかを見分けなかった、理解しなかった、表現することができなかったと考えている自分に気づくことがあります。創造的に思考するあらゆる画家とおなじく、私もなにかある新しい、まだかつてない表現手段を発見したいという鋭い要求をじっさい経験しています。しかし西側諸国の反対者たちがわれわれに質問しているような意味での創作の自由と、私の現在の関心事とはなんの関係もありません。

トピックス

ロシア人の姓

ロシアで最初の名字が出現したのは16―17世紀のこと。姓を付けることができたのは貴族だけだった。その他多数のロシアの住民は、一八六一年の農奴制廃止後はじめて姓を持つようになった。

ロシア人の姓についてどういうことが知られているか？ 姓はいくつあるのか？ また、その姓はどのようにして生まれたのか？ イズベスチヤ紙の記者がソ連科学アカデミー民族学研究所のV・ニコノフ研究員にこういうテーマでインタビューした。「私の個人的なカード目録では、最もよく出会うロシア人の姓だけで一〇万以上を数えています。ロシア人の姓の実際の数となれば、一〇〇万のオーダーになるでしょう。

一〇〇万人以上の人が名乗っている、たとえばイワノフ（モスクワだけで九万軒もある）、ワシリエフ、ポポフのような姓もあります。クズネツォフ、スミルノフ、コワリョフも多い姓です。一方、ほんの数家族しか名乗っていないような珍しい姓もあります。

それぞれの姓を解読する、つまり、その姓が形成された元の単語を探し出すことはきわめてむずかしい、時には不可能なことさえある課題です。その理由は、古代ロシアで使われていた多くの単語の意味が今では分からなくなっており、その単語の解明に長い学術的探究が要求されるからです。

完全なロシア名字辞典を編さんすることは不可能です。自分のカード目録から私は最も多い姓を五万選ばねばならなかったが、それでもこれを本にするには、大判の厚い本が3巻必要です。辞典の編さんには数年かかります。『ロシア名字辞典』第1巻は、一九七八年中に完成したいと思っています。この巻にはロシア語のアルファベットの最初の4文字（アーからゲーまで）で始まるロシア人の姓が入る予定です」

（この記事の原文全文は前号76ページの「ロシア語のページ」に掲載されています）

特集

ソ連の住宅問題

住宅を受け取る権利

——新聞記者と党書記の住宅問答

「ソ連邦の市民は住宅を受け取る権利を持つ。

この権利は国家的および社会的住宅フォンドの拡大と保護、協同組合的および個人的住宅建設の助成、設備のととのった住宅の建設プログラムの実現に応じて供与される住宅の社会的監督のもとでの公正な分配、ならびに高くない住宅料と公共料金によって保障される。ソ連邦の市民は供与される住宅を大切にしなければならない」(ソ連憲法第四四条)

* * *

『文学新聞』のアナトリー・コズロビチ記者とベロルシア共産党のゲンナジー・バルトシェービチ・ミンスク市委員会第一書記は住宅問題について話し合った——

ソ連人にとって〝住宅〟とは?

記者　この間、こんな事実があった。ある建設労働者が無料で提供された新しい3DKの住宅を断った。その理由が、なんと、息子がピアノを習いに通っている音楽学校が遠くなるということなのだ。「もう少し今の2DKで辛抱して、もっといい住宅が割り当てられるのを待ちましょう」と言うのだ。

バルトシェービチ　同じような事実は他にもある。たとえば、あらゆる施設が完備している結構な住宅を、間取りが気に入らないという理由で断る連中がいる。

記者　…とすると、〝住宅〟とは、いったい何なのか?

バルトシェービチ　近ごろこの概念が変わったのだ。それは疑う余地がない。〝住宅〟は新しい社会的内容で満たされるようになった。それでなければ、あの建設労働者が新しい住宅を断るわけがない。この事実は、大祖国戦争のさいにヒトラー占領軍によって完全に破壊されたミンスクで起こったことなのだから、なおさら意味深長である。私は解放直後のミンスクをよく覚えている。焼け焦げた骨組みばかりの家並みと瓦礫(がれき)の山だった。ミンスク市民が自分たちの町の復興にどんなに熱心に取り組んだか、廃墟の上に住宅が一つできるごとにどんなに喜んだか——はっきり覚えている。当時は、ただ頭の上に屋根があって、雨が子どもにかかりさえしなければ、立派に住宅として認められていた。ところが、今では、どうだろう! 子どもがピアノのレッスンに通うのに不便だからと言って、提供された住宅を断るのだ。これは何を物語っているのだろうか?

近代的な住宅は集中暖房、バス・トイレ、ダストシュートなど、高いレベルの機能を果たしている。だが、現代人にとっては、それでも不足なのだ。現代人は住宅に高い社会的・精神的要求をも突きつけている。都市生活者は一日の半分を自宅で過ごす。したがって、充実した生活を送るために必要なすべてのものを、住宅が提供することを期待するのも当然だ。彼らは自分の快適な住宅から程遠からぬ所に音楽学校やプールがあることを希望する。住宅そのものの中では、寝たり、食事をしたり、雨露をしのいだりするだけではなく、めいめいが個室を持つことを希望する。要するに、住宅は各人のプライバシーを満足させなければならないのだ。われわれは、新しいソ連憲法にもとづいて、まさにこのような住宅を要求しているのである。わが国家は、この生活的に重要な権利を憲法で認証することによって、すべてのソ連市民の自由な、調和のとれた発展をめざす確固不動の方針を再確認した。憲法第四四条は、すでに存在する現象を反映するまったく当然なものと思われる。

もしあの建設労働者が自分の住宅を受け取る権利に疑いを抱いていたなら、果たして提供された新しい住宅を断っただろうか? しばらく待てば、自分の気に入った新しい住宅を受け取ることができると確信していたからこそ、断ったのである。わが国の市民はすでに住宅を受け取る権利を行使しているのだ。だが、必ずしも常にこの権利を希望通りの早さで完全に実現できるとは限らない。これは一応、別問題だ。ソビエト国家は今では豊かになり、その市民に住宅を保障する責任を引き受

けることができるほど巨大な経済力を持っている。ミンスク市民について言えば、こんにちその圧倒的多数がそれにふさわしい住宅を持っている。

今日の住宅問題

記者　頭の上に屋根があるというわけだ。

バルトシェービチ　いや、そんな言い方は正しくない。ちゃんとした住宅を持っているのだ。だが、その住宅が必ずしも常に規定の基準にかない、現代的な快適さのレベルに達しているとは限らない。これは別問題だ。ところが、憲法に明記された権利は一人ひとりのソビエト市民に、近代的な住宅を受け取ることを保障している。国家はいかなる条件もつけず、いかなる制限も設けずに、十分に価値のある住宅を市民に保障する義務を負っている。自分の貯金で住宅を建てたかったら、どうぞ。国家はあらゆる援助を惜しまない。国有住宅に住みたかったら、市民はその可能性を確実に持っている。ここに、わが国の住宅事情の本質があると思う。

記者　だが、われわれはまだ住宅事情を問題視することがまれではない。しかも、鋭い、焦眉の、しばしば頭の痛い問題として取り上げている。住宅問題の鋭さは、どこにあるのか? 国家が精力的な対策を講じているにもかかわらず、住宅建設が巨大な規模で展開されているにもかかわらず、住宅問題が存在するのは、なぜか?

バルトシェービチ　その通り、問題は存在する。それどころか、この問題はもっと先鋭化するかも知れぬ。なぜか? 国家自身が善意でこのような先鋭化へ向かっているからだ。自分で判断してみたまえ。まだ一九六七年ごろには、住宅条件改善のための衛生基準は、ミンスクで一人当たり居住面積5平方mに過ぎなかった。一九七三年には約6平方mになった。この指標は今後も増加するだろう。住宅配給の順番を待つ行列がまだ存在するにもかかわらず、増加し続けるだろう。そして国家は、自国の市民たちのためにますます良い生活条件をつくりだそうと願いながら、それへ向かって意識的に進んでいるのである。

われわれすべてに住宅を確実に提供するために、国家は巨大な重荷を引き受けている。原則として、国家はこの荷に耐える力を持っている。だが、ほかにも、労力と資金を要する多くの焦眉の問題を抱えていることを忘れてはならない。新憲法にもとづいて、われわれはすべて住宅を受け取る権利を持っている。だが、全員が一緒に同時に希望する住宅を受け取ることはできない。ここに、今日の住宅問題の本質がある。繰り返して言うが、問題は経済的可能性にある。今日それには限度があるが、明日には、まして明後日には増大するだろう。ソ連共産党中央委員会の5月(一九七七年)総会における報告で、憲法委員会議長L・I・ブレジネフは、住宅を受け取る権利は「住宅建設計画が実現されるにつれて、ますます完全に保障されるだろう……」と指摘した。

記者　ミンスクを例として、この法則を説明してもらいたい。

バルトシェービチ　よろしい。ミンスクでは、第9次5カ年計画期(一九七一—七五)だけに、総面積四二〇万平方m以上の住宅が建設された。これは戦前ミンスク市にあったすべての住宅施設の2・6倍に当たる。第10次5カ年計画(一九七六—八〇)では、投資構造の一層の変化によって住宅建設のテンポはさらに促進される。ミンスク市の投資総額の53%が非生産部門の発展に向けられ、その4/5が住宅と公共施設の建設に向けられる。この5年間に、われわれは9万戸の住宅を建てるつもりであり、一九七七年だけに八万五〇〇〇人のミンスク市民が住宅条件を改善した。もうひとつ、一連の指標がある。住民一人当たり平均有効居住面積は一九四〇年には4平方mであったが、一九四五年には戦争のために減って2・7平方mとなり、一九六七年には6・87平方m、今は12・2平方mと増えている。成長はめざましい。一九八〇年には、ミンスク市民一人当たりの居住面積は13平方mに達するだろう。これらの数字は、10—15年前に比べて今ではずっと早く住宅を受け取る権利を実現できることを物語っている。

住宅の公正な配分

記者　しかし、この権利を実現するためには、企業あるいは居住地の区執行委員会で、新住宅割り当ての順番を待たなければならないのではないか?

バルトシェービチ　その通り。順番を待つ行列に立たなければならない。もし何かが不足している場合、これが考えられる限りの最も公平なやり方だ。

記者　だが、順番制はただ単に外面だけの公正に過ぎない。ある者はできるだけ早く住宅を受け取る必要に迫られているが、他の者は待つこともできる……

バルトシェービチ　公正について言えば、あなたが正しい。順番制を形式的に守ることは、われわれ共産党員には許されない。憲法に、住宅を受け取る権利は「社会的監督のもとでの居住面積の公正な分配によって」保障されると特に明記されているのは偶然ではない。これは何を意味するのか? ミンスクの例で説明しよう。われわれのところでは、ソ連のどこでも同じように、困窮の程度に応じて順番をきめるという原則で、住宅が無料で提供され

ている。順番制は、このきわめてデリケートな問題における混乱や主観主義を防止する、厳密な、組織的なやり方である。原則として、住宅の配分に大衆が参加する生産集団では、紛争が起こらないし、住宅問題の不公正な決定にたいする苦情も出ない。

住宅を受け取る権利の実現に及ぼす大衆の意見の影響はますます増大するだろう。勤労者集団の中では、互いによく知り合っており、各人の心配事や必要を理解している。また、だれが共通の仕事に貢献しているかが、よく分かる。集団は、自分たちの観察を総括して、公正にふるまい、国家から企業に提供された住宅を自分たちの最良の代表に割り当てるだろう。

社会主義の分配原則と住宅

記者　住宅の配分にあたっては、仕事の成績を考慮すべきだと言いたいわけか？　だが、それは住宅を受け取る憲法上の権利に矛盾しはしないか？　悪い働き手でも、住宅を持たないわけにはいかない。まして彼の家族は快適な条件のもとで生活する完全な権利を持っているのだ。

バルトシェービチ　そうだ、持っている。わが社会のヒューマニズムは、この点にも現れている。住宅を受け取る権利はソ連のすべての市民が持っている。悪い働き手も持っているのだ。わが国では、すべての人々が諸権利を一様に持っている。周知の通り、国家が制限を加えるのは、ただ犯罪者の権利だけである。しかし、われわれのすべての市民的権利は、やはりわれわれの市民的義務と最も密接に結びついている。われわれが自分の義務をよりよく遂行すればするほど、わが勤労国家は豊かになり、われわれはますます完全に自分たちの権利を実現できるようになる。これは経済的法則でもあれば、そう言いたければ、道徳的法則でもある。おそらく「各人は能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」という社会主義の原則は住宅の配分にさいしても守られなければならないだろう。

ついでに言えば、一九七六年2月、ベロルシア共和国閣僚会議とベロルシア共和国労働組合評議会が確認した現行の『ベロルシア共和国における住宅提供手続きにかんする規定』は次のように述べている――「労働のベテラン、自分の勤労義務を立派に良心的に遂行する労働者と職員は、住宅の提供を受けるにあたって、特典を与えられる」

記者　その特典は、具体的には何に現れているか？

バルトシェービチ　それは、アパートの住民にとってより便利な階にある住宅、より広い（基準の範囲内で）住宅、日当たりのよい、バルコニーが二つある、等々の住宅の提供に現れている。すべてのフラットが完全に平等の価値を持つというわけにはいかない。たとえば、あるフラットは窓が辻公園に面している。他のフラットは騒々しい大通りに面している。これは大きな違いだ…　とすれば、これらのフラットが突撃労働者と怠け者の仕事の成績の違いを示すのもまたよいではないか。

記者　つまり、住宅を教育の道具と見ることもできるというわけだ？

バルトシェービチ　私は何もそう言ってるのじゃない。住宅そのものではなくて、われわれが論じているあの原則に従って住宅を配分する手続きが教育的な刺激となるのだ。たとえば、労働者が生産増強のために献身的に働き、自分の工場の社会活動にも積極的に参加していれば、労働組合委員会の会議で、順番を待たずに住宅を提供しようという動議が出される。だから、刺激は事実そのものであり、広く知られている原則そのものなのだ。

住宅は、国家が無償で提供する大きな物質的価値である。ソ連では家賃が一九二八年以来変わらなかったこと、家賃が家計の中で平均4－5％しか占めていないことを思い起こそう。われわれが支払っている家賃は、国家がわれわれの住宅の維持に支出している全額の1/3に過ぎない。ついでに言えば、第9次5ヵ年計画期（一九七一－七五）中に国家予算から支出した住宅維持費の補助金は、ミンスクだけで二八〇〇万ルーブル（1ルーブル＝約四〇〇円）を超えた。だから、国有住宅を受け取る市民は、社会的消費基金によって自分たちの実質所得を増やしているわけである。

この政策は、人間的な、先見の明のあるものだ。だからこそ、物質的刺激と精神的刺激の不均衡を許さないことが、非常に大切である。貴重な贈り物（住宅）は同時に人間にたいする精神的奨励にもならなければならない。これが第一。人々は大きな物質的価値にたいして十分に真剣な態度をとり、住宅を大切にし、合理的に使用しなければならない。これが第二。住宅施設は国民の財産である。これを大切にすることは市民の義務である。この思想は新憲法に反映されている。

住宅を大切にする態度についての規定は、住宅経営や修理業務の一層の発展を促すだろう。五〇年代、六〇年代の住宅は物理的にも社会的にも老朽化した。これらの家屋に住む人々は、現代的な意味での住宅を受け取る権利を完全に実現することはできないと言えるだろう。これらの家屋は、改修し、近代化し、現代的な快適さのレベルに近づけなければならない。さもなければ、人々は老朽化した住宅に住むことを拒否するだろう。そういうケースはしばしばある。

記者　あなたのその考えを続けてみたい。今日、人々は昨日よりも良い生

ソ連の住宅問題

活を望む。そして明日は今日よりも良い生活を望むのだ。人間の欲望には限りがないのだから、住宅問題も永久に続くということになりはしないか？　明日は、今日建設された住宅から人々が出て行くことを要求するだろう。あなたの意見では、問題の根源は、どこにあるのか？　われわれの住宅建設が不良で、よく考えられていないことにか、それとも、正しくない欲望を育てているということにか？

未来の住宅建設

バルトシェービチ　おそらく、そこにはジレンマは無い。われわれの住宅における快適さのレベルは、急速に増大する人間の欲望に適合したものでなければならない。われわれは、これまで、かつてないほど多くの住宅を、かつてないほど速いテンポで建設してきたが、残念ながら、必ずしも常に住宅の質に配慮したとは限らなかった。それには、それなりの理由があった。ヒトラー侵略者がもたらした破壊の結果、人々は頭の上に屋根を持たなくなった。まずそれを作ることが必要だった。そこで屋根を作った。ところが、その屋根の下で人々はすぐさま不満を感じるようになった。たとえば、間取りが気に入らない、補助設備が不十分だ、等々。いまや課題は、建設のテンポを落とさずに住宅の質を高めることにある。しかも、今日的な意味での質を達成するばかりでなく、明日をも見つめ、住宅の発展の見通しを立てなければならない。

住宅は数十年先を見越して建てられる。従って、急激に増大する人々の欲望を数十年間にわたって満足させるものでなければならない。欲望は増大するが、家は一つ所に、同じ基礎の上に立っている。そこで、われわれがここで論じている不均衡が発生するのである。将来このような錯誤が生じるのを防止するために、ミンスクでは実験建設が行われている。私は、それを、積極的な探求、明日の、さらにその先の必要の実際的予測と呼びたい。たとえば、プリティツキー街では、実験居住区が発展している。ここでは、最も先進的な建築物の設計が適用され、将来の社会的、文化的・生活的要求を考慮に入れた建築コンポジションの新しい手法が点検されている。実験は、最も進んだ建築的、技術的な解決法を実地に検査し、そのあとでそれを至るところに導入するために行われる。プリティツキー街の40haの区域は未来のミンスクの原型である。

合理的な欲望…　まさに、ここに、住宅問題は永久に続くものかという質問にたいする回答を見出すべきである。もちろん、住宅問題が完全に解決されるのは、今日でもなければ明日でもない。また、あるとき住宅の質が限界に達するからでもない。むしろ、合理的な欲望を持った新しい人間を育成するからである。それこそ、住宅問題解決の保証となるだろう。快適な明るい住宅そのものも、人間の完成に積極的に参加することを指摘しなければならない。住宅は節約、美、精密の精神で人間を教育するだろう……

ソ連の住宅問題（数字と事実）

1918年から1975年までの期間に、ソ連ではほぼ30億m²の住宅が建設された。そのうち、最近の1960—1975年の期間に建設された住宅は15億m²以上。同じ期間に新居に引っ越した人、または住宅条件を改善した人の総計は、ソ連の人口の3分の2以上を占める。

ソ連には高度に発達した建設産業が生まれた。416の住宅建設コンビナート、数百の専門トラストと建設局があり、250以上の専門の研究所がソ連の26の気候帯のために住宅の設計図を作成している。

ソ連では毎年平均して230万戸の住宅が建設されている。

＊　＊　＊

第9次5カ年計画（1971—1975）の期間中に5億4400万m²の住宅が建設され、約5600万人が新居に移った。

＊　＊　＊

現在、ソ連国民1人当たりの平均居住面積は12m²。1945年には5.5m²だった（ソ連の居住面積という概念には、玄関、廊下、台所、風呂場および便所の面積は含まれない）。

＊　＊　＊

第10次5カ年計画（1976—1980）の期間中に住宅建設および公共建設に国家予算から支出される資金は、1000億ルーブル。

総面積5億4500万—5億5500万m²の住宅建設が計画されている。これにより5年間で5500万人が住宅条件を改善することになる。

住宅の質が、根本的に改善される。約4分の3の住宅が、新しい設計で建築される。気候帯を考慮して規格設計は100以上ある。規格設計住宅（フラット）の平均居住面積は50m²を上回る。補助施設の面積は20m²。

＊　＊　＊

1977年にソ連国民は1億1200万m²の住宅を受け取った。これは約220万戸の設備のよいフラットおよびマイホームである。

私たちの"住生活"

モスクワ市ソコーリニキ区民の話

カメラ　V・ベリャンチェフ他

モスクワ市の区の一つ、ソコーリニキ区の区長と3人の住民に、住宅事情について話してもらった。

ソコーリニキ区人民代議員ソビエト執行委員会議長（区長）

ドミトリー・イリイン

ソコーリニキ区は首都モスクワにある30の区の一つで、モスクワ最大の区ではないが、市内でも指折りの古い区です。区の名所は言うまでもなく、古い歴史のあるソコーリニキ〝文化と休息〟公園。その面積は五九〇haで、有名なロンドンのハイドパークの4倍以上もの広さがあります。公園内ではすでに多年にわたって、さまざまな国際展示会、外国やソ連の展示会が開かれています。

ところがソコーリニキは、かつてロシアの画家レビターン（一八六一―一九〇〇）がその絵筆でほめたたえた森の中の空き地、並木道のある公園だけの場所ではありません。

ソコーリニキは、まさに首都モスクワのユニークな〝玄関口〟なのです。なにしろわがソコーリニキ区には、カザン駅、レニングラード駅、ヤロスラブリ駅という三大鉄道駅が集まっているコムソモール広場があって、この三つの大駅には毎日約七五〇本の列車が到着し、約六〇万人の乗客をモスクワへ送り届けているのですから。

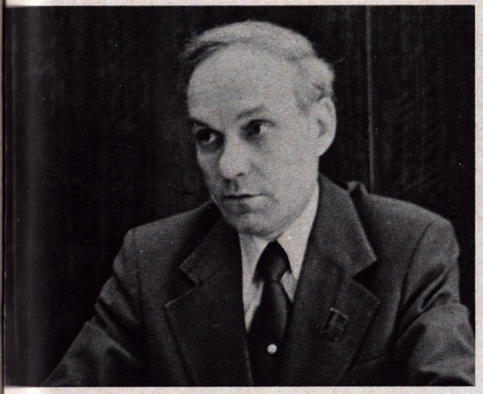
⇦



ソコーリニキ区内のコムソモール広場は、三つの鉄道駅が集まる首都の〝玄関口〟だ。

なおまたわが区には五〇〇に及ぶ大企業、施設があって、二二万七〇〇〇人の労働者、職員がそこで働いています。統計数字が確証しているとおり、わが区内の多分野にわたる工業は大都市生活に必要なものすべてを保障しています。ソコーリニキ区自体の現在の人口は一三万七〇〇〇人です。

ソコーリニキがモスクワ市の各区のなかで最大の区ではなく、おそらく、いちばん〝目立つ〟区でもないのは偶然ではありません。今日のようにふくれあがったモスクワの他の多くの区とちがってわがソコーリニキには、大住宅団地建設用の大きな空き地がなかったので、新設する住宅団地は古くからの建築場所に点在的に〝はめこむ〟ほかなかったのです。とはいうものの、ソコーリニキの住民たちには、住宅がかなりよく保障されています。



ソコーリニキ区人民代議員ソビエト執行委員会議長ドミトリー・イリイン

しかしそれは、新設住宅を配分するさい困難が生じなかったというのでは決してありません。現に困難はいくつもあるし、近々二、三年のうちに一掃できるなどとは私たちは考えていません。しかしこれらの困難は当然ありうることです。なぜなら、いま当面している問題は、単に人々に家を与えることだけではなく、人々のために最大限の生活上の便宜と文化的レジャーの条件をつくりだすことだからです。

一例をあげましょう。最近の7年間に私たちは一四〇〇の建物を撤去しました。そこに住んでいた人々の全部をソコーリニキ区内に転住させきれず、モスクワ市内の他区内の住宅も提供しました。当然のことながら、これを喜ばぬ人たちもいました。みんなこの区に住みなれていたし、職住が接近している人が多かったし、また近親者や友人がごく近所に住んでいて、別れたがらない人たちもいました。新しい転住者たちの当然な希望を最大限に充足させるために、いくつもの転住計画を練り上げねばなりませんでした。この複雑な局面にあって、区ソビエト代議員たちは区ソビエト執行委員会を助けて大いに活動し、〝紛争〟のほとんどすべては首尾よく解決されました。

ソコーリニキでは大建築工事は行われてはいないとはいえ、一九七六年と一九七七年の上半期だけで二〇万平方mの住宅が建設され、そのおかげで七〇〇〇以上の世帯の住宅条件が改善されました。区内に新設された設備の完備した住宅の数は、最近の7年間に4倍近くに増えています。この点で、次の数字をあげておくほうがいいでしょう――過去10年間に四八〇万人のモスクワ市民の住宅条件が改善されましたが、モスクワ市の現在の総人口が八〇〇万人に近いということを考慮に入れるならば、本誌の読者のみなさんもこの四八〇万という数字を通して首都モスクワの住宅建設がいかに大規模であるかが分かっていただけるはずです。

さて、わがソコーリニキ区の当面の見通しについてですが、目下、ノボキーロフスキー大通りの建設工事がすすんでおり、これによってソコーリニキの面目はおおむね一変するでしょう。



自宅のバルコニーでお客をもてなす仕上げ工のニコライ・アゲーエフと妻のガリーナ

私たちはさらに一〇万平方mの住宅の建設、欧州最大の商業会館(デパート)、住民にたいするあらゆる生活サービス事業を一手に扱う生活会館その他の建設を計画しています。

ニコライ・アゲーエフ

仕上げ工（ソコーリニチェスキー・バル通り38号棟）

以前には私はモスクワの都心部にある広さ13平方mの部屋に母親といっしょに住んでいました。結婚後まもなくソコーリニキの新しい住宅団地の16階にある3部屋のフラット（居住面積約50平方m）を提供してもらいました。広い玄関の間、便利なキッチン、浴室、トイレ、ダストシュート付きで、2カ所にあるバルコニーから首都モスクワが一望のもとに眺められます。

私たち夫婦の賃金は月額二八〇ルーブル（妻が一三〇ルーブル、私が一五〇ルーブル）ですが、家賃は月に8ルーブル14コペイカ。公共料金については、暖房費が3ルーブル88コペイカ、上下水道費が1ルーブル16コペイカ、温水料金が1ルーブル60コペイカ、共同テレビアンテナ代が15コペイカです（1ルーブルは一〇〇コペイカ、1ルーブルは約四〇〇円）。

以上に電気料金（照明と、電気レンジはじめ家庭用電気器具類にかかる）を加えても、わが家の住宅費の総額は月に20―22ルーブルを超えないで済んでいます。

ウラジーミル・マスリャエフ

内科医（マレンコフスカヤ通り16号棟）

私はこれまでもう7年も救急医療隊で働いています。妻も医師です。私たちは中等学校も大学も同じで、結婚したてのころはソコーリニキとは別の区にある両親の家に住んでいました。この家は狭くて、私たち夫婦は小さな一室で暮らしていました。区の執行委員会は私たちを住宅条件改善該当者のリストに入れてくれ、第1次審査にパスして住宅をもらいました。私の職場は当時すでにソコーリニキ区内にあったので、この家から勤め先に通うのにたいへん時間がかかりました。まもなく、区の執行委員会が援助してくれたおかげで、ソコーリニキ区内の住宅と交換してもらうことができました（ソ連では双方の居住者が同意のうえで、住んでいる住宅を交換するケースがよくある）。初子の息子ともども一家3人が住むわが家のフラットは、居住面積45平方mで部屋が3つあります。

私はソコーリニキが大好きです――すばらしい公園があり、空気がきれいで、美しい、みどりの豊かなこの区が。しかし前に住んでいた場所にはひじょうに気立てのよい隣人がたくさんおり、当時はよくこの人たちと郊外にハイキングに行ったり、特に新年を始め、いろいろな祭日をともに祝っていました。



救急医療隊の医師ウラジーミル・マスリャエフ

住所が変わり、この人たちと会う機会が少なくなったとはいえ、いまでも仲よく交際しています。しかし新居に移ってからも、私たちには多くの知り合いができ、映画館や劇場にいっしょに行ったり、ソコーリニキ公園を散歩したり、夏にはよく郊外へ出かけています。

ジナイダ・ロマヌイチェワ

年金生活者（ルサコフスカヤ通り25号棟）

私は10月鉄道（モスクワ＝レニングラード線）管理局の会計係として36年間働きました。2人の娘はもう成人しました。下の娘は技師で12歳の女の子がいますが、夫とは離婚しました。私たちはみな別々に暮らしてきました。

私が年金生活に入ると、下の娘は同居して孫娘の世話を手伝ってほしいと言ってきました。ところが、いっしょに住むために、私が住んでいた部屋と、娘と孫が住んでいた部屋を併せて、どこか一つのフラットと交換したいと思って探したんですが、なかなか見つかりませんでした。

ちょうどそのころ下の娘は、職場のすぐ近くに住宅建設協同組合が建てていたアパートが完成に近づき、ここに3部屋のフラットが数戸まだ空いていることを知りました。そこで家族会議を開いた結果、この協同組合に加入して、フラットを購入することに決めました。

バルコニー、キッチン、浴室、トイレ、玄関の間のほか、3部屋（面積43平方m）あるこのフラットの購入価格は七〇〇〇ルーブル（約二八〇万円）でした。この全額の40%――二八〇〇ルーブル（一一二万円）は即金払いで、残額は15年間の月賦払いという規定です。このローンは国家が提供してくれますが、住宅購入価格の0・5%が貸付金の利子として徴収されます。

もちろん、最初の払い込み分の二八〇〇ルーブルを工面するのも容易なことではありませんでした。私が在職中にためたいくらかの貯金があり、次女が購入代金の一部を出し、長女の家族も援助してくれました。それに、私が辞めるとき、鉄道管理局が出してくれた一カ月分のボーナスもありました。



年金生活者ジナイダ・ロマヌイチェワ

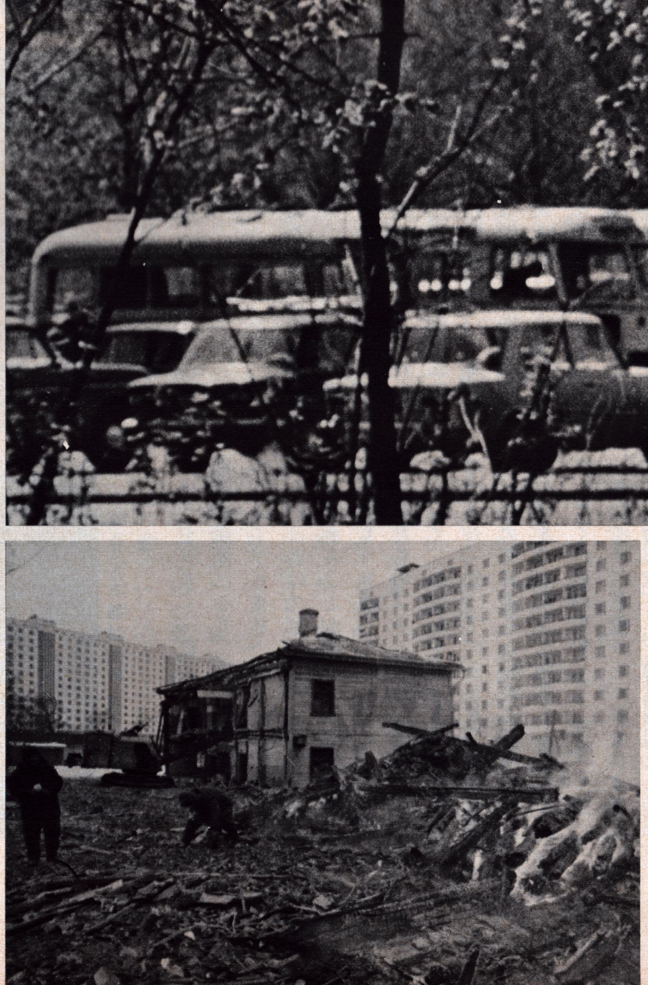
ちょうど折良く、私の10年期限の生命保険が満期になり、国家保険局が一〇〇〇ルーブル支払ってくれました。

というわけで私たちは必要な金額をかき集めることができ、協同組合アパートはもう完成していたので2カ月後に自分たちのフラットに入居しました。こうして、お金がずいぶんかかったわけですが、知ってのとおり、この住宅に住むのを辞退した場合には私たちがその日まで納入した積立金を直ちに返却してくれるのです。

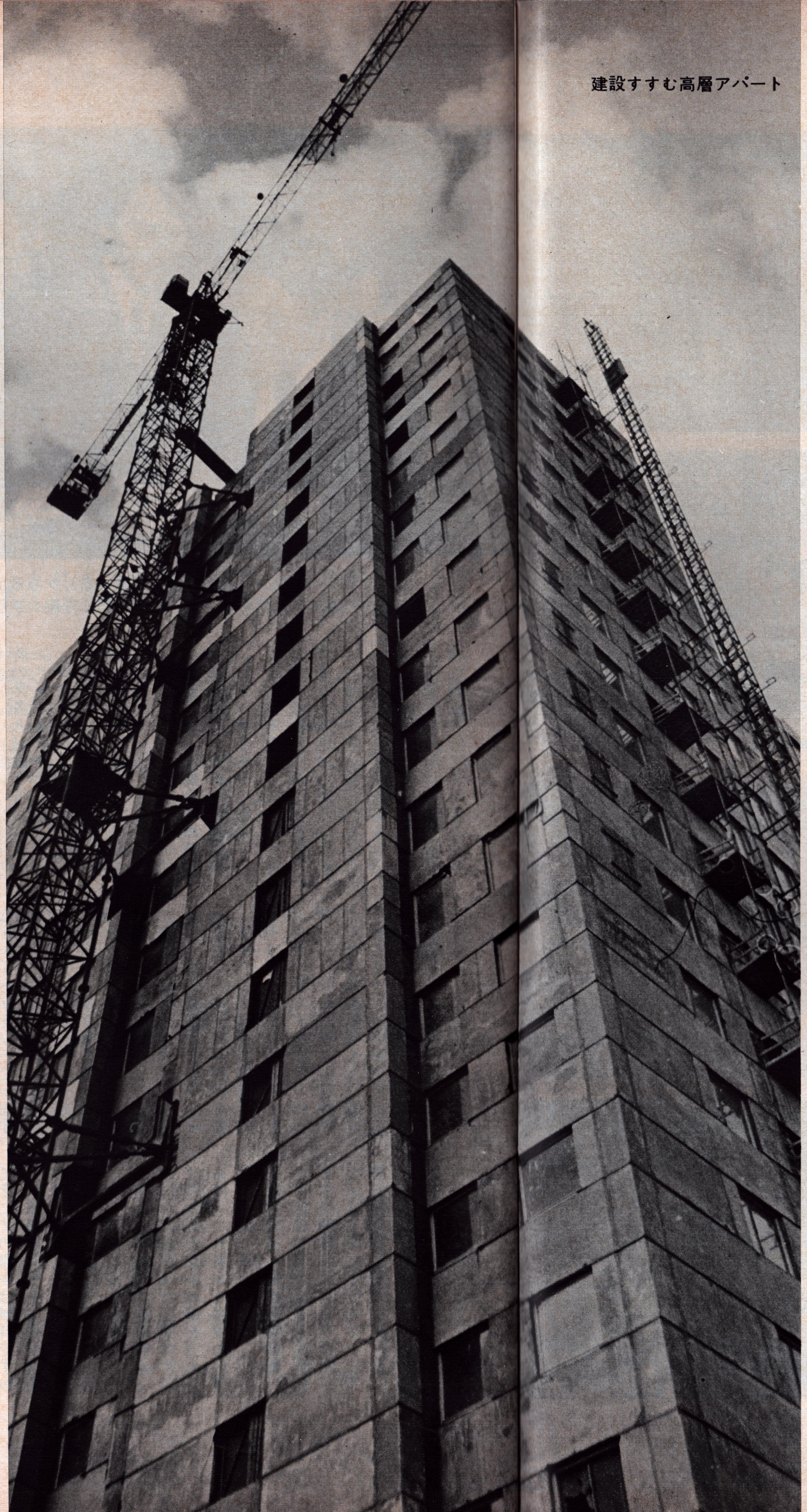
新居で生活しながら、私と次女は提供された国家ローンの返済費として毎月24ルーブル支払っています。そのほかにも、共益費、国家ローンの利子、将来のアパート修繕用積立金の合計が月平均で25ルーブルあります。国家ローンを完済したあとの負担は、共益費だけになります。



ソコーリニキ区内には緑が多い。背景に見えるのはモスクワ最大の寺院――ボスクレセーニヤ教会（19世紀建立）。



最後の木造住宅が取り壊される……



建設すすむ高層アパート



ソコーリニキ公園には乗馬学校もある。



▲詩人ミハイル・レールモントフ（一八一四――一八四一）の名前を取った広場で…（銅像はレールモントフ）



通りを散歩する若い一家

“私たちは知識を著しく広めた”

——労働大学訪ソ代表団員に聞く



ビクトル・イワノフ政治教育会館長（右）から政治教育セミナーのカリキュラムについて説明を聞く労働大学代表団一行

昨年の11月から12月にかけて、日本の全国的なマルクス主義政治学校である労働大学の代表団（団長は坂本秀行・同校専任講師）がソ連を訪問した。代表団員はモスクワでマルクス・レーニン主義研究所の学者と討論を行い、グルジア共和国を旅行した。

本誌編集部は代表団の帰国に先立って、団員たちに旅行から得た印象を語ってもらった。

佐藤礼次・労働大学事務局次長・『まなぶ』誌編集長

「グルジア共和国の首都トビリシで私を驚かせたのは住宅建設の規模でした。私はこの都市へ7年前にも行きました。この期間に市の姿は大きく変わり、新しい、近代的な特徴をおびました。私たちはクラ川の高い岩だらけの岸の上の、市の創立者ワフタング王の像を訪れました。7年前はその周辺は小さな平屋の家が密集していましたが、いまではそのあとに公園ができ、隣接して立っている木造の教会は修復され、近くにモダンな快適なアパートがそびえています。そして、市内のどこでもそうでした。

近年グルジアと日本との接触と交流は著しく強まりました。私たちはさまざまな時期に日本を訪れた人々といたる所で出会いました。私たちと話し合ったO・チェルケジヤ・グルジア共和国閣僚会議副議長も来日していました。私たちがグルジアのブドウ酒の味を試したトビリシの実験ブドウ酒工場の技師も、ボルジョミのミネラル・ウォーターびん詰め工場の工場長も来日の経験者でしたし、その他多くの人々が日本を訪れていました。



▲モスクワの政治教育会館を訪れた一行。一九二〇年の第3回コムソモール大会がここで開かれ、レーニンが青年たちに学習の重要性を訴える演説をしたことでも有名。

グルジアの保養地ボルジョミのサナトリウムを訪問したことは私たちにとって有益でした。ソ連のサナトリウムとは、私たちが考えていたような重い患者を治療する病院ではなくて、ここはまず第一に、あれこれの発病の素因のある人々を対象とした予防医療施設で、勤労者の大多数にとってそこでの滞在は無料ですから、広範なサナトリウム網の創設は社会主義の重要な獲得物とみなすことができます。

グルジアに滞在し、グルジア人民の革命闘争を見聞きしたことは、ソ連の歴史についてのわれわれの知識を広めました。これもまた私たちの日常の活動に役立ちます」

平岡幸雄・労働大学講師

「トビリシの諸民族友好博物館の参観は私に大きな印象を与えました。私たちはここで、第2次世界大戦中、ヒトラーの軍隊はグルジア共和国の国境を越えはしなかったが、グルジア国民は戦線に七〇万人の息子を送ったこと、そのうち三〇万人が戦死し、数万人が負傷して帰ってきたことを知りました。すべての対談の中で私たちの話し相手から新たな戦争挑発者への憎悪がはっきりと感じられた理由が分かりました。私たちは平和へのソビエト国民の熱烈な志向がすべてのソビエト国民の心底から出ていることを理解しました。

私の個人的な要望により私たちのためにグルジア盲人協会の訪問が組織されました。協会の指導部は私たちをとくに手厚くもてなしてくれました。トビリシ市立盲人クラブでは、私たちのためにアマチュア合唱団のコンサートと小さなレセプションが催されました。私たちは協会の四五〇〇人の会員の中に多数の傷病軍人がいることを知りました。盲人協会の任務は、目の見えない人が学習や労働活動にもっと積極的に参加するのを助けることにあります。協会は教育省や保健省と一緒に盲人のための特別の学校や病院を建設したり、盲人の労働向きに考えられた教育・生産企業を開設したりしています。協会は、盲人に障害年金を支給する国家とならんで、自分の基金からさらに特別のボーナスまで支給しています。私たちはソ連では目の見えない人々が自分を社会の完全な権利をもった成員と感ずることができるように非常に多くのことが行われていることを知りました。私は盲人にたいする配慮の例を見ても社会主義の人道的な本質がわかると考えます」

坂本秀行・労働大学専任講師

「代表団長として私たちの旅行が成功だったことを言いたいのです。成熟した社会主義の発展過程の理解にとって、モスクワでのマルクス・レーニン主義研究所の学者たちとの話し合いは私たちに多くのものを与えました。話し合いはソ連の現実をいっそうよく解明するのを助け、私たちの知識を著しく広めました。

グルジア訪問のために選ばれた見学対象と話し合いのテーマもきわめて有益でした。トビリシの近くのルスタビの製鉄コンビナートを見て、私たちは環境保護の仕事がどんなによく組織されているかを納得しました。ルスタビは製鉄と化学工業の都市です。しかし私たちはこの町では大気汚染を少しも感じませんでした。樹木が多いことでは製鉄コンビナートの敷地を本物の森林と比較することさえできます。私たちが見学した圧延機は世界的な水準にあります。労働者の労働条件はよく、山の中の予防病院はまったくすばらしいものです。

私たちは、グルジア国民が共和国経済の発展と社会主義建設で収めた成功は諸国民の相互援助と友好にもとづいたレーニン主義的民族政策の直接の結果であると考えています。この意味においてソ連の数十の諸民族の出身者が働いているルスタビ市自体を、この政策の象徴、この政策が勤労者にもたらした有益な結果の明瞭な証拠と考えることができます」

第1回ソ日金属腐食・防食セミナー



1977年12月6日、ソ日金属腐食・防食セミナーにかんする議定書に調印するY・コロティルキン・ソ連科学アカデミー会員と橋本宙一・工学院大学名誉教授。

1977年12月6日から9日まで、モスクワのL.Y.カルポフ記念物理化学研究所で第1回ソ日金属腐食・防食セミナーが開催された。このセミナーには、ソ連側からはY・コロティルキン・ソ連科学アカデミー会員、A・リャプチェンコ教授、N・トマショフ教授、A・スホチン教授その他、日本側からは橋本宙一・工学院大学名誉教授（代表団長）、佐藤教雄・北海道大学教授、岡田秀弥・新日鉄基礎研究所長その他が参加した。

近年、物理化学研究の分野をはじめ、ソ日間の科学交流の拡大が特徴となっている。この10年間には、電気化学や触媒にかんする合同セミナーも開催されてきた。今回のセミナーは、ソ日両国の腐食・防食専門家の定期的な会合の端緒となった。

ソ日両国にとって、金属の腐食を防ぎ、金属製品や建設物の寿命をのばす問題は、最も重要な科学技術的、経済的課題のひとつとなっている。過去10年間の特徴である両国の金属備蓄量の急増、腐食されやすい環境の中で利用される金属の量の急増などが、腐食による損害を大きくさせている。現代工業の多数の分野における技術革新は、耐食性の強い金属の導入、信頼性の高い防食法の探求を痛切にもとめている。従ってこの分野の科学研究の成果の交換は、疑いなく両国の学者にとって有益である。

第1回セミナーの開催に先立って、このようなセミナーを2年に1回開くことや、その開催条件を定めた議定書の調印が行われた。

ソ連には外国人労働者がいるか?

法学博士候補　エルネスト・アメチストフ

ソ連には外国人労働者がいるだろうか? もちろんいる。いるというだけでなく、その数はますます増えている。これはソ連が対外経済交流を積極的に発展させ、国際分業にますます広く参加しているからである。しかしソ連国内の外国人労働者は、西側のいわゆる〝ガストアルバイター〟(出かせぎ労働者)とは根本的に異なる。ソ連には、このような労働者は一人もいない。

発達した資本主義諸国では、職を求めてやって来た外国人たちを普通〝ガストアルバイター〟と呼んでいる。かれらは祖国で自分と家族を養ってゆく希望を失った、実質的には破産者である。窮地に陥れられた外国人労働者たちは、どんな条件にも同意しなければならない。そして通例として、最もつらい、最も賃金の安い仕事をしている。同時に、かれらが行使できる権利は、その国の市民の場合よりもはるかに小さい。

ソ連においては、外国人市民と市民権を持たぬ外国人にたいして、ソ連憲法に定められている権利と自由がソ連市民の場合とまったく同じように保障されている。そしてこれらの権利には、労働と労働関係といった最も重要な生活分野の諸権利もふくまれている。

ILO(国際労働機構)の条約・勧告実施専門委員会委員を長年つとめたソ連の有名な法律家ラザリ・ルンツ教授の言葉を借りれば、労働関係の分野では、外国人には少数の特別の例外を除いて、ソビエト市民にたいすると同じ権利能力が与えられているのである。

では、その〝例外〟とは何か? たとえばソ連航空法第一九条は、航空機の乗員はソ連市民に限るとしており、ソ連船舶運送法第四一条も、ソ連船舶の乗員に同じような規定を設けている。

このように外国人労働者はソ連市民と同じ労働の権利を行使し、同じ義務をはたしている。同権と差別の禁止、労働条件、労働規律、労働保護、婦人と青年の労働、労働紛争の解決、労働組合への加入その他にかんするソ連の法律の規準は外国人にも適用される。

労働関係の領域内の状態は、国際条約の規準によっても調整されている。たとえばコミ自治共和国ではブルガリアとの木材伐採協力協定により、また極東では朝鮮民主主義人民共和国との同様の協定によって調整が行われている。この地で働いている数千人のブルガリア人労働者と朝鮮人労働者は、地方の特定地域で働いている特殊の、まとまった民族的労働集団であるので、ソ連側は、これらの労働者の本国の労働法をかれらに適用することが可能であると考えた。すなわち、労働時間、生産高のノルマと賃金基準、労働保護規準、内規などは、それぞれの本国の労働関係法令によって調整されている。言いかえると、外国の市民(この場合はブルガリアと朝鮮民主主義人民共和国の市民)は労働関係の領域で、事実上それぞれの本国の法律のもとに置かれているのである。

外国人がソ連の労働集団と一緒に働く場合には、二つの法律が、つまりソ連の法律と、その労働者を派遣した国の法律が適用される。たとえば、ハンガリー、ドイツ民主共和国、ポーランド、チェコスロバキアの労働者と専門家が参加して建設している、オレンブルグからソ連西部国境にいたるガスパイプラインの建設現場では、これらの働き手の雇用、解雇、賃金、社会保障、労働組合の権利その他の問題は、これらの国々の法律によって調整されている。他方、労働時間と休息時間、労働保護、安全措置などは、ソ連の労働法にもとづいて調整されている。

ソ連にある国際経済団体、国際機関、共同学術機関などの勤務員にも、この同じ原則が適用されている。ここでも二つの法律(ソ連と外国の法律)が適用されているが、いくつかの場合には、第三の調整基準が適用されている。それは、国際的合意、国際機関の規約によって設けられた基準である。

賃金体系も興味のあるものだ。ソ連における石油工業とガス工業の共同建設の実地について見てみよう。ここで働いているブルガリアの市民にたいして、ソ連の建設機関は、ソ連で実施されているノルマと賃金基準にしたがって、賃金と各種の割増金を計算している。これに加えて、計算された賃金の一二〇%がブルガリアの社会的消費・蓄積フォンドに払い込まれている。この結果、ブルガリア側へは、ブルガリア市民の労働によってつくり出された付加生産物のすべてと、これらの市民の社会保障にあてられる金額が戻ってくることになる。(ついでながら、西側にはこのような例は恐らくあるまい。なぜならそこでは、受け入れ国は普通、外国人労働者によってつくり出された剰余価値と社会保障への払込金を横領しているのだから)。

ソ連で実際に行われているこのようなやり方は、外国人の特殊な労働・生活条件を最大限に考慮し、かれらの労働の権利を確実に保護することを可能にしている。国際協定では、外国人労働者のために、数多くの特典が定められている。とくに到着の際の一時補助金、交通費と手荷物運賃の補償、旅行中の日当の支給、本国の祝日を祝うための追加の有給休暇、直接税と源泉徴収の免除、そして最後に賃金の本国への送金などの特典が規定されている。

西側で〝ガストアルバイター〟をめぐって起きているような問題は、ソ連で働く外国の労働者と専門家については一つとして存在しないのである。

L・コーガンの日本公演



ソ連の有名なバイオリニストでソ連人民芸術家のレオニード・コーガン教授の日本公演が1月23日から始まる。日本への出発を前にした同教授にインタビューした(聞き手マリーナ・ルイクリナ本誌記者)

あなたが初めて日本を訪れたのは、20年前の一九五八年でしたが、この間に日本との普通のつき合いが、いまでは特別の間柄になっているにちがいないと思われるのですが…

もちろんです。私はほとんど毎年のように日本を訪れています。このため、私の演奏にたいする理解がどのように変わってきたかが非常によく分かります。初め人々はヨーロッパ音楽を知るためにコンサートへ出かけました。かれらにとっては多くのことがまだ不可解なものでした。ところがこんにちでは、人々は演奏のすべてのニュアンスを理解し、作品の解釈に同意あるいは不同意を表明しています。

あなたは今回の日本公演では独奏会だけを準備していますが、その理由は?

私は幾度も日本のさまざまな交響楽団と共演しました。これらの交響楽団は、ソリストを非常に繊細に理解するすばらしいものです。にもかかわらず私は、独奏の方をとります。独奏のなかにこそ、自分の態度を聴き手にとどける、より大きな可能性があると思えるのです。

日本公演の曲目は?

バッハ、ブラームス、プロコフィエフ、ラベル、ハチャトゥリャンらの作品を演奏することにしています。日本で最も高く評価されているロシアの作曲家の一人、チャイコフスキーの作品がプログラムに入っていないので、がっかりする人があるかもしれませんが、今回は、日本でこれまでに演奏されたことのない新しい作品を演奏してみたいと思っています。

作品を初めて演奏する時はどんな感じですか?

いつもたいへん興奮します。聴衆が作品の解釈に満足するかどうかが、演奏全体のクライマックスです。芸術家には、自分だけで音楽を体験するだけでなく、自分の体験を聴衆に届けることも必要なのですから。

最初の演奏のあと、作品の解釈は変わるものでしょうか?

私は同じように弾いたことは一度もありません。演奏に先立っていつも、その作品の再検討が行われ、多くの場合、その解釈が変わります。後は、その作品を聴衆がどう理解するかに多くがかかっています。私はどの演奏会の聴衆からも、たとえ小さなものにせよ、新しい解釈上のヒントを与えられています。

あなたは一年の大部分を演奏旅行に費やしていますが、いつ教えているのですか? あなたはモスクワ音楽院バイオリン科の主任教授なのでしょう?

モスクワにいるときは、毎日音楽院で忙しく働いています。私のところには多くの学生がいます。かれらもまた、職業音楽家を志して勉強していますが、職業音楽家にとっては、コンサートへの出演なくしては真の創造はないのです。かれらもこのことを知っていて、私が長い間留守にしても、腹を立てるようなことはありません。ついでですが、私のところでは佐藤陽子、竹田基、徳江比早子さんら、こんにちすでに有名になっている日本人バイオリニストが勉強しました。

このような度重なる日本訪問を、あなたの家族はどう見ているでしょうか?

妻のエリザベータ・ギレリスはバイオリニストで、私ともたびたび共演しています。息子のパーベルもバイオリニスト、娘のニーナはピアニストです。かれらも日本で公演したことがあるので、日本の音楽ファンの皆さんもご存知でしょう。このように家族のすべてが、われわれの職業の特質を理解しており、誤解が生まれる余地はないのです。

★レオニード・コーガン・バイオリン・リサイタル。1月23日・東京文化会館、1月25日・函館市民会館、1月27日・藤沢市民会館、1月30日・大阪フェスチバルホール、2月1日・山口市民会館、2月4日・静岡市公会堂、2月6日・東京郵便貯金ホール。問合わせ先——新芸術家協会、電話03・501・6458。

ソ日経済学者のシンポジウム



右　シンポジウムで発言するセルゲイ・ニキーチン教授（右から3人目の立っている人）

左　日本代表団の団長・大内力教授

一九七七年11月28日から12月1日までモスクワの対外友好会館で第11回ソ日経済シンポジウムが開かれた。

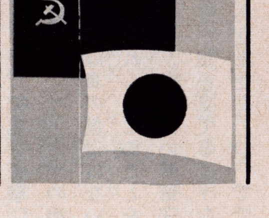
ソ日両国の経済学者が会合を持つというこのよき伝統の基礎は、一九六六年に据えられた。その時からこのシンポジウムは毎年モスクワと東京で交互に開かれている。

モスクワでのすべてのシンポジウムの主催者は、ソ連科学アカデミー幹部会である。第11回ソ日経済シンポジウムの直接の組織と開催は、ソ連科学アカデミー世界経済・国際関係研究所にゆだねられた。シンポジウムのソ連代表団は世界経済・国際関係研究所副所長ウラドレン・マルティノフ教授を団長とする15名。代表団に加わったのは、世界経済・国際関係研究所、ソ連科学アカデミー経済研究所、同東洋学研究所、ウズベク共和国科学アカデミー経済研究所、その他の学術施設で、ソ連と日本の経済問題、経済学の理論的諸問題を専攻している指導的な経済学者たちである。

日本の代表団長は日ソ経済学者の会常任委員長の大内力・東大教授。代表団のメンバーは、柴垣和夫・東大教授、志村嘉一・専修大教授、尾上久雄・京大教授、望月喜市・小樽商科大教授、藤田整・大阪市立大教授だった。

確立された伝統に従って会議の第1日目には世界経済の理論的諸問題が討議された。会議の第2日目、第3日目にはそれぞれ日本経済の問題、ソ連経済の問題が討議された。主要な報告をしたのは日本側からは尾上教授、志村教授、望月教授、ソ連側からはソ連科学アカデミー世界経済・国際関係研究所部長セルゲイ・ニキーチン教授、同研究所の指導的研究家イリーナ・オサッチェワ博士、ソ連科学アカデミー経済学研究所副所長ビクトル・チェルノベツ教授である。

シンポジウムが終わってから本誌編集部は大内教授、ドミトリー・ペトロフ教授、ヤコフ・ペブズネル教授にシンポジウムの作業についてそれぞれ印象を語ってもらった。



有益な意見の交換

大内力教授――日本とソ連の経済学者の会合の定期的な開催は、私にはきわめて有益なものと思われます。すべてのブルジョア諸国のうち、私の見解では、マルクス主義的立場からの経済問題の研究がもっとも高い水準にあるのは、ほかならぬ日本です。私たちが代表している会はこの方向の学者を統合しているもっとも権威ある組織です。一方、ソ連は日本の諸問題の研究がもっとも広範に、真剣に行われている国の一つです。これに関連して、ソ連の学者と意見や情報を交換し、日本の緊要な問題をどのように評価しているかを知ることは私たちにとって興味深い



し、また有益です。

そのほか近年ますます多数の日本の学者が社会主義経済に興味を持ち、ソ連その他の社会主義諸国の経験を研究し、各国での成果を比較しています。この点でもソ連の経済学者の新しい研究を知ることは、私たちにとってもきわめて有益でした。

いま述べたすべてのことからして、私は過去11年間になしとげた共同研究を高く評価することができます。私たちはお互いによりよく理解するようになりましたし、私たちのあいだに率直な、強固な、実務的な交流が確立されました。

最近のシンポジウム、とくにこのシンポジウムで、私たちはソ連経済学者の若い世代の代表者の発言を聞きました。これは楽しい発見でした。私たちは東京で開かれる次のシンポジウムで日本の若手の学者に発言の場を与えるためにあらゆる措置を講ずるでしょう。

モスクワでのシンポジウムの開催にソ連科学アカデミーのような権威ある国家機関がたずさわっているのを私たちは羨ましく思っていると言わざるをえません。それによって今回のシンポジウムも最高水準で組織することが可能になったからです。

ドミトリー・ペトロフ教授（ソ連科学アカデミー極東研究所日本部長）――過ぎ去った11年間を顧みて、双方からの情報の科学的水準がこの期間に著しく向上したことを指摘したいのです。いま私たちは世界経済やソ日両国の経済発展のさまざまな面のより深い、より複雑な問題にふれています。

報告の討議に参加する人々の範囲はたえず拡大し、討論のテーマも拡大しました。このモスクワ・シンポジウムには多くの有能な若手が参加しました。シンポジウムの作業にノーベル賞受賞者のレオニード・カントロビチ・ソ連科学アカデミー会員、著名な経済学者であり社会主義再生産理論の専門家であるアレクサンドル・ノトキン・ソ連科学アカデミー準会員、有名な農業理論問題専門家のウラジーミル・ベンジェル教授、その他のもっとも著名なソ連の専門家が参加したことは、シンポジウムの水準を著しく高めました。

鋭い論争も友好的に

ヤコフ・ペブズネル教授（ソ連科学アカデミー世界経済・国際関係研究所日本経済部長）――ソ日経済シンポジウムにとって特徴的なことは、双方からのシンポジウム参加者が多くの場合に意見を同じくする者として行動していることです。報告にかんする意見の交換は時には鋭い性格を帯びますが、しかしつねにもっとも友好的なふん囲気で行われています。

シンポジウムのテーマはすでに伝統的なものになりましたが、討議される報告のテーマはつねに多種多様で緊要なものです。それぞれの会合は今後の研究活動のための有益な刺激を与えています。終了した第11回シンポジウムも例外ではありませんでした。ソ連代表団はその結果に深く満足しています。

日本経済は現在複雑な段階を経験しています。私たちは、現代日本の経済的発展の諸問題についての日本の学者の考えを非常に興味深く聴きました。一方、世界経済・国際関係研究所の学者は現代ブルジョア経済学理論の批判的分析の諸結果を伝えました。これらの理論の内部には新しい、きわめて暗示的な現象、たとえばブルジョア学者自身の側からの支配的なブルジョア経済学派（新ケインズ学派、マネタリズム）にたいする辛らつな批評が見られます。

私は、日本の学者にはビクトル・チェルノベツ教授の報告とソ連科学アカデミー経済学研究所の学者の発言に含まれている、発達した社会主義の最重要の特徴の分析が一定の関心を呼び起こしたのではないかと思います。

以前と同じように、世界経済・国際関係研究所はシンポジウムの資料を分冊で刊行します。第12回シンポジウムを一九七八年秋に東京で開催するという予備的な合意も達成されました。その主テーマは「世界経済の長期予測」です。

国内問題

古い年から新しい年へ

『今日のソ連邦』評論員 ミハイル・エフィーモフ

一年の締めくくりとスタート

歳末——それはいつも非常に緊張した時期である。それぞれの月に名前をつけねばならぬとすれば、12月は"年次報告の月"と呼ぶよう、私はためらうことなく提案したい。年次報告を作成するのは財政専門家だけではない。学者もスポーツ・コーチも幼稚園長も劇場管理者も報告書を書く。要するにすべての人が締めくくりをするのである。

12月には、過去一年あるいは四半期に失われたものを取り返す最後のチャンスもある。そのうえ、12月には、来年のことを先取りして準備したり、将来の計画を作成することもできる。

12月の半ばにはソ連最高会議定例総会（12月14日〜16日）が開かれた。代議員たちは、ソ連経済・社会発展国家計画と一九七八年度ソ連国家予算を承認した。これらの文書はいまや、無条件に施行されねばならない法律の性格を帯びるにいたった。一九七八年度計画の主要目標は生産の増強である。社会的労働の生産性は国民経済全体で3・5%の上昇、勤労者一人当たりの実質所得は3%の伸びとなる。労働者と職員の月平均賃金は2・2%、コルホーズ（集団農場）員の労働報酬は4%のそれぞれ増となる。そして一〇〇〇万人以上の人々の住居条件の改善が予定されている。

……ソビエトの国ではクリスマスの祭りはほとんど行われない。そして主たる楽しみは、新年を迎える楽しみである。

12月の街や商店では、楽しげなクリスマスの『ジングル・ベル』のメロディは聞かれないが、生活のリズムはめだって高まる。

12月の新聞紙面から

わが国の12月の律動をうまく伝えるには、新聞の第1ページにのせられたいくつかのニュースにざっと目を通すだけでよい。

——レニングラードのキーロフ工場の主コンベヤから15万台目のキーロベツ型トラクタが生産される。

——バイカル湖北端のニジネアンガルスク埠頭の改修始まる。これはバム（バイカル＝アムール鉄道）最大のセベロムイスク・トンネルの建設によって生じた輸送量の急増により必要となったもの。

——ウクライナのコルホーズとソフホーズ（国営農場）が五〇五〇万トンのビートを工場に納入。これは、これらのコルホーズとソフホーズが引き受けた取り決めより一七〇万t多い。

——タジク共和国では、八五万tの原綿が調達所に引き渡された。

——グルジア最大のトビリシ火力発電所が七〇〇〇万KWhの電力を年次計画をこえて生産。

——ゴメリ州（ベロルシア）のチェルボノエ湖底の腐泥炭——貴重な有機肥料となる動植物質沈殿物の粘泥層の工業的採取に成功。

称賛もあるが批判も……

多くの数字、人名、地名などがソ連の読者の視野に入る。腐泥炭の採取にかんする前記の報道が（率直に言って私自身はこの腐泥炭という言葉を初めて知ったのだが）専門の出版物ではなく、ソ連共産党中央委員会の機関紙『プラウダ』に掲載されたことを、われわれはもはや少しもふしぎに思ってはいない。すべての人間が働く社会では、全国の企業や建設場の集団が達成した成果が読者に紹介され、個々の働き手が達成したすばらしい成果について語られるのである。

たとえば、この国の有力紙『イズベスチヤ』の日曜付録『ネジェーリャ』の第一面全体にイワン・グーロフの肖像写真が掲載されたことがある。別に記憶の糸をたどっていただかなくてもよい。ソビエト映画の"スター"のなかにも、体操選手のなかにも、この名前が出てきたことはないからだ。この人は"永久機関"の発明者でもなければ、大臣の職を得たこともない。イワン・グーロフは、ことし高い作業指標を達成した、モスクワ近郊のある生産合同で働く印刷機械オペレータなのである。

ソビエトの新聞は、仕事上の英雄たちの姓名をつたえ、仕事の成功について書くと同時に、後れをとっているものたちについても世間に知らせ、あらゆるランクの責任者にきびしい批判をくわえている。たとえばプラウダ紙は最近次のように書いている——「わが国民経済は、単一の、相互に緊密に関連し合った総合体である。ある一つの環における歩調の乱れはたちまち他の環の作業に否定的影響を与える。たとえば、鋼材生産の計画課題の不履行は、機械製作部門の発展を阻害し、建設場の作業の遅れをもたらす」

ソ連は巨大な建設場であって、そこでは共産主義という未来社会が建設されている。われわれのすべての力、すべての資金、すべての考えが、この課題の遂行に集中されている。ウクライナで余計に集められたビートも、グルジアで計画以上に生産された電力も、一五万台目のキーロベツ型トラクタも、すべては共産主義をめざして働いているのである。だからこそ、会計係と大臣が、コルホーズ員と冶金専門家が、農業機械運転要員と教員が、一年間の自分たちの仕事を総括するにあたって胸の高鳴りをおぼえるのである。のみならず一九七七年は、ソビエト国家60周年記念の年であり、新憲法制定の年でもあった。それはやがて来る第10次5ヵ年計画3年目をスタートさせる年でもあった。一九七八年12月には5ヵ年計画の道は半ば以上をすでに後にしていることだろう……

過ぎ去った年の総括は、新しい年の第1四半期に行われる。しかし、すでに確信をもって言えるのは、ソビエト国民がその結果を恥ずかしく思うようなことはないということである。計画されたことはすべて遂行される。しかも余分に遂行されることが期待できる……

喜びも悲しみも共に分かつソ連人気質

過ぎ去った年の終わりに宇宙船ソユーズ26号が打ち上げられた。ソ連の宇宙船は一年間に三度、宇宙に向かって扉を開いた。そして現代技術がいかに完全なものであるにしても、いかに綿密に飛行準備をしても、しょせん宇宙旅行は、詩人マヤコフスキーの言葉を借りれば、「未知への旅」である。そしてそのつど、ロケットで空へ運び去られる勇敢な人々のためにわれわれは本能的に心配し、そしてかれらが成功したときにはその成功を誇るのである。

米国の宇宙飛行士ネイル・アームストロングが初めて、ほこりだらけの月の表面に降りた日のことを私は思いおこす。当時、私は東京にいた。順調な「月面到着」の報道があって間もなく、私はパレス・ホテルのエレベータに乗った。そこで偶然、一組の年輩の米国人夫婦といっしょになった。非常に簡単ではあるが、私にとっては驚きの次のような会話が、われわれの間で行われた。

——おめでとう。

——なにがおめでたいんです？

——月への到達ですよ。

——でも、ここにいる私たちにそれはなんの関係がありますか？ あそこへ行ったのは、私たちの税金だけですよ。

ソビエト人なら、だれ一人としてこんなたわいもない考えを起こすものは断じていない。ソユーズ25号の失敗は、われわれを心から悲しませた。ソユーズ25号は軌道ステーションとドッキングできなかったのである。あらたな飛行経過を見まもっていたソ連のすべての人が、宇宙飛行士たちが無事にサリュート6号に"移住"したことを確認して、正直なところ、ほっと息をついた。

恐らくわれわれすべてが、学術においてであれ、スポーツにおいてであれ、また工場においてであれ、農場においてであれ、どんな成功、どんな達成をも喜びとするほど、満ち足りた生活をしているということであろう。そして、どこかのソビエト人の家で不幸や不運が起これば、われわれも腹を立てたり心を痛めたりする。社会学者が"ソ連人気質"と呼んだ特質がここにある、とわれわれは思う。

……このように、12月は出発と終末の時である。去る年は、来る年の歴史にバトンをわたすのである。

トピックス

ウルグベク学院の修復

東洋古代建築の傑作の一つ——ブハラ市（ウズベク共和国）にあるウルグベク創立の回教学院が、15世紀の初めにこの中央アジアの偉大な学者＝啓蒙者の同時代人が目にしたのとまったく同じ姿に修復された。ブハラ市の学術的修復工房の美術家と建築家たちはこの有名な建築文化財の修復に2年を要した。二つの塔、廊下、教室はかつての美しさを取り戻した。

5月にタシケント映画祭

ウズベク共和国の首都タシケントで5月23日から第5回アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国映画祭が開かれる。"平和・社会進歩・諸国民の自由のために"をモットーとするこの映画祭は、世界で最も人気のある映画祭の一つで、今回は70ヵ国以上が参加する予定。

文化と芸術

映画監督ラーナ・ゴゴベリーゼ

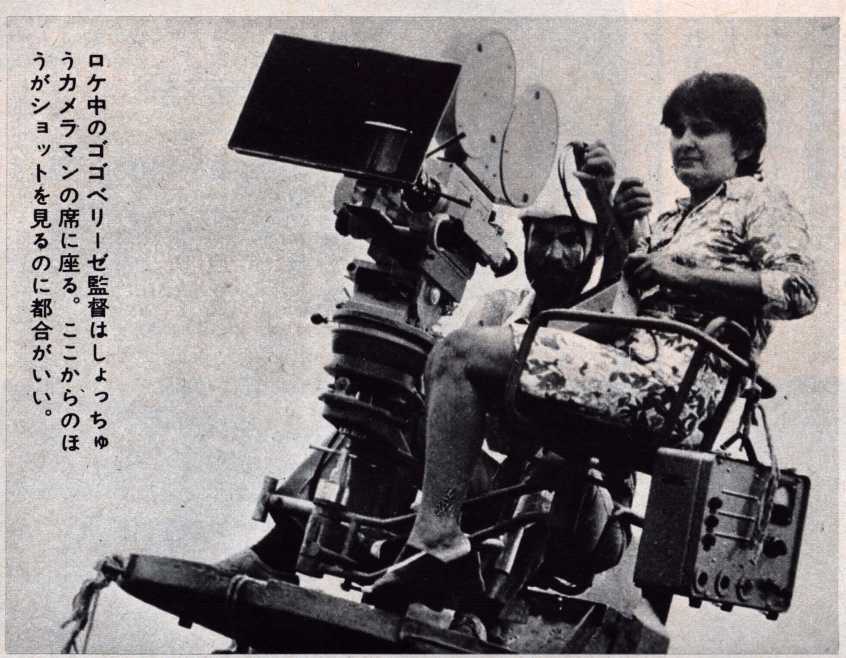
オリガ・バブカシビリ



グルジアの女流映画監督ラーナ・ゴゴベリーゼ。うしろのフレスコ画（コキ・イグナトフ作）は昔のトビリシを描いたもの。

映画監督は女の仕事ではないという声を聞くと、私はいつも同国人、グルジアの映画監督ラーナ・ゴゴベリーゼを思い浮かべ、イタリア、ドイツ連邦共和国、フランス、ユーゴスラビア、ブルガリア、チェコスロバキアで上映された彼女のいくつかの作品を思い出します。さらに、彼女がグルジア共和国映画人同盟幹部会の書記であり、また同共和国最高会議の代議員にも選ばれていることを思い出します……

ラーナは最初から映画の仕事をしていたわけではありません。中等学校を卒業すると、言語学を自分の専門として選び、国立トビリシ大学西ヨーロッパ言語・文学部に入学し



ロケ中のゴゴベリーゼ監督はしょっちゅうカメラマンの席に座る。ここからのほうがショットを見るのに都合がいい。



有名なグルジアの作家ノダル・ドゥンバーゼと

ました。それからアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンの詩の翻訳に熱中し、またかれの創作について研究論文を書いたりしていました……だが、とつぜん、映画の仕事に打ち込む不退転の決意をしたのです。ラーナはモスクワにある全ソ国立映画大学の監督学部の学生となりました。彼女の先生はソ連の指導的映画監督の一人で、ソ連映画の多くの巨匠を育て上げたすばらしい教育家セルゲイ・ゲラシモフでした。

最初の学年修了制作――学童たちの道徳的・倫理的な問題をテーマにした短編映画によって、ゴゴベリーゼは映画芸術における市民的テーマの信奉者としての自分の特質をすぐ示しました。このときからこのテーマは彼女の創作における基本的なテーマとなったのです。

ゴゴベリーゼはひじょうに多種多様なジャンルで活躍しています。彼女は記録映画も、たとえば『トビリシ一五〇〇年』でグルジアの首都――この古い都市の歴史を物語る美しい詩的な映画を製作しています。彼女の劇映画『おなじ空の下で』、『太陽を見る』、『境界』、『アーモンドの花咲くとき』は、グルジア映画の形成に疑問の余地ない貢献をしており、上記作品のうち最後の映画は全連邦コンクールで監督賞を受けました。

スタイルとジャンルの異なる自分の作品のなかで、彼女はいつも人間の性格をできるだけ完全に描き出すことをめざしています。ゴゴベリーゼが取り上げている主要なテーマは、自分の良心にたいする、社会にたいする人間の責任です。たとえば、彼女の製作した諸作品のうち最近作――ミュージカル映画『サルヒネーチにおける大騒ぎ』のなかで、彼女は生活にたいするいろいろな人々の消費的な態度と創造的な態度を物語っています。まじめな、哲学的な思索と、演出の華やかさと音楽性との結合――これがゴゴベリーゼの映画の特徴ですが、この特徴が監督の企図に特別の説得性を与えています。

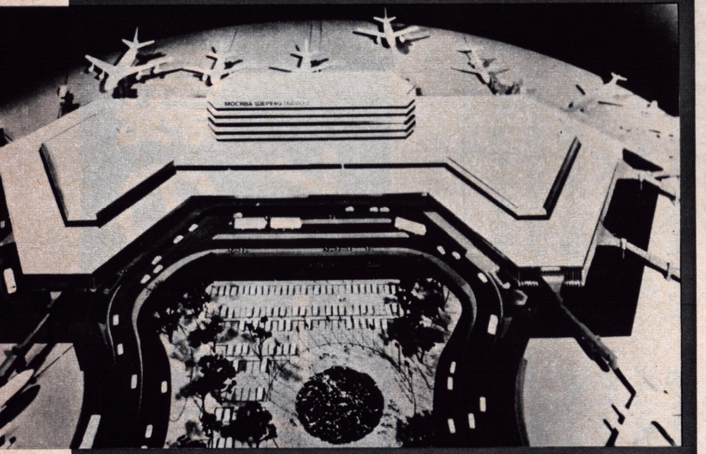
現在ラーナは新しい映画の準備に取りかかっています。それはいろいろな問題を抱え、喜びと悲しみを持ったグルジアの一女性の生涯についての物語となるでしょう。そしていつものように、新しい映画でもラーナは彼女のヒロインの内面的な世界に何よりもまず関心を示しています。このヒロインは有名な女優、グルジア共和国人民芸術家ソフィコ・チアウレーリが演ずるでしょう。

ゴゴベリーゼは自分の経験を喜んで後進に伝えています。彼女はグルジア国立ルスタベリ記念演劇研究所付属監督スタジオを指導しています。一九七七年に生徒の一人がキエフで開催された全ソ学生映画祭で一等賞を獲得したことを、彼女は誇りとしています。



ゴゴベリーゼが指導している〝グルジアフィルム〟の第2創作集団のスタッフ。目下、新しいシナリオを検討中。

トピックス



シェレメチエボ第2空港の模型

シェレメチエボ 第2空港の建設開始

シェレメチエボ空港は空路モスクワへ到着する外国のお客になじみ深い。近年観光や商用で空からモスクワを訪れる人が毎日約5000人と著しく増えたため、今のシェレメチエボ空港ではこの人波をさばくのが困難になった。

最新のサービス水準で乗客を送迎するため、古い空港ビルの隣に新空港ビルを建設することが決まった。1977年11月、ソ連民間航空省は西ドイツ、ザルツギッター・コンツェルンのリューテルバウ社とシェレメチエボ第2国際空港建設契約を結んだ。80年オリンピックに参加する外国の選手、来賓、ジャーナリスト、数十万の観光客を迎える新国際空港の起工式は11月17日、今の空港の南側で行われた。

計画によれば新空港は1980年までに開港する。多面形8階建ての新空港ビルは鉄骨構造で、正面は太陽光線をさえぎるガラス板と装飾アルミ板で外装される。新空港ビルは面積8万5000平方m、容積57万7000立方m。

エプロンは同時に19機受け入れられる。手荷物の電子計量器その他、電算機技術の幅広い導入により旅客の手続きに要する時間を5－7分に短縮できる。新空港の乗降客処理能力は〝ラッシュ・アワー〟の最大限2100人で、年間 600万人。新空港ビルの近くに1500台収容の駐車場が設置される。

イデオロギー問題

社会主義の現実的ヒューマニズム

哲学博士候補　**アレクサンドル・ツイプコ**

マルクス主義の歴史と理論を研究している著者たちのあいだには、おそらく、偉大な空想的社会主義者サン＝シモン（一七六〇—一八二五）、フーリエ（一七七二—一八三七）、オーエン（一七七一—一八五八）の理論と、マルクスとエンゲルスの科学的社会主義との思想的な関連について触れないような人はだれもいないだろう。

しかし、それにもかかわらず、このテーマで書いている著者たちが、この関連の具体的内容の解明を試みている場合はごくまれである。

平等であって、均一主義ではない

マルクスとエンゲルスが、偉大な空想的社会主義者たちの教養のなかに〈秘められていた〉なにを高く評価していたのだろうか？　なぜにかれらは他の思想家ではなくて、まさにこれらの思想家たちを〈社会主義の創始者〉と呼んでいたのだろうか？

マルクス、エンゲルスおよびレーニンが、生産手段の社会化を社会の社会主義的改造の基本前提とみなしていたことは周知のとおりである。社会主義思想をこのように解釈した場合、たとえば、個人の財産をもふくむあらゆる形態の所有制の廃止の、もっとも徹底的な、過激な支持者の一人で、フランス革命のすぐれた活動家クラックス・バブーフ（一七六四—九七）が、科学的社会主義の先行者たちのなかでもっと大きな地位を占める権利をもっていると思われるかもしれない。しかし、マルクスもエンゲルスも、ひじょうにしばしば、きわめて鋭くかれの教義を、そしてまず第一に、その社会改造の綱領を批判している。

バブーフの見解の支持者たちの綱領のなかで、かれらの禁欲主義、均一主義への熱情、すべての人が到達しうる平均的な規準を越すあらゆるものの破壊と根絶への情熱が、とくにマルクスとエンゲルスをいらだたせた。文明のあらゆる洗練、科学、芸術等々を無益な、危険なぜいたく物とみなして一掃し、〈世界を労働者の共同体に変えよう〉とするバブーフの追随者たちの試みを、エンゲルスはひじょうに明確に、歴史に通じていない人々の〈偏見〉と評していた。

と同時に、マルクスとエンゲルスはフーリエの積極的な理想、個性の全面的な調和的発展、都市と農村の対立の克服、人間の手に入れることのできる生活の一切の喜びを享受しうる各人の権利、自由な人々の自由な連合についての教義を高く評価していた。

フーリエの教義のもつ本来のヒューマニズム、例外なくすべての人を幸福にしようとするかれのひたむきな志向を、マルクスとエンゲルスは高く評価していたが、まさにこの点に、科学的社会主義の先行者たちをめぐる一連の問題の解明へのカギがあるように思われる。

ブルジョア・ヒューマニズムと現実的ヒューマニズム

マルクスとエンゲルスが財産の社会化を主張する理論家たちでなくて、全面的に発達した、幸福な〈社会主義的人間〉についての積極的な理想をつくり出した空想的社会主義者たちを自分の先行者といつも呼んでいた事情からして、われわれは、科学的社会主義の創始者たちが科学的社会主義のもつヒューマニスチックな内容に根本的な意義を与えていたと考えることができよう。またこのことから、生産手段の社会化の思想は、それがヒューマニズムと結びついていたとき、つまり、それが人間の幸福の確立を根本目標とする体制の創設を目ざすものであったときにのみ、社会主義的内容を獲得したと言うことができる。

19世紀初頭の社会主義者たちは、例外なくすべての人が幸福を享受する権利があることを語りはじめた唯一の人たちだった。かれらの教義の根底にあるこのヒューマニズムが科学的社会主義の創始者たちを引きつけたのである。

マルクス、エンゲルス、レーニンは、社会体制としての社会主義は生産手段の社会化なしにはありえないし、真の平等なしにはありえないと考えていた。レーニンは社会主義の概念をまず第一に〈たんに社会の成員たちの必要の充足のためだけでなくて、社会の全成員の完全な福祉の保障と自由な全面的な発展のために〉奉仕するような、社会的生産過程の計画的な組織として理解していたのである。

社会主義の主要目標

未来の〈終極目標〉がどのように美しいものであっても、もしもわれわれが、それを達しがたい台座の上に置くならば、もしもそれを現代の歴史から切り離すならば、われわれは心ならずも人々の生活をこの目標への運動のたんなる一手段に変えることになる。マルクスとエンゲルスにとっては勤労諸階級の幸福と福祉がもっとも主要な目標であった。

もちろん、社会主義の本質が社会主義革命の翌日に実現されることは不可能だ。『ゴータ綱領批判』のなかでカール・マルクスは、社会主義の実現化のいくつかの段階を指摘している。第一段階ではもっとも緊急な諸課題だけが解決される——搾取の根絶、働く権利、労働に応じた支払い原則の実施、福祉の保証（基本的な諸必要の充足、年金保障、無料の医療等々）。そして〈社会的富の源泉のすべてが完全な流れとなって流れだす〉〈共産主義社会の最高段階において〉はじめて、〈個人の全面的発展〉とあり余る豊かさを期待することができる、とマルクスは書いている。

しかし、第一段階と最高段階における社会主義の本質の実現度がどんなに異なっていようとも、この相違は新しい社会の発展のより低い段階におけるこの本質の喪失の原因とはなりえない。マルクスとエンゲルスは、新しい社会は最初から人間に値する生活を創造しなければならない、と考えていた。

マルクスとエンゲルスが、〈人間の生活〉という概念のなかに二つの意味、二つの相互補完的な意義——自由な生活と、人間に基本的な、第一次的な諸要求を充たす可能性を与える〈豊かな〉生活をふくめていたことは、特徴的である。後者はとくに重要である。なぜなら、〈人々が自分の衣、食、住を保障することができないあいだは、一般的に言って人々を自由にすることができない〉からである。マルクスとエンゲルスは社会主義的改造のもっとも近い諸目標を語るとき、これらの目標と、共産主義運動の戦略的な諸目標（あらゆる形態の搾取の根絶、個性の全面的発展）とを弁証法的に統一し、現実的な社会＝経済的改造、勤労者たちの膚身に感じられる福祉の創造を重視していた。

直接的な諸課題と未来の体制の目標についてのマルクスとエンゲルスの言説に照らすと、なぜにかれらがバブーフの追随者たちの均一主義をめざす粗暴な共産主義に、社会主義の教義の本質と目標を表明する権利を認めなかったかが、おなじく明白となる。バブーフ一派の教義のなかで、新しい社会への移行の〈諸手段〉は実によく研究されていた。しかし、かれらは共産主義運動の真の歴史的目標についての正しい理解に欠けていた。なぜなら、かれらが掲げていた目標は、〈文化と文明の全世界の否定、貧しい、粗野な、諸要求をもっていない人間の不自然な素朴さへの復帰〉であって、これらの手段そのものや、かれらが要求していた努力、困苦欠乏に値するものでなかったからである。

少なくとも、バブーフの教義の支持者たちが人類に提案していたその未来の生活を、マルクスは自分にも、人類にも望んでいなかった。

マルクス主義の本質と道徳的内容は、プロレタリアートの解放についてのその学説のなかにあり、個性の全面的および調和的発展は歴史の最高の道徳的価値であるというその学説のなかにある。そして、それはわれわれにつぎのような結論をひき出す根拠を与える——科学的社会主義はヨーロッパ文化のヒューマニスチックな伝統から成長し、人間の幸福という思想にもっとも献身的な思想家たちによって担われている、と。

トピックス

″世界一のバス″

イタリアの新聞『ラ・セッシア』はソ連ボリショイ劇場のソリスト、エブゲニー・ネステレンコが最近イタリアで公演した時、かれを″世界一のバス歌手″と呼んだ。

有名なミラノのスカラ座の舞台でネステレンコはグノーのオペラ『ファウスト』のメフィストフェレスの役を演じた。

ベルチェリ市の音楽祭でのネステレンコの公演は一大事件となった。かれはロシアの作曲家ムソルグスキーの、イタリアの聴衆に知られていない作品をプログラムに含めた。コンサートはロシア芸術の真の祭典に変わった。新聞雑誌の熱狂的な反響がそれを証明している。

ソ日漁業暫定協定を一年間延長

——イシコフ漁業相は交渉の結果を評価



▲ソ日漁業暫定協定の効力を一年間延長する議定書に調印するブイストロフ・ソ連漁業次官と重光駐ソ日本大使

一九七七年12月16日、モスクワのソ連漁業省でソ日両国経済水域での漁業にかんする両暫定協定の効力を一九七八年12月31日まで一年間延長する議定書の調印式が行われた。ソ連側からはユーリー・ブイストロフ・ソ連漁業次官、日本側からは重光晶・駐ソ日本大使が議定書に調印した。

同時に、操業水域と両国の沿岸付近での漁獲割当量にかんする交換書簡も調印された。

漁業分野での協力にかんする新協定の作成については、双方は一九七八年の初めに作業を再開することで合意に達した。この問題にかんする交渉開催の具体的な日取りと場所は外交ルートを通じて取り決められる。

議定書調印式で演説したユーリー・ブイストロフ・ソ連漁業次官は、漁業大国の大部分が二〇〇カイリ経済水域を設定した時代にあっては、他国の経済水域で操業する諸国間の相互関係にたいして新たなアプローチを要求する新しい操業条件が生まれたことを指摘した。この議定書の調印をもって終了したモスクワの漁業交渉は、実務的、建設的ふん囲気のもとで行われたが、これによって一連の複雑な問題をソ日両国の相互利益にもとづいて解決することができた、とブイストロフ漁業次官は語った。

重光晶・駐ソ日本大使は、双方がモスクワで行った作業を肯定的に評価したのち、日本側の意見によれば、長期的な基盤に立ったソ日両国間の新漁業協定の作成と調印は両国間の漁業関係における基本的な課題である、と指摘した。

議定書の調印後、本誌記者はアレクサンドル・イシコフ・ソ連漁業相にインタビューした。

——あなたは終了したソ日漁業交渉をどのように評価しているか？

「世界最大の漁業国であるソ連と日本の漁業上の利害は、世界の海洋の多くの水域で共通点を持っている。

両国にとって特別に関心があるのは北太平洋、とくに北西太平洋だが、それはこの水域がソ連と日本の沿岸のごく近くにあるからだ。

この水域の生物資源確保の責任は、なによりも古くからの伝統により魚族資源の合理的な、科学的な利用の分野で協力しているソ日両国の漁民にかかっている。

世界の海洋の法秩序が急激に変わっている二〇〇カイリ時代に、このような協力の重要性はますます高まっている。だからこそ一九七七年に、沿岸水域での生物資源の利用にかんするソ日両国の法律を考慮に入れ、一九七七年度の、ソ連の沿岸と日本の沿岸付近での漁業秩序と条件を規定するソ日間の二つの協定が締結されたのである。

交渉の成り行きが示したように、新しい条件は相互に受け入れられる解決策を探し求めるうえで一定の困難をも生んだ。しかし伝統的な善隣の精神、検討される問題にたいする双方の実務的、建設的アプローチによって、相互の利益を考慮に入れたしかるべき文書を作成することができた。

モスクワで終了した漁業交渉では、これらの協定はなんらの補足または修正を加えずにその効力を一九七八年12月31日まで一年間延長した。日本の経済水域でのソ連の漁獲総量は六五万tと決定された。それぞれの水域でのその他の漁業調整措置は、基本的には一九七七年の水準に残された」

——漁業分野でのソ日協力の見通しについて。

「ソ日間の漁業協力はソ日関係の全体に重みのある貢献を加え、その友好的、善隣的発展を促進している。

一九七七年の東京訪問中に私は日本の閣僚と一連の会談を持った。会談の過程で、互恵にもとづく漁業分野でのソ日間の協力をいっそう発展させる必要性について共通の意見が表明された。

昨年11—12月に専門家会議が開かれ、漁業分野での協力にかんする新協定を作成し締結する問題が検討された。専門家はかなり詳細に協力の可能な分野を討議し、双方の立場を明らかにした。双方の合意により専門家の作業は一時中断されたが、これは会議の結果の綿密な分析ののちに、一九七八年の初めにこのような協定の作成にかんする共同作業を再開するためである」

ソ連の現実を見て、思うこと

——日本の社会主義者は語る

昨年の11月13日から23日まで、ソ連共産党中央委員会の招きで勝間田清一・社会主義理論委員会委員長を団長とする日本社会党代表団がソ連を訪れた。勝間田氏と団員の一人、堀米正道・政策審議会事務局長にその感想を聞いた。

勝間田清一氏——われわれの受けた明るい印象は、特に、世界史的意義をもつ10月革命の60周年と新ソ連憲法の採択に結びついています。歴史上初めて労働者階級が、すべての勤労大衆とともに政治権力を掌握し、搾取のない社会を建設しました。初めてこの社会で、ある民族が他民族を抑圧することが不可能になりました。これはすばらしい出来事であると思います。

ソ連では、すでに数十年間失業はありませんし、人間の能力と好みに応じて仕事を選択する権利が憲法で保障されています。これらすべてを知ることによって、日本が直面している課題、つまり社会主義への日本の道という課題にたいする情熱が私の心にみなぎってきます。

もちろん社会主義への道は、多様であり、あれこれの国の事情、実際の歴史的条件や民族的な伝統によって左右されます。しかし決して忘れてならない重要な原則は、階級闘争です。さらに社会主義は、他の勤労大衆とともに権力を握った労働者階級による経済、国家機関、社会機構の根本的改造なしには不可能です。また、社会主義をめざす全闘士の国際的団結と相互援助は、原則的に重要です。

社会主義への移行の平和的過程を選択することは可能ですが、この過程を後退させようとする勢力が出現する可能性は決してなくなったわけではありません。社会の社会主義的改造は、反革命への反撃なしには、実現不可能です。常にわれわれは、これらの重要原則を固有の特殊性としっかり結びつけ、その弁証法的統一を実現しなければなりません。

堀米正道氏——新憲法の採択は、ソ連の一九七七年のビッグニュースでした。社会主義的民主主義のいっそうの発展の結果、世界で最初の社会主義的全人民国家は、さらに高い段階に到達するでしょう。

現実の生活を見て、私はソ連では労働者の諸権利に特別の敬意がはらわれていることを述べたいと思います。たとえば、労働者がどこかの企業に就職したがっているとします。彼の申請は、もしそのための条件があれば、かなえられます。企業の指導者は、理由なしに雇用拒否をできません。

資本主義諸国では、社会主義国のソ連には自由がなく、全員が中央からの命令に従っており、苦しい生活を送っているという宣伝が行われています。しかし現実は、これを覆しています。われわれは都市や農村で多くを見ることができました。百聞は一見にしかず、とはよく言ったものです。ソ連の社会主義建設は、われわれが予想したものよりもっと高い水準に達しています。

ソ連では全市民に十分な最低生活費が保障されています。家賃が非常に安い。必需品も安い。パン、牛乳、肉の値段は、ここでは日本の1/3から1/4です。もしだれか病気になれば、あらゆる医療をいつでも受けることができ、しかもこれが無料です。老後は全員が年金を受けとっています。もちろんソ連にも問題があります。しかしソ連の人々は、自分の力に自信をもってこれらの問題を解決しています。

ソ連は、新憲法と社会主義建設の成功とに立脚して、平和と平和共存の政策を推進しています。ブレジネフ氏は、新憲法の精神で核兵器の禁止をめざす具体的な提案を行いました。これらの新しい提案は、理解と反響を呼ぶものと思います。

ソビエト民主主義

ソビエト社会の〝罪と罰〟

セベリン・ロシア連邦法務次官に聞く

ソ連で最大の共和国——ロシア連邦共和国の法務次官ユーリー・セベリンは53歳。ソ連刑法界の指導的専門家の一人である。法務畑での経歴はすでに25年になる（聞き手ユーリー・キルサノフ）。

保証される基本的権利

ソ連では、裁判所の判決を受けて服役中の者はどういう権利を行使しているか？

自由剥奪の判決を受けた者には、憲法によってソ連市民に保証されている諸権利が原則として維持される。

たとえば、労働の権利だが、受刑者は原則として自分の専門職種で働いている。労働時間や休けい時間の長さを含め、受刑者にはソ連の法規で定められている労働規則と保安規準が全面的に適用されている。その労働にたいしては所定の賃金率で賃金が支払われており、一般企業と同様、賞与制度もある。賃金の45%まで（生活経費を差し引いて）受刑者個人の勘定に繰り入れられる。出所後は、働き場所が保障される。ソ連にはいかなる業務責任者も、前科者であることを理由にして人の採用を拒否できないという不動の規則がある。

教育を受ける権利も保証されている。勉学の希望者のために、すべての矯正労働コロニーに夜間中等学校があり、多くのコロニーには夜間職業技術専門学校もある。すべての設備、実験室、学習参考書、図書館は一般の学校と同様、無料で提供されている。コロニー内で取得した卒業証書と職業技術についての証明書は、一般の学校の発行するものとまったく同等である。

住宅を受け取る権利についても同様で、刑期を終えた者はこの権利を全面的に行使している。たとえば、刑期を終えたあと、何らかの理由で家族のもと、あるいは自宅へ帰ることを希望しない者にたいして、地方権力機関は、本人が出所後住むことを望む地区で住宅を提供する義務を負っている。

受刑者と市民的権利

服役という条件のもとで、市民的権利はどのように行使されるのか？

もちろん、服役しているという特殊性が、このカテゴリーの権利の行使に影を落としている。たとえば、行進やデモには制限がある。しかし、受刑者のイニシアチブによる集会は認められている。コロニー当局は、そのような集会で述べられた収容条件、生活、余暇、その他の条件についての建設的な批判をはねつけてはいけない。これは一般社会とまったく同様である。

各コロニーにある壁新聞に受刑者の意見や提案が掲載された場合、当局はこれを無視してはならないし、事前に壁新聞を検閲することも許されていない。

受刑者は、裁判所以外に、新聞、政府機関、社会団体へ投書することができる。そしてこの手紙を受け取った者は、原則として15日以内に適切な回答をしなければならない。

憲法で保証されている権利と自由のうち、囚人が完全に奪われるのは選挙権である。しかし、出所の日に、選挙権は自動的に回復される。

受刑者の再教育過程における隔離の影響と厳しい気候条件の役割の問題について、ソ連ではどのように考えられているか？

まず、ご質問の後半のほうから、お答えしよう。外国では、ソ連の伝統的な服役地はシベリアだという意見が広まっている。しかし、これは誤りだ。以前には確かに、〝シベリア送りになる〟ということが刑罰の同義語になっていた時代もあった。しかし、今日ではシベリアで働くということは、特典と言ってもいいだろう。シベリアの各都市は大きな文化中心地だ。社会主義の条件下でウラルから東の各地域の工業は、急速な発展を見せている。ここにはソ連科学アカデミーのシベリア支

部もある。

ソ連の法律では、服役する場所は犯罪の行われた土地（たいていは受刑者が住んでいた場所と一致する）と同一の州内または地方内で、という原則が厳しく守られている。そうでないと、たとえば、どの民族出身の受刑者にも母語で教育を受ける正当な権利を保障できないからだ。また、家族の事情による一時帰宅措置も事実上実施できなくなる。判決を受けた者をたとえばカフカズからシベリアへ、またその逆へと国費で数千kmを往復させるのが不経済なことは、いまさら言うまでもない。

もう一つの側面は、隔離の問題と直接結び付いている。われわれは、最大限の隔離がすべての災厄に効く万能薬だとは考えていない。ソ連では以前から監獄での禁錮刑が主として矯正労働コロニーでの服役に変わっている。ここでは受刑者ははるかに大きな移動と接触の自由を与えられている。受刑者のコロニー収容の意味は、外的環境——家族、肉親の影響によって強められる。受刑者の運命には、かつて一緒に働いた同僚たちも責任を持っている。労働者集団の代表がコロニーを訪れ、受刑者の教育に協力している。コロニーにはまた、地方権力機関と社会団体の監察委員会が常時活動していて、労働条件、生活や余暇の条件をチェックしている。このような条件の下にあれば、人は自分が忘れ去られたとか、不必要になったとかいった感情を持つことがない。

さらに、新しい法律にもとづき、過失による犯罪で判決を受けた者はすべて、コロニーではなく、居住地コロニーで監視を受けずに服役している。この場合、受刑者は家族と一緒に生活し、世帯を構えることができ、自治共和国あるいは地方の区域内ならば自由に移動できる。かれらは事実上、一般人とほとんど変わらない条件下で自己の罪を償っている。

減少する犯罪

統計ではソ連の犯罪発生件数は一九二五年以来現在まで、2/7に減っている。今日の犯罪の性格はどのようなものか？

周知のように、犯罪発生件数の水準と犯罪の性格は、社会条件によって直接左右される。社会主義社会では、犯罪の減少と段階的な消滅が国内で実現された社会・経済的改造——人々の不平等の排除、その福祉と文化水準の向上によって条件付けられている。われわれの社会にもまだ犯罪はあるが、言うなればそれは少し質の異なったものである。職業的な犯罪は姿を消し、ここ数十年来、物質的な困難や窮迫によって引き起こされた犯罪はない。

われわれはまだ、婦人の男性との同権を保障した法律の違反に出会うことはないし、人種的、民族的敵意、少数民族の権利の侵害あるいは軽視を禁じた憲法の規定に違反した事件は以前からなかったし、現在もない。

今日、見られる傾向は次のようなものだ。貪欲な性格の犯罪——強奪、公金私消や、市民の名誉と品位にたいする犯罪（攻撃的な行為と関連した犯罪も含めて）の発生件数が減少する中で、過失あるいは知識不足による犯罪（たとえば自動車運転者による交通違反、その他）の全体に占める割合が高まっている。強調しておくが、割合が高まっているのであって、件数が増えているのではない。

全体的に言ってソ連では社会的に危険な法律違反はますます減っている。

刑罰の新しい方向

その場合、犯罪と闘う刑罰の主要な方向はどういうものになるか？

第一にあげたいのは、既存の方法の民主化と、自由剥奪と結び付かない新しい形態の方法の作成である。われわれは特に、重要なのは法律違反者にたいして取られる措置の重さではなく、刑罰の不可避性だという命題を方針としている。この場合、より大きな意義を与えられているのは懲罰ではなくて、教育活動である。

最近、一連の立法措置がとられたが、その中で重要なのは（そしてこれは犯罪との闘いにたいするソビエト的アプローチ全体に特徴的なことだが）、刑法による処罰の分野の縮小と、自由剥奪のような厳しい措置の削減である。具体的に言えば、一九七七年4月に発効した法律により、自由剥奪1年までの刑に相当する罪を犯した者は、裁判所の判断によって行政的な処罰だけで済む場合もある。また、裁判所は、自由剥奪3年までの刑に相当する計画的な犯罪、5年までの刑に相当する過失による犯罪にたいする判決にさいして、人格と情状を酌量して執行猶予にすることもできる。この措置はもちろん、自由な身分のまま社会に残る被告を社会的に有用な労働に必ず従事させ、その行動を司法機関が監督することを予定している。

要するに、法律に生じた変化の本質は、刑罰の人道化路線を一貫して実現することにある。

きつね色のブリン（ホットケーキの一種）とサモワールで沸かした熱い紅茶がないお祭りなんて！



学生たちの冬休み

タチヤナ・ワシリエワ
カメラ S・ソロビヨフ



この女子学生たちは南のモルダビアから雪のモスクワ郊外へ休養にやってきた。ことし、この休息の家〝ジェムチュジナ〟にはソ連全国53都市の学生が集まった。



ソリ滑りは実に楽しい！

学生たちには年2回、夏と冬に休暇がある。そしてそのたびにかれらは、新しい旅行に出かけ、新しい友人、新しい思い出をつくる……

1月25日、ソ連のすべての大学で14日間の冬休みが始まる。冬休みを待ちのぞんでいるのは、昨年の9月に入学したばかりの1年生も、冬休みが事実上、学生時代との別れになる卒業生も変わらない。この日、ほほえみ、あるいはにぎやかに笑い声をあげ、歌をうたいながら（実際、中間試験のときのあの心配はどこへ消えたのか！）、数千、数万の若者たちがありとあらゆる交通機関を満員にして、この期間学生たちに提供された休息の家、国民宿舎、キャンプ場へと急ぐ。これらの休養施設の利用券は、実費の7割引で各大学の労働組合から支給される。

モスクワのベロルシア駅から一本の郊外電車が、教師、医師、建築技師、技師、ジャーナリスト、エコノミスト、外交官——ただし、その前に〝未来の〟という形容詞が付く学生たちを近郊の保養地ズベニゴロド市へ運んで行く。

ズベニゴロドの周囲には昔のままに森林がざわめき、その中をモスクワ川が貫いている。ただ、その岸べには20世紀の特徴であるガラスとコンクリートの建物が数棟出現した。これらのサナトリウム、休息の家、国民宿舎はモスクワ市民やその他の都市の住民に利用されている。しかし、冬休みのあいだ、ここを占領するのは学生たちである。

ここにはいろいろな楽しみが用意されている。スポーツの好きな者にはスキー、スケート、アイスホッケー、それに雪上サッカー、歌やダンスの好きな者には舞踏会やカーニバルなど。さらには討論会や見学、ハイキング、ゲーム……そして、もちろん、陽気なお祭りも開かれる。



エニセイの川下り



アタックに出かけるボーリング技師たち。限られた時間内に、火の中で鉄骨にワイヤを結びつけなければならない。

熱さのあまり、私は目を閉じた。一瞬、油井やぐらのシルエットはどんよりした陽炎（かげろう）の中に消え、赤い消防自動車が形のないシミのように溶け、ぼんやりした人影に変わった。視界には巨大な、燃えさかる炎だけが残った。炎は透間のない撚（よ）り紐のようにふくれて、立ち上がり、舌で白っぽい空をなめた。太陽は、煙の裾のかげに隠れた。百万ものガス・バーナーを一度に点火したようなものすごい音。噴き出す油井の唸り。

「しっかりして下さい！」という言葉を、私はほとんどすぐ耳のそばで聞いた。叫んだのは、顔の部分をのぞいて、全身を耐熱服で覆った男だった。「トラクタのかげへ！」

私は跳び退いた。かたわらを、互いに太いワイヤでつながれたトラクタが進んでいた。消防手たちが、放水ノズルを握りしめて立っている。強烈な水柱が火炎を切り刻み、火炎は赤い舌を巻き上げながら後退する。灼熱の火炎でアメのように曲がった施設の残骸が見えてきた。ここ――ダゲスタン自治共和国の首都マハチカラの近くでは、つい数時間まえまで、石油の試掘が行われていたのだ。間髪をいれず、人々が曲がりくねった鉄骨によじ登る。次のアタックが始まったのだ。

マハチカラがまだ眠りから覚めやらない早朝、数kmはなれたところにある油井やぐらで火災が発生した。この油井はまだ試掘の段階で、すべてが未知数だった。地下3kmのところで、ロッドの先端が石油の層に突入した。中生代の地層の中で"大地の血"が沸騰し、ガスとともに地表に向かって突進し始めた。石油は幾百万年来の抑圧の怨みを晴らすかのように噴出し、偶然の火花に触発されて大火炎となった。やぐらは何分間かは炎に抵抗したが、やがて崩れ



油田の火災と闘う

イーゴリ・アンドレーエフ
カメラ V・シュストフ

消防手は水流噴射機で炎を撃退して、ボーリング技師たちの"作業場所"を用意する。

落ち、数十tの鉄材が試掘井をふさいでしまった。

火災なら急がない!?

油井の火災といえば、大事故である。しかもマハチカラには、安全設備のおかげで、すでに1/4世紀ものあいだ、災害らしい災害はなかった。すぐさま何十台もの消防自動車その他が駆けつけ、炎を取り囲んだ。ホースが脈打ち、水が放出された。銃を構えて突撃するように、消防手たちが火に迫って行く。だが奇妙なことに、水は炎の方へは全然飛んで行かない。だれも炎など眼中にないかのようである。水はもっぱら、すぐ近くで可燃ガスを発している石油の湖に向けられているのだ！　一〇〇m離れたところでさえ耐えがたいほど熱い火そのものを、だれも急いで消そうとはしていない。

ダゲスタン自治共和国内務省消防部長であるグリゴリー・ケレベーエフ大佐は、消防手たちのこのような行動を説明してこう語った。

「火そのものを消すことは、むずかしいことでもなければ手間のかかることでもありません。現在、火は〝地上〟の仕事のために改造された航空用ターボジェット・エンジンの強力な噴射で吹き払われています。ところで、火が消えたときのことを考えてみて下さい。ものすごい圧力がかかっているので、油井から石油やガスが噴出するでしょう。半径数百mにわたって、空気中にガスが充満します。ふたたび大爆発を誘引するには、ほんの小さな火ダネで十分です。

つまり、燃えるものも、火ダネもあるのです。灼熱した何十t、何百tもの鉄材は、石油をたっぷり浴びています。いってみれば、たとえ火を消しても、またどんな予防手段を講じても、爆発は避けられないのです。一方、油井の噴出をとめたり、石油やガスをパイプラインで安全な場所へ移すために、噴出口まで行かなければなりません。だから、やぐらが立っていた場所をきれいに片づけてからやっと、火を消したり、石油やガスを転送することができるのです」

隣のアゼルバイジャン共和国やチェチェノ・イングーシ自治共和国から、防災と既設の噴油井やガス噴油井の閉鎖にかんする専門家部隊が招かれた。みんな経験豊かな、勇敢な男たちである。彼らはダゲスタンの専門家たちと協力して、やぐらの残骸を片づけて、噴出口を露出させ、噴き出す石油を処理する仕事にあたった。

隣で稼働中の油井の狭い通路を歩いて初めて、私は油井の設備がどんなものであるのか、どんなに重い鉄材を火の中から引っ張り出さなければならないのかを完全に理解することができた。人間の背丈の1・5倍もある巨大なタンク類、乗用車ほどの大きさの何台ものディーゼル・エンジン、巨大なウインチ、何千m分ものパイプ。地面にしっかり足をふんばって立っているやぐらの支柱は、鋼鉄の梁材でできた巨大な建造物である。これらすべてが、崩れ落ち、手がつけられないほどに曲がり、焼け固まっているのだ。

もちろん、やらなければならないことは山ほどある。火災の現場では、さまざまな種類の自動車が何十台も走り回っている。何百人もの消防手やトラクタ運転手、特殊作業車の運転手、医師、看護婦、ボーリング技師、炊き出し係が立ち働いている。これらすべては、いつもは近隣の20の油井で働いている人々である。

バクー油井隊長トルニク・ボスカノフは語る――「もちろん、私たちは急いで駆けつけました」。その声は火炎の唸りと競合するかのように響く。「でも、火事でなかったら、もっと急いで来たでしょう。いや、いや、驚かないで下さい。火事じゃないときの方が、もっと危険だからですよ。考えてもごらんなさい、石油やガスが噴出すれば、やぐらの周辺はまたたく間に石油の湖となり、ガスが充満します。そうなれば一触即発です。機械のちょっとした故障や、ほんの小さな火花でも大爆発につながります。今度の場合はすでに燃えていたので、見た目には恐ろしそうですが、われわれにはあまりこわくないのです」

実際、耐熱服に身を固めたこれらの人々は落ちついていた。互いに片言やちょっとした身振りで理解し合い、てきぱきと働いている。自分のやるべきことをよくわきまえているのだ。

ワイヤで連結したトラクタが、巨大なひしゃげたタンクを引っ張って来ると、また油井へ戻って行った。ボーリング技師たちは火から20mほど離れた小山の陰に避難して、小休止している。そこはあまり熱くないし、大声でどならなくても話ができる。とはいえ、会話ははずまない。火の中から出てくると、クワスかミネラル・ウォーターを飲み、力をたくわえ、再びアタックするために少し横にならなければならないからだ。

決め手はボーリング技師

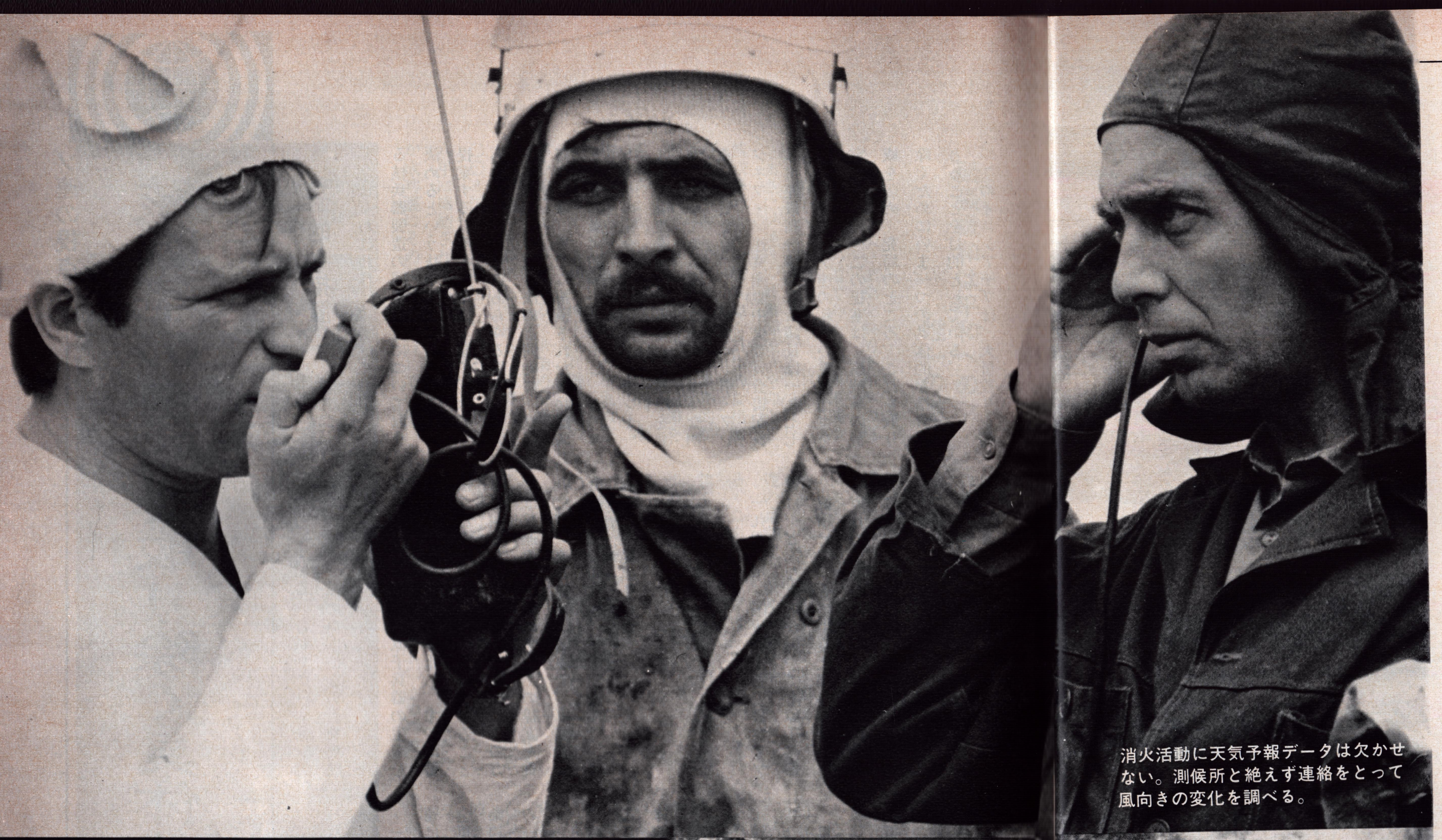
ボスカノフ隊長が火のすぐ近くで、大きな手のひらで顔を覆っている。その隣にはグローズヌイ石油地区の同僚であるミハイル・ネクラソフが立っている。彼はソ連国内や外国で二三六の油井事故を処理してきた。いまはもっぱら静観をきめ込んでいる。火へのアタックの一回一回が、どれだけ成果をあげるかが重要なのだ。そのさい必要なのは勇気や忍耐だけではない。大量の鉄材の中でかつて稼働していたあれこれの部品やジョイントやユニットを識別し、それらを10台か15台のトラクタで引っ張ることのできる大きさにまとめ、火中から引き出す能力も必要なのだ。

ボーリング技師は、複雑な油井設備のどんな細部をもよく知っている。彼らの多くが技師で、石油ガス採掘の専門家であってみれば、何の不思議もない。その他の者も、みんな高い技能資格を持っている。

アタック！　このルポルタージュはそうしたアタックの断片から始まった。ボーリング技師たちが消防手たちと身を寄せ合いながら火に近づいて行く。進路には放水ノズルが仕掛けられている。この水が攻撃予定地点から炎を追い払い、水の防火壁をつくり出す。この防火壁に掩護されて、ワイヤを持ったボーリング技師が火になめつくされた鉄骨に近づき、それにワイヤを結びつける。数分が永遠の長さに感じられる。だれかが自分の肩や胸をたたく。これは〝水をかけてくれ！〟という消防手への合図なのだ。消防手はボーリング技師や他の消防手に水をかける。彼自身もまた背後から水をかけてもらう。水は機械技手にも浴びせられる。トラクタの背は厚いフェ



石油の湖に炎が迫る。必死に消火活動をする消防手たち。



消火活動に天気予報データは欠かせない。測候所と絶えず連絡をとって風向きの変化を調べる。



どんな天気も衣装次第。この耐熱服さえあれば猛火の中も何のその。

ルトで覆われているとはいえ、やはり熱い。運転席にいる運転手は汗だくである。

ボーリング技師たちはすばやく退却する。とはいえ、一歩一歩静かにである。走って火から退却するようなことはない。あぶないからだ。灼熱した耐熱服は湯気を立てており、水が流れている。彼らは自分たちがやって来た方を見ている――ワイヤはうまくかかっただろうか？ ワイヤははずれない。トラクタが引っ張る。うまく行った！

二列のトラクタのあいだのよく見える場所に立って、ボスカノフは作業を指揮する。エンジンが一斉に唸りを上げ、ワイヤがぴんと張る。炎の中から鉄骨が引き出される。炎は獲物を渡すまいとするかのように、いっそう猛り立つ。

万身の力を込めて引っ張りながら、トラクタは微動もしなくなった。だが、焼けただれた鉄は屈服し、ゆっくり、1cmきざみに、黒い鉄塊が炎の中から姿を現わした。

人々のびしょ濡れの顔に笑いが浮かぶ。やったぞ！ タバコが手から手へ渡る。まさに会心の一服である。

もちろん、すべてが順調だったわけではない。気が重く、きついタバコの苦味が腹立たしさをつのらせただけの一服もあった。やっとのことでワイヤを結んだ大梁が、すっぽぬけてしまったのだ。ボーリング技師たちは敢然と三たび火の中へ入って行った。そして三回とも、ワイヤは音を立ててはずれた。鉄骨はほとんど完全に残っていたのに、引き出すことができたのは一〇〇kg.ほどのパイプだけだった。

一日がかりで一〇〇kgの鉄材さえ運び出すことのできない日もあった。風向きが変わって、炎の流れも変わった。炎の長い舌が焼けこげた地面の上を這った。ボーリング技師と消防手は風上でしか作業をしない。炎の正面からは近づけないからだ。どんな遮蔽物も役に立たない。たとえば北風が吹けば、作業は中止である。ボーリング技師たちはそう決めていた。だれもその言葉にさからわなかった。

鉄材を放置しておくことは、火そのものを放置しておくことではない。とつぜん風向きが変わって、油井に向けられていた放水ノズルが炎に包まれてしまったときなど、消防手たちは何度、心配のあまり油井の方へ駆け出して行ったことか！ 石油の湖は、どれだけの注意を勇敢な人々に要求したことか！ 風向きが変わるやいなや、炎はいつ何どき、石油に接吻し、燃え上がらせるか分からないからだ。何時間もかかって、消防手たちは交代で火とたたかい、ほんの小さな炎まで消しとめた。何百立方mもの石油が、それ以上燃えることなく残った。

このように毎時間、毎日、火との攻防をつづけながら油井口の鉄材は取り除かれた。やぐらの残骸が取り除かれてしまうと、炎はロウソクのように垂直になり、もはや石油やガスがまっすぐ噴き上げるのを妨げるものはなくなった。石油やガスの導火線になるようなものは、何もない。

最後のアタックはケレベーエフ大佐が予言した通りになった。ジェット・エンジンを積んだ自動車が炎に近づき、猛烈な風を吹きつけた。炎は吹き払われ、ボーリング技師がすかさず油井口に突進し、噴き出す石油を鎮めた。征服された〝大地の血〟は、用意された貯蔵所へ向かって流れ出し、その熱を火災のためにではなく福祉のために役立てるべく、製油工場をへて幾百万台のエンジンにいたる旅へと出発したのである。

ソ連の視点

核戦争の脅威を取り除く具体的な道

アレクサンドル・ストレシニコフ

抜本的な措置

「今日、われわれは、すべての国による核兵器製造の同時停止について取り決めるという抜本的な措置をとるよう提案する。その対象は、原子、水素、あるいは中性子のあらゆる爆弾や砲弾である。この取り決めと同時に、核保有諸国は、すでに蓄積された核兵器ストックの漸次的縮小に着手し、このストックの完全な〝一〇〇パーセント〟までの廃棄を実現するという義務を負うことができるだろう」。このような明確な言葉をもって、レオニード・ブレジネフ・ソ連共産党中央委員会書記長・ソ連最高会議幹部会議長は一九七七年11月2日、ソ連の新しい重要提案を定式化した。この提案は、核戦争の脅威を弱め、究局のところ、これを取り除くためにいま一つの具体的な措置をとることを目的としている。

このイニシアチブは、大量殺りく兵器のもっとも危険な種類の一つを一掃するというソ連の原則的な方針を反映している。ほかならぬソ連がすでに戦後の初期に初めて、原子兵器の生産を禁止し、その生産を中止し、すでに蓄積されたそのストックを一掃することを提案したことを指摘しよう。この方針はソ連のその後のすべての提案を貫いた。ソ連の提案は国連で、軍縮委員会で、二国間交渉、多国間交渉で、何回となく提出された。

一貫した方針

一九四六年。国連原子力委員会でソ連は、どんなことがあっても原子兵器を使用せず、その生産と保存を禁止し、3カ月の期間内にこのような兵器の現有ストックを廃棄する義務を規定している国際条約案を提出した。

一九五五年。7月、ジュネーブの4国巨頭会談（ソ米英仏）でソ連代表団は、核兵器の完全禁止、武器庫からの核兵器の除去と廃棄にかんする措置を提案した。

一九六二年。18カ国軍縮委員会でソ連は厳重な国際管理のもとでの全面完全軍縮にかんする条約案を提出。この条約案は当然、諸国の核兵器ストックの一掃をも規定した。

一九七一年。ソ連共産党第24回大会で核軍備競争制限措置の総合計画が提起された。計画では、この分野での具体的な措置が核兵器の完全禁止の課題と直接結びついている。

一九七六年。ソ連共産党第25回大会は核戦争の脅威を一掃する方針を発展させ、具体化した。

以上挙げた諸例から、ソ連にとって核兵器の一掃をめざす闘争がけっして御都合主義的な性格をおびていなかったことがわかる。ソ連は自らがこの兵器を持たなかった時でも、防衛のためにこの兵器を開発し、自らの軍隊をこの兵器で装備することをよぎなくされた時でも、一貫して核兵器の一掃をめざした。そのさいソ連側からは、核軍備競争が決して明るい将来を約束するものではなく、ただ破滅しか招かないものであることが指摘された。

地球全体にとって危険

すでに七〇年代の初めに、地球の住人一人あたり、通常の爆薬に換算して約15tのTNT火薬に相当するほどの核兵器が世界に蓄積された。このようなストックは単に個々の国だけでなく、地球全体の生命にとっても大きな危険を秘めている。

核兵器の生産に膨大な人的、物的資源が消費されているが、もしこれらの資源を世界の後進地域での疾病、文盲、貧困とのたたかいに利用するならば、はるかに有益だろう。ところで、はたして食糧、燃料、環境問題のような全人類的諸問題は、支出や努力を要求していないだろうか？　すでに現在、地球の資源や自然自体にたいする態度は、地球の多くの資源の償いがたい枯渇だけでなく、破滅的な結果をともなった不可逆的な生態学的過程をも引き起こしている。

緊張緩和は平和への唯一の道

緊張緩和はいまや全般的平和への現実的な、唯一の道である。核軍備競争は核戦争への道である。

まさにソ連は、核軍備競争を抑止し、核戦争の危険を取り除く具体的な措置の路線を進んでいる。ソ連の実務的な提案はすでに多くの方向で緊張緩和をもたらした。大気圏内、宇宙空間、水中での核兵器実験を禁止した一九六三年のモスクワ条約、地下核兵器実験の部分的禁止にかんするソ米条約が締結され、効力を発生している。世界の一〇〇カ国以上が参加している、一九六八年に締結された核兵器拡散防止条約が成功裏にその課題を遂行している。

一九七一年の条約によって、海底とその地下に核兵器その他の大量殺りく兵器を設置することが禁止された。核戦争防止にかんするソ米間協定ならびに核兵器偶発使用防止にかんするソ連と仏英との協定が締結された。核軍備競争をふくむ軍拡競争中止と関連した一連の諸問題にかんする交渉が続いている。これらすべては、今後のいっそう抜本的な措置を要求している核緊張緩和の物質的基礎である。

核戦争の基礎を取り除くこと

新しいソ連の提案は、単にあらゆる種類の核兵器の生産の中止を目的としているだけではない。その提案はその後の〝一〇〇パーセント〟までの蓄積された核兵器ストックの縮小のための基盤を準備するものである。核戦争の物質的基礎を取り除くこと――これはいまや国際政治の緊急の課題であり、その解決のためにソ連、社会主義諸国、あらゆる平和愛好勢力の努力によって現在よい基礎が築かれている。

ソ連の新しい諸提案の意義はなによりも、それらの提案が現代の国際情勢を考慮に入れ、核戦争という主要な危険を取り除くための行動を方向づけていることにある。提案の実現は緊張緩和のプロセスに新しい強力な刺激を与えるだけではなく、核軍備競争を中止することができるだろう。もっとも肝心なことは、ついに、大量殺りく兵器のもっとも危険かつ殺人的種類の一つの、蓄積されたストックの物理的縮小に取りかかる現実的可能性がつくられることにある。

世界のすべての国民のために

新しい諸提案の重要性はまた、それらの提案が諸国間の関係における大きな信頼度をつくり出すのを助け、軍縮委員会で二国間、多国間の一連の軍縮問題について目下行われている交渉の進展を促進することにもある。

もちろん、核軍備競争との闘争における抜本的な進展をかちとることは簡単ではないし、容易ではない。核軍備競争の継続に関心を持っているグループの抵抗は弱まっていない。しかしこの問題の抜本的な解決に切実な関心を持っているのは、世界の、例外なくすべての国民である。

トピックス

新たなソ米宇宙実験への第一歩

モスクワのソ連科学アカデミー宇宙調査研究所で、有人宇宙飛行の分野でのソ連と米国の今後の協力問題を討議する両国の科学者、専門家の会議が開かれた。この作業は、1977年5月11日にソ連科学アカデミーと米国航空宇宙局（NASA）とのあいだで調印された協定にもとづいて開始されたもの。ソ連側代表団の団長は、ソ連科学アカデミー付属インターコスモス会議議長でソ連科学アカデミー会員のボリス・ペトロフ、米国側代表団の団長はNASAの宇宙科学部次長ノエル・ヒナース博士だった。

会議の過程でソ連と米国の専門家たちは、ソ連のサリュート型軌道ステーションと米国の宇宙船スペース・シャトルを利用して考えられる共同研究と実験について予備的な審議を行った。双方は、共同プロジェクトの準備に関連した学術・技術問題を今後審議するさいの手続きについて合意した。

Olympic-80

80年オリンピックの芸術プログラム

ワシリー・クハルスキー文化次官に聞く

伝統により文化的なプログラムがオリンピック大会開催の不可分の一部になっている。たとえばメキシコ・オリンピックではこのプログラムが12カ月続き、ミュンヘンでは10カ月にわたって行われた。モスクワ・オリンピックではこの文化プログラムは一九七九年7月1日から一九八〇年10月1日まで16カ月にわたって繰り広げられる。

しかし、言うまでもなく、この文化プログラムで特別の地位を占めるのは、モスクワ・オリンピックが開かれる一九八〇年7月19日から8月3日までの期間である。この期間、モスクワの人口は六〇万人増える。一万二〇〇〇人の選手、三〇〇〇人の公式ゲスト、六〇〇〇人のジャーナリスト、数十万人の観光客がモスクワを訪れる。

これらの人々のためにモスクワの一流の劇場やコンサートホールで公演が行われる。ボリショイ劇場ではオペラとバレエ、クレムリン大会宮殿ではソ連諸民族の歌と踊り、音楽院大ホールでは交響曲と器楽の演奏会、ロシア・ホテルの中央コンサートホールでは軽音楽、軽演劇が行われる。マヤ・プリセツカヤ、エカテリナ・マクシモワ、ナタリア・ベススメルトノワ、その他世界的に有名なバレリーナの出演する舞台と、たとえばイーゴリ・モイセーエフが指導する高名な民族舞踊アンサンブルの舞台のどちらを見に行くか、選択に困ることになるだろう。

美術と映画のファンのためにいろいろな美術展が開かれ、ソビエト映画の名作の上映、スポーツ映画祭が組織される。

オリンピック村には文化センターが開設され、国際クラブが活動する。各競技の合い間には有名な音楽家、演劇・映画俳優、サーカスの人気者が選手たちを慰問する。興味深いのは、ソ連の専門家たちが現在すでに（オリンピック史上初めて）、競技を前にした選手たちの緊張を取り除き、かれらのリラックスと休養のために最適の条件を作り出せるような"プログラム"の作成に取り組んでいることである。

文化プログラムはまた、オリンピックの別会場になるタリン、キエフ、ミンスク、レニングラードの各都市、また伝統的な観光コースにあるボルゴグラード、プスコフ、ノブゴロド、エレバン、トビリシ、タシケント、ブハラ、サマルカンドの各都市でも盛り沢山に予定されている。

近代オリンピック運動の夜明け当初、その主唱者ピエール・ド・クーベルタンはこの運動の内容は「スポーツ、科学、芸術」の三位一体の公式に表現できるし、また表現されねばならない、と強調した。

第22回オリンピックの文化プログラム委員会は、80年オリンピックが単にスポーツの祭典であるばかりでなく、芸術の祭典にもなることを確信している。


力強いアナトリー・ピスクーリンの跳躍

意欲見せる三段跳びのホープ

アレクセイ・スレブニツキー

「自分でも、かなりの跳躍力を身に付けたような気がします。ということは、もう勝てるのではないかと…」――こう語るのは三段跳びのアナトリー・ピスクーリン。これは少し、けんそんのしすぎだろう。なぜなら、ピスクーリンにはすでに勝利の、それもきわめてめざましい勝利の経験があるからだ。

一九七七年7月1日、ソーチで開かれた国際競技会でピスクリーンは17m04を跳んだ。8月、ヘルシンキの欧州カップでは17m09。同じ月の末、ソフィアのユニバーシアードでは17m30の記録で優勝している。

現在の三段跳びの世界記録は、ブラジルのジョアオ・オリベイラ選手の持つ17m89。17mラインを越せば、三段跳びでは好記録と目されるのが普通である。ピスクーリンが専門家の関心をひくようになったのは、昨年が初めてではない。何しろ、もう25歳だ。にもかかわらず、ピスクーリンは一九七七年の"発見"と言っていい。昨年、このレニングラードの学生は、ジュッセルドルフ（西ドイツ）で9月の初めに開催された陸上競技史上初のワールド・カップ大会に欧州チームの一員として選ばれた。

ピスクーリンの体格（一七六cm、72kg）は他の選手と比べて特に優れているというわけではない。これまでの三段跳びのチャンピオンたちに比べると、はっきり見劣りする。背の高いオリベイラ、あるいは先輩の、オリンピックで3連勝したビクトル・サネエフと並ぶと、子どものように見える。ところが、ジャンプカはかれらと同じレベル、あるいはそれ以上なのである。ピスクーリンは語る。

「私とコーチは、自分にはチャンピオンになるための生まれつきの素質がそれほどないということをすぐ理解しました。だから、努力して力とスピードを身に付けたのです。現在、一〇〇mを10秒04で走れるし、一七五kgのバーベルを挙げています。三段跳びでいい成績を出そうと思ったら、強い足が必要です」

ピスクーリンは中等学校を卒業後、技師になるつもりだった。工業大学の入試にいい成績で合格したが、一年後に体育大学へ移った。

「体育教師という職業は、ほかのどんな専門とも変わらない立派な仕事だと思います。私はスポーツの理論的な側面を知りたいのです。知識がもっと深まれば、もっと遠くまで跳べるでしょう」と、ピスクーリンは語った。

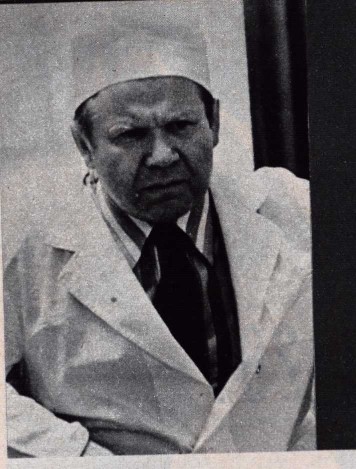
非常に魅力的な若者で、ソフトな、内気な印象を与える。眼鏡の奥で目が細まる（軽い近視で、試合では眼鏡を外す）。インテリで、多くのことを知り、多くのことに関心を持っている。

アナトリー・ピスクーリンが一九八〇年のモスクワ・オリンピックで、スポーツマンだけが夢見ることのできるオリンピック優勝を達成することを期待しよう。

心臓血管系疾患と最近の外科学

サベリエフ医学アカデミー会員に聞く

ウラジーミル・イワノフ



今では簡単な手術で

…外科医は2本の細い導線を取り、その先端を、電気コードのプラグをコンセントに差し込むように、心臓に突き刺す。導線のもう一方の先端を白いプラスチックのブリケットの端子にねじ込む。すると心臓はペースメーカーによって与えられたリズムで均一に、力強く鼓動し始める。これで今後何年ものあいだ、患者が心臓の不調を訴えるようなことはなくなる。ペースメーカーは将来、取り替えを必要とするが、これはもっとも簡単な手術によって、心臓に手をつけずに行われる。

私はビクトル・サベリエフ・ソ連医学アカデミー会員の執刀によるこのような手術を見学した。ペースメーカーを埋め込む心臓手術は、第2モスクワ医科大学付属外科病院では普通の、日常的な手術となっている。

心臓や血管を患っている人々は、大学病院のサベリエフに診てもらおうと希望する。患者のこの人にたいする信頼は絶大で、患者が心配するのはただ、他の副次的な原因でこの外科医から手術を断られやしないかということだけである。ところが、手術というものは、人間は他のどんな手段ももはや役に立たなくなったときにはじめてそれを受ける決心をするものなのだ。

何が現在、外科医の仕事を決定しているのか？　近年、外科学はどのように変わったのか？

ビクトル・サベリエフは語る。

「外科医の手は現代でももっとも優秀なかれの道具である。生まれつきの能力だけでなく、知識、経験、技能が外科医の行動を支配するとしても、もちろんそうだ。外科医が科学の新しい部門——医学サイバネチックスの成果を全面的に利用するとしてもそうだ。コンピュータは医学情報を瞬時に分析して評価をくだす能力があるので、医師の信頼しうる助手になっている。私はこのような〝協力関係〟が医師の威信をも、思考をもそこねないと考えている。外科医も技師や数学者と肩を並べてサイバネチックス・システムの開発に参加している。

切除から修理へ

一般に七〇年代の外科学は質的に変わった。以前は損傷した臓器の切除が外科学の基本原則だったが、いまは外科医はその臓器をつくり直し、整復し、改良しさえする。たとえば先天性の心臓欠陥症の場合がそうだ。心筋硬塞、脳卒中、高血圧症のような〝世紀の病気〟は、整復手術によって予防できる。

すべては早期診断にかかっている。いわゆる脳卒中は脳に通ずる血管内の血流の障害の結果だからだ。障害はだんだんと進行する。これらの初期変化を医師はまず発見しなければならない。このためにわれわれは術前診断法を作成中である。

たとえば、心臓の血管内に造影剤を注入し、レントゲン写真でその明暗を測定することによって血管の障害の程度を診断するだけでなく、〝修理〟を必要とする個所を正確に決定することができる。手術はその後で行われる。すなわち血管を狭め、血流を乱している変化した血管壁が除去される。これによって人間は重大な発病の脅威を免れる」

ビクトル・サベリエフは大動脈、動脈、小動脈でのもっとも複雑な手術を日常茶飯事のように語る。だが、この簡単さのかげに研究者の入念な作業、決断力があるのだ。

サベリエフの病院の中枢は研究室である。まさにここで高血圧症のような重い疾患にたいする見解で革命がなしとげられた。まだ15年前には血圧を下げるための十分に有効な手段がなかった。いわゆる悪性の若年性高血圧症の場合にはとくに悲劇的であった。明らかな原因もなく、とつぜんに血圧の上昇、失明、腎臓や心臓の障害、脳出血——悲劇は急激に、数ヵ月で展開された。

今日ではこの疾患の発生と進行の微妙なメカニズムが明らかになっている。整復手術が開発された。動脈の閉塞個所が切除され、その代わりに弾力性のある化学繊維のラフサンまたはフトルロンの管が縫い付けられる。やがてその管の上に本来の組織が生えてくる。

血栓をバルンで取り除く

血液の凝固物——血栓が大動脈の分岐部でつかえた場合、それを取り除くことはきわめて複雑だった。腹腔を切開し、大動脈を露出して切断しなければならなかった。これはもっとも困難な手術である。学者たちは考え込んだ。腹腔を切開しないで大動脈の分岐部をきれいにするにはどうしたらよいか？　緊張した研究、動物実験、精力的な思考——ついに独創的な手術方法が開発された。外科医は大腿動脈を露出して、その中へ先端に丸いバルン（球）のついた細いカテーテルを入れる。血管にそって大動脈に達したカテーテルは血栓を突き通す。バルンが〝栓〟の向こう側に達したときにバルンに液体を圧入すると、バルンはふくらむ。そして、栓ぬきのようにこの血栓を押し出す。

新しい動脈浄化法の開発者たちは、時おり奇妙な余病に出会った。病人は手術に立派に耐えたように見えたのに、突然高い熱が出て、重い中毒症状が起こる。原因は？　組織の長時間にわたる放血のさいにその組織内に毒物がたまるからだった。正常の血液循環が回復すると、その毒物は体中にばらまかれる。学者たちはこの余病を取り除く方法を提案した。静脈内に長くとどまっている血液を毒物と一緒に〝汲み出し〟、血管をすっかり洗浄してから血液を送る。

ビクトル・サベリエフは語る。

「心臓や血管の病気の原因は何にあるか？　その発病機構についてのわれわれの知識には、まだ少なからぬ未解決の部分があるということは認めなければならない。数年前にアテローム性動脈硬化症にたいする単純な見解が普及していたのを覚えておられると思う。毎朝ランニングすること、油っこい食べ物をとらないこと、そうすれば血管壁にコレステロールがたまるのが防げるだろう、と。しかし病院を訪れる人の中にはこの指示に厳格に従った人が少なからずいる。いったいなぜ同じ食べ物、同じ生活様式なのに、ある場合にはアテローム性動脈硬化症が心臓血管系をおかし、ある場合にはそのようなことがないのか？　これはナゾだ。

心臓血管系疾患の進行に重大な役割を果たすのが物質代謝、免疫、神経・ホルモン・遺伝要因であることがいまではもう明らかになった。これらの知識は心臓病の成功的な予防と治療のカギだ。私はこの問題は外科医をふくむすべての医学者の努力によって解決されると考えている」

トピックス

氷河時代からのマンモス

1977年夏、ソ連北東部マガダン州で永久凍土の中から子どものマンモスの死体が発見された。これは生後8ヵ月の赤ちゃんマンモスで、体重95kg、体長115cm、体高100cm、鼻の長さが57cmあり、凍土の中に4万4000年間眠っていた。恐らく、この赤ちゃんマンモスは小さな湖か沼に落ちて、おぼれ死んだのだろう。このように急速に〝埋葬された〟結果、所々かなり長い褐色の毛で被われた体はもとより、皮膚さえも完全に残っていた。

発見されたマンモスは学者の注目の的になっている。レニングラードのソ連科学アカデミー動物学研究所でレントゲン検査をしたところ、はえかかった乳歯が発見された。胃の中には食べた草の残りが見つかった。さらに研究したあと、レニングラードの動物博物館でことし中に公開される。



マガダン州で発掘された赤ちゃんマンモスの死体

ソ連の物価は安定している

ゲンナジー・ピサレフスキー

安定を示す統計

ソ連にはインフレーションがない。これは社会主義的計画経済が達成した最も重要な成果の一つである。たとえば一九七七年には、食料品の99%、非食料品の90%以上が、一九七〇年と同じ価格で販売されている。指摘しておかねばならぬのは、一九七二年と一九七五年が今世紀最悪の干ばつ年であったにもかかわらず、物価騰貴が起こらなかったことである。国内予備を最大限に動員し、海外で穀物を買い付けることによって、ソ連は、消費者を犠牲にすることなく、自然災害がもたらした結果を克服することができた。国家がすべての支出を負担したのである。

ソ連で現在実施されている小売価格体系は、一九五〇年代半ば以来、事実上変わっていない。この間に総指数は、一九六二年の畜産物価格の引き上げにより、わずかに1ポイント大きくなっただけである。以来16年間、食肉、牛乳、卵、バター、チーズなどの価格は変わっていない。

ソ連における多数の物品、とくに日用必需品の価格は、時の観点から見て、外国のそれを標準にすれば、信じがたいほど古いものばかりである。たとえばパンその他の穀物製品、砂糖、ひきわり、主な魚その他数多くの物資の価格が、ほぼ1/4世紀にわたって変わっていない。

電気、ガス、暖房、タクシーを除くすべての都市運輸施設その他の必需サービスの料金は一九四八年以来、つまりほぼ30年間引き上げられていない。また家賃も一九二八年以来、ほぼ50年間にわたって引き上げられていない。公共施設（電気、ガス、暖房、電話その他）までふくめた家賃は、平均で中間家計のわずか3—5%を占めるにすぎない。

物資の社会的重要性

ソ連では、物の価格を決める権利が企業にはない。価格を決めるのは国家である。物の社会的重要性がまず第一に考慮される。その物が必需品であるならば、その価格はできるかぎり低く決められる。ぜいたく品、たとえば貴金属・宝石類などの価格は高く決められる。

主要食品、すべての子供用品、医薬品など数多くの必需品が原価以下で、つまり損をして売られている。しかしそのために、すべての家庭が、とくに低所得の家庭がこれら必需品を手に入れることができるのである。

損は国家の補助金で埋められる。そしてこの種の補助金は、年間数百億ルーブル（円に換算すれば数兆円）にのぼっている。たとえばソ連では、住宅が国家予算の資金で建設されていて、一〇〇世帯のうち80世帯がタダで家を手に入れている。そして家賃は世界で最も安く、家の維持・管理費の1/3を償うにすぎず、残りの2/3——年間五〇億ルーブル以上は国家の補助金でまかなわれている。

いうまでもないことだが、国家予算を損失だけで編成することはできない。反対にソ連の国家予算はいつも、支出よりも収入の方が多い。国家は、ぜいたく品、アルコール飲料その他第一級の必需品でもなければ、第二級のそれでさえない品物にたいして高い価格をつけることによって、その損失の一部を償っている。ソ連では税金も非常に安い。たとえば一九七七年度予算について見ると、それは歳入の8・7%にすぎない。予算の主な歳入項目は、工業、農業、日常生活サービスその他の利益からの控除金である。

価格形成の諸問題

問題はまだ非常に多い。新製品の価格決定の場合にはとくにそうである。この問題を扱っているのは、ソ連閣僚会議国家価格委員会がその活動を指導、調整している専門機関である。

全国家的規模で計画化が行われているおかげで、ソ連の経済専門家たちは、インフレを追放した正確な価格形成方式を作り出すことができた。しかしこのためには、生産品の価格が客観的に決められる。つまり、生産品の原価（価格の第一の根拠）を考慮し、合理的規準の利潤を考慮し、そして最後にその品物なりサービスの社会的重要性を考慮して価格が決められている。

単一の国家価格形成方式は、需要と供給を前もって計画的に均衡させ、予算編成、企業収入、国民生活水準の向上に積極的影響を与え、ルーブルの安定的相場を維持することを可能にしている。ソ連では、価格の単一的国家秩序が無条件に順守されている。このため国民の貨幣収入の増額は完全に実質的なものとなっている。たとえば一九六六—七五年の間に、ソ連では賃金が46%引き上げられたが、この期間に実質所得も（住宅建設、運輸、教育、医療、社会保険など国民の社会的必要をまかなう社会フォンドからの収入を計算に入れると）72%の増となっている。

バム鉄道の"門"——ウォストーチヌイ港

インナ・ジューコワ





ほこりも、騒音もないチップ・バース。チップは特殊なシステムで不純物を取り除かれ、電子ハカリを通過し、水で湿らせ、エア・ポンプで直接、船倉に送り込まれる。

▲コンテナ・ターミナルで荷揚げする日本船シベリア丸。コンクリート製の広場は四万四〇〇〇㎡もある。このようなターミナルが八つ建設され各ターミナルは七万個のコンテナを収容できる。

ソ連極東のウランゲル湾にあるナホトカ港は、日本ではよく知られているが、新港ウォストーチヌイが完全に操業を開始すれば、この地区はもっとよく知られるようになるだろう。ウォストーチヌイは貨物処理能力ではソ連最大の港になる。

シベリアと極東の強力な発展とバイカル・アムール（バム）鉄道の建設は、膨大な天然資源利用への道を開いている。ヤクーチア、プリモリエ（沿海）地方、アムール州の石炭埋蔵量だけでも数兆tになり、ロシア連邦共和国の木材資源の1/3がここ極東にある。近い将来、製鉄所、非鉄冶金工場、製油所、炭鉱等の企業が出現し、新しい広域産業コンプレクスが形成されるだろう。

この状況の中で極東の貿易ルートの通過能力を大幅にアップする必要が生じている。一方、ほとんどの既存港は市街部が発展したため、拡張の可能性が制限されている。こうして新しい港の建設が決定された。

ウランゲル湾に白羽の矢が立った。この湾は冬の凍結が軽く、水域が広く、水深が深く、長さ12・5kmの何も建っていない海岸線があり、鉄道と道路に近い。8年前に建設の始まったこの最新の大型港のために、すべてがおあつらえ向きだった。

ウォストーチヌイ港の完成時の年間能力は、石炭処理が一〇〇〇万t、チップ八〇万t、コンテナ一二万—一四万個。これは平均すると年四〇〇〇万tの貨物であり、ナホトカ港の能力の5倍で、木材、一般貨物の輸出における極東海上ルートの貨物取扱量を一挙に倍増する。

アメリカ、カナダ、日本、イギリス、スカンジナビア諸国、西ドイツ、イタリア、フランス、スペイン等からのソ連経由コンテナ輸送サービスが改善される。コンテナはソ連経由の場合、アフリカ回りの海上コースよりも一万四〇〇〇km、パナマ運河経由よりも七〇〇〇km短縮される。

関係者によると、この港の主要な特徴は、その超最新性にある。最新の国産、外国製設備を備え、今日すでに総合的機械化の水準は98・8%に達している。コンピュータ・システムが湾内の船舶運行制御はもちろん、貨物列車や自動装置など、すべての運輸機関とバースに接岸した船舶の荷役作業進行表との調整を担当する。

ウォストーチヌイ港の装備には二国間経済協定のワク内で日本、イギリス等の企業や専門家が参加している。現在コンテナ設備、荷役運搬装置、各種技術がこれらの国から導入されている。

数千の国際規格コンテナを積み換える通過業務が特別の経済的側面を持っていることは興味深い。それは、積み換えで得られる資金によって、（実質上コンペーセーション方式で）新しい輸入設備の代金が支払われているからである。

ウォストーチヌイ港は、数次の工期で建設されている。コンテナ、木材、チップおよび乗客用施設を建設する第一期工事は終了した。第二期工事は、バム鉄道がヤクート粘結炭とアムール電力用炭を太平洋側に出荷し始める本年中に完了する。建設が完全に終了するまでに60以上の大型船舶用バース、一般貨物や化学貨物、コンテナ、石炭、穀物、機器類、設備、金属等の荷役をする大型専用施設が操業に入る。ウォストーチヌイには、毎年数千隻の外国船が入港するようになる。

小さな村の図書館で

カメラ　E・コトリャコフ

統計によると、ロシア連邦共和国では10人のうち9人までが定期的に本を読んでいる。ソ連ではどんな辺ぴな村にも図書館がある。ここに掲載した写真は、ウラル地方スベルドロフスク州の一小村の図書館で撮影したもの。



だれでも自由に本が取り出せる…

このウラルの古い村チェトカリノの大通りに面して、アカマツの丸太造りの家が一軒建っている。この家は村人なら、だれでも知っている。村人たちが司書のアントニーナ・チェルノワの名前を取って、〝アントニーナの家〟と呼んでいる村の図書館なのだ。

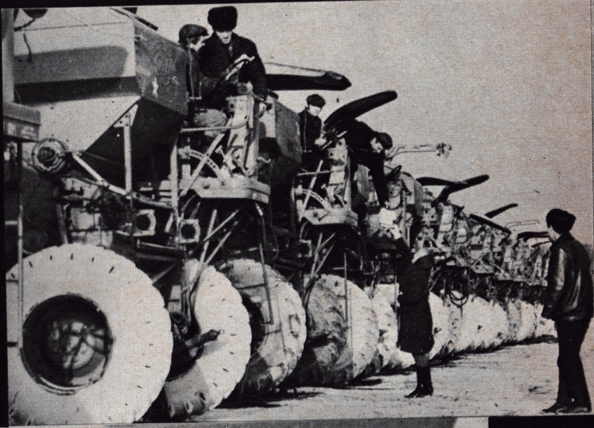
畜産ソフホーズ（国営農場）の中心になっているチェトカリノ村の人口は、約二〇〇〇人。そのうち一三〇〇人が図書館の定期的利用者である。この図書館の蔵書は約一万四〇〇〇冊。このほか、50点以上の新聞と雑誌が定期的に送られてくる。利用者の読みたいと思う本がない時には、司書のチェルノワは地区図書館に問い合わせたり、ある図書館から別の図書館へ本を一時貸し出しする業務を担当している図書館サービス機関へ注文したりする。

〝アントニーナの家〟の読者層は広い。利用者の最年少者は7歳、最年長者は86歳である。全利用者のうち1/3は中等学校の生徒。かれらはいつでもこの図書館で学科に必要な本を見つけることができる。チェトカリノ村の住民の多くは自宅に蔵書を持っており、一人平均、年に25冊の本を読んでいるが、毎晩数十人の利用者がこの図書館を訪れる。

毎週木曜日、村人たちは仕事を終え



年若い利用者たちには司書のアントニーナ・チェルノワが読む本の相談に応じている。



ソフホーズの運転手たちに注文の図書を届けるのも、農村の司書の仕事。

てから図書館の閲覧室に集まり、読んだ本の感想を話したり、意見を交わしたり、議論したりしている この図書館では文学の夕べも開かれている アントニーナ・チェルノワはそのためにスベルドロフスク州在住の作家や都市の劇場の俳優（戯曲の断片を演じてくれる）、スベルドロフスク大学その他の大学の文学の先生を招いている

昼の休けい時間、チェルノワ司書の姿をソフホーズの畜産場でよく見かける。これは畜産場の作業員たちに新しい新聞や雑誌、新刊書を運んでくるのである



チェトカリノ村図書館の司書（館長）アントニーナ・チェルノワは27歳、スベルドロフスク教育大学卒。村では図書館のことを〝アントニーナの家〟と呼んで親しんでいる。



村の図書館では若者たちが集まって〝詩の夕べ〟も開かれる……

トピックス

ソ連映画、2年連続のグランプリ受賞

1976年のサン・セバスチャン国際映画祭（スペイン）でソ連映画『ジプシーは空へ消える』がグランプリを受賞した。この映画のエミーリ・ロチャヌー監督はマクシム・ゴーリキーのいくつかの短編小説の筋を利用していた。

1977年のサン・セバスチャン国際映画祭でも、審査委員会の一致した決定によってふたたびソ連映画にグランプリが授与された。今回の受賞作品はニキータ・ミハルコフ監督の映画『自動ピアノのための未完成小曲』。シナリオの基礎となったのはロシアの作家アントン・チェーホフの初期のユーモア諷刺作品群である。この偉大な作家の精神と手法に忠実に従いながら、製作者たちは多くの生活状況のこっけいな愚かさ、無意味さを描いている。監督と俳優たちは、20世紀のもっとも読まれている作家・劇作家のひとり、チェーホフの作品の繊細な心理的性格をきわめて正確にとらえ、表現することに成功している。

ボリショイ・バレエの新星ナジェジダ・パブロワ

オレグ・スリキン
カメラ　A・マカロフ



ウラルの都市ペルミ出身のこの20歳のむすめは、この年ごろの若い踊り子たちが夢にも見ないようなことをやりとげた。

ナジェジダはまたたくまに有名になった。16歳で全国コンクールの金賞を、17歳でモスクワ国際コンクールのグランプリを、そして19歳で、彼女はボリショイ劇場の晴れの舞台でジゼルを踊るのである。

これまでに十指にあまるバレエのスターたちを見てきたという米国の興行主ソル・ユーロックは、ナジェジダ・パブロワの米国公演の初舞台を見たあと、「私はこれまでにあらゆるものを見てきたが、もう一つだけ、ナジェジダをもう一度だけ見なければならない。そうすれば安んじて死ぬことができる」と語った。めったにほめることのないバレエ批評家たちも、彼女だけはもろ手をあげて絶賛するのである。

ナジェジダが見出されたのはボルガ沿岸の都市チェボクサリ。バレエの豊かな伝統を持つ町ペルミの舞踊家たちが、天賦の才能に恵まれた少女たちを求めて、この地に定期の〝探検〟に来た。そしてアマチュアの公演で当時8歳のこの少女に目をつけた。父がレントゲン技師、母が幼稚園教師の両親の説得にえらく骨を折った末、少女をバレエ学校の経験豊かなリュドミラ・サハロワのクラスに入れた。

ナジェジダは注意深くて聡明だった。そして非常に練習熱心だったので、教師はときには彼女にブレーキをかけねばならなかった。そうでもしなければ、ナジェジダは果てもなく練習を続けかねないのである。

バレエ教師のリュドミラ・サハロワは8年間、ナジェジダにとっては厳しくて優しい母親だった。熟練した職人がダイヤモンドを磨くように、サハロワは最も豊かなこの天与の才能に〝面をつけ〟、彼女の踊りに完全美の魂を入れたのである。

一九七二年の冬、サハロワはこの自分の弟子をモスクワの全国コンクールに出場させた。そしてペルミ・バレエ学校6年生のナジェジタ・パブロワは同コンクールで優勝して金賞を獲得した。さらに一年後には、23ヵ国の若い第一級の踊り手がその技を競ったモスクワ国際コンクールでグランプリを獲得した。

学校を卒業したナジェジダは一九七四年に、ペルミ・アカデミー・オペラ・バレエ劇場のソリストになった。初期の大役はといえば、アダンの『ジゼル』のジゼル役、プロコフィエフの『ロメオとジュリエット』のジュリエット、ミンクスの『ドンキホーテ』のキトリなどで、ナジェジダはこれらの役をきらめきと、日ならずして早くも身につけた確信をもって踊った。

若いソリスト、ナジェジダ・パブロワは一九七五年にボリショイ劇場で初舞台をふみ、初めてジゼルの役を踊った。この役は最も複雑な叙情的、劇的な役で、20世紀のすぐれたバレリーナ、アンナ・パブロワとガリーナ・ウラノワの当たり役である。こんにちでは、ソ連邦人民芸術家エカテリナ・マクシモワとナタリヤ・ベススメルトノワがジゼルを踊って成功している。このような〝仲間〟に入ることは、19歳のナジェジダにとって、けっして容易なことではなかった。ナジェジダ・パブロワの教師たちがとくに心配したのは、ジゼルの乱心の場面が彼女の力に余るのではないかということだった。これはまさしく、この若いバレリーナにとって試金石だった。しかしナジェジダの非の打ちどころのない踊りは、あらゆる疑念をきれいに吹き飛ばした。

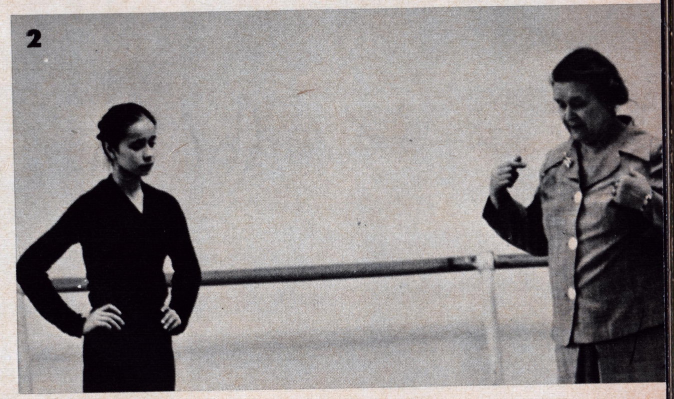


……今シーズンは、ナジェジダ・パブロワにとって、ボリショイ劇場での三度目のシーズンである。彼女のいまのレパートリーには、ジゼルをはじめチャイコフスキーの『くるみ割り人形』のマーシャ、ソ連のチホン・フレンニコフ作曲のバレエ『愛のための愛』(シェークスピアの喜劇『空騒ぎ』による)のヒロインなどがふくまれている。昨年秋には、盲腸炎手術後の規定の休暇を返上して、三度も下稽古をしたうえでキトリを踊った。有能な踊り手で男性パートナーのビャチェスラフ・ゴルジェーエフと、ソ連邦人民芸術家で女性バレエ教師のマリーナ・セミョーノワがナジェジダの毎日の仕事に協力している。

経験を積んだバレエ通でなくても、ナジェジダ・パブロワの無類の天分を理解し、舞台での彼女の飛翔の軽やかさを評価することはできる。ナジェジダは自然現象である、とある批評家は書いている。

ナジェジダ・パブロワは、ボリショイ・バレエの巨星群中でもひときわ輝くあらたな一等星である。





1 ファンたちは、ナジェジダにジゼルの難役がつとまるかどうか、大いに気をもんだ。しかし、彼女はそういう心配を見事に吹き飛ばした（アルバート役はアレクサンドル・ボガティリョフ）。

2 ソ連人民芸術家のマリーナ・セミョーノワが厳しい先生として、ナジェジダにバレエの神髄を教えている。

3 ナジェジダの才能の幅は非常に広い。ジゼルのようなドラマチックな役から、『くるみ割り人形』のマーシャの叙情的な役（写真）まですばらしい演技を見せる。

4 終演後も観客は長い間、ナジェジダ・パブロワを放そうとはしない。

工場で育つチョウセンニンジン

アレクサンドル・ナジャロフ

昨年の本誌19号に、植物の生命を人工的に調節する研究について紹介した『もみじに緑を取り戻す』という記事が掲載されたが、その中でも触れられていたチョウセンニンジンの人工的培養がいよいよ工場で始まった。


エフレーモフ生化学工場で生産されたチョウセンニンジンの細胞塊。天然ものの場合、これだけの根の細胞の量を得るには、ゆうに数百年を要するが、工場ではわずか数週間。

伝説的な〝生命の根〟——チョウセンニンジンの工業生産が、ツーラ州のエフレーモフ生化学工場で軌道に乗り、神経・精神病から腫瘍にわたる多くの病気を治すこの貴重な植物の最初の製剤数百kgが生産された。チョウセンニンジンはまた、老化を防ぎ、傷の治療に良く効き、血液の変化を防止し、毒物の作用を消す。

みすぼらしい5弁の小花が多数咲くこの植物は、古代からさまざまな伝説や言い伝えに包まれ、これまで金よりも高価だった。

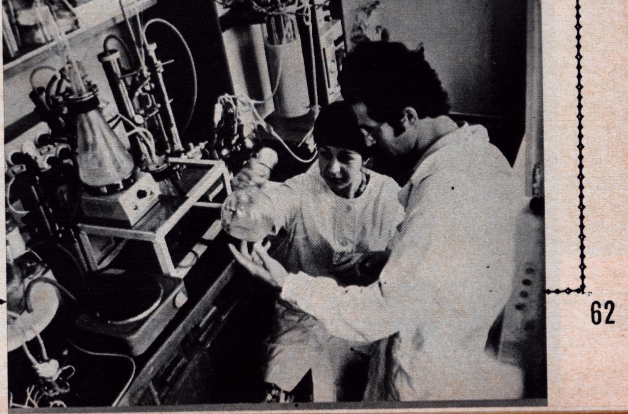
アンドレイ・クルサノフ・ソ連科学アカデミー会員の指導のもとに行われた植物生理学研究所の科学者たちの研究の結果、チョウセンニンジンからとれた薬は今や、これを必要とするすべての人が利用できるものになる。その一部は化粧品工業にさえも送られる。〝生命の根〟の薬品は、薬局で自由に買えるようになるし、ソ連の病院だったら無料で服用できるようになるだろう。

人工のチョウセンニンジンの開発にあたって、研究者たちはその根を栽培することは考えなかった。この類のない植物の有益な性質をすべて含む細胞構造を得るだけで十分だったのである。

周知の通り、天然のチョウセンニンジンは成長が非常に遅い。根が50gほどに育つのに50年もかかる。しかし、チョウセンニンジンを傷つけると、この傷を覆う特別な組織を分泌し、同時にこの〝包帯〟を常に供給する物質を蓄積することが認められた。つまり、植物にとって最も芳しくない時期に、細胞の最も速い成長が起こるのである。研究者たちはこの特質を利用することを提案した。そして結果が出た。本物のチョウセンニンジンを得るのに、今では半世紀ではなく、2ヵ月あればいい。

仕切られた特別室のがん丈な扉の内側には一定の温度と無菌状態が保たれている。この室内での作業に先立って、あらかじめ壁やテーブルはアルコールで消毒され、空気は紫外線で消毒された。また無菌を保つため、室内では黙って作業が行われる。作業というのは、30以上の成分からなる培養液の入ったフラスコにチョウセンニンジンの細胞をチタン製のスプーンで移すことである。そのあと密封されたフラスコは、チョウセンニンジンが数週間で〝成熟〟する一定温度と湿度の特別室に移される。

まもなく人工培養のチョウセンニンジンが人々を治療するだろう。


チョウセンニンジンの工業的生産方法を開発したモスクワの植物生理学研究所の科学者たちは、細胞塊を培養して植物組織を得るプロセスをさらに完全なものにしようと努力している。

文学

イサーク・バーベリ

文芸批評家　エブゲニー・シードロフ



ロシア・ソビエト文学のアンソロジー

生前にすでにヨーロッパで傑出した文章家という名声をかちとっていたイサーク・バーベリ(一八九四—一九四一)は、言葉にたいする態度が生活そのものにたいする態度でもあった作家だと言うことができます。

バーベリは短編の名人であり、磨き上げられた、精彩に富む言葉の芸術家でした。バーベリの仕事ぶりについては、作家コンスタンチン・パウストフスキーの印象的な証言が残されています。パウストフスキーはあるとき、バーベリの『オデッサ物語』の中の短編『コサック・リューブカ』の手稿のバリアントが22もあるのを見て驚きました。短編そのものはタイプのテキストで15枚でしたが、その草稿は約二〇〇枚もあったのです。

パウストフスキーは回想しています。

「〝22のバリアント!〟と私は、合点がいかないままつぶやいた。

〝まあ聞いてくれ!〟と腹を立ててバーベリが言った。同じ短編の22のバリアント。きみはそれをやりすぎだと思うかもしれない! だがぼくは22番目のバリアントだって印刷に回していいか、まだ自信がないんだ。もっと圧縮できるような気がする。こうやって淘汰してこそ、いいかい、言葉や文体の独自の力が引き出せるんだよ。言葉と文体のだ!〟と彼はくり返した。〝ぼくはつまらないアネクドート、市場の物語を取り上げ、それを自分でも捨てがたい作品にするんだ。それはひとり歩きする。それは海の石のように丸い。それは個々の部分の結合を保っている。しかも、この結合の力は、雷さえそれを砕くことはできないほど強い。この短編は読まれるだろう。そして理解されるだろう。それが笑われるとしたら、楽しいからでは決してなく、人間的な成功を嘲笑しようとする者が必ずいるからだ。ぼくが敢えて成功と言うのは、ここにはぼくたちのほかにだれもいないからだ。ぼくが生きてるあいだは、ぼくたちのこの会話をだれにも言わないでくれたまえ。約束だよ。もちろん、なぜかしら小商人のせがれのぼくに、芸術の悪魔なり天使なりが——どう呼んでくれても結構だが——住みついたのは、ぼくの手柄じゃない。そしてぼくは、奴隷か荷を積んだラバかなんぞのように、それに服従しているんだよ。ぼくはそいつに自分の魂を売り渡してしまったから、できるだけよく書かなければならない。ここに、ぼくの幸福あるいは不幸がある。おそらく不幸だろうね。だが、ぼくからそれを取り去ったら、そいつといっしょに、ぼくのからだ中の血管から、ぼくの心臓から、すべての血が消え失せてしまい、ぼくは噛みつぶされたタバコの吸いがらよりも価値のないものになってしまうだろう。この仕事がぼくを、オデッサの辻哲学者にではなく、人間にしているんだ〟」

バーベリはオデッサのユダヤ商人の家に生まれました。彼の最初の諸短編は一九一六年にゴーリキーによって世に出されましたが、バーベリの名を真に有名にしたのは、その8年後につくられた一連の短編を集めた『騎兵隊』です。国内戦(一九一八—一九二〇)当時、バーベリは有名な第1騎兵隊に加わって、革命の側に立ってたたかいました。そのたたかいの日々が、バーベリにユニークな生きた資料を与えたのです。

バーベリは主人公たち、やっとのことで意識的な生活に目覚め、闘争に目覚めた農民

や労働者を、ロマンチックに描いてはいません。戦闘にあっては、英雄的なものと残忍なもの、悲劇的なものとこっけいなものが騎兵隊員たちの中でからみ合っています。バーベリは、デテールを伝える点では容赦ないほど正しいが、その真実さ、『騎兵隊』のあれこれの人物の言葉や性格や心理の動きのナチュラリスチックな描写にもかかわらず、作者の強いリリカルなイントネーションが、この作品に革命初期の詩的な時代の特徴を与えています。

『騎兵隊』は多くの外国語に訳されています。この作品はロマン・ロラン、ハインリヒ・マン、ジャン・リシャール・ブロックなどに賞賛されました。

バーベリのもう一つのユニークな世界は、革命前の滅びつつあるオデッサです。陽光とアカシアの香にあふれる国際色豊かな港湾都市オデッサは、困窮に苦しむ大勢のユダヤ人と自足したブルジョアジーと黒百人組的な市会のまちでもあり、ちっぽけなギャングやロマンチスト、皮肉屋や夢想家、強者からのみ奪い、仲間である貧者からは決して奪わない犯罪の騎士たちのまちでもありました。バーベリの『オデッサ物語』の中には多くの異国情調、ユーモア、輝くような会話がありますが、同時に、憂いも、刺すような悲しみも、この作家に固有な、人間に希望を残しながら、ありふれた、しばしば恐ろしい現実を魔法のように反映している詩情も生きています。バーベリの作品では、つねに生活が勝利しています。バーベリは、真の意味の楽天家でした。

バーベリは寡作で、しかも苦労して作品を書きましたが、それは、この作家の異常なまでの芸術的潔癖性と、自分の作品への厳しい要求とによって説明できます。彼はプロットを有機的に〝虚構〟することができず、主人公のモデルを知っていて、彼らの生活を熟知し、登場人物の形象や言葉の中に自分を完全に感じることができなければ気のすまない人でした。こうして初めて、リアルな世界を変形させる創作ファンタジーが働き始めるのでした。このやり方が、多くの時間と綿密な準備を要求しました。

友人たちの評価によれば、バーベリはひじょうに人好きのする、楽天的な人間でした。彼は人々を研究し、その話を聞き、詳細に質問するのが好きでした。長いあいだ家から姿を消して、他のまちへ材料を探しに行くこともありました。彼の日記やメモは、目撃者の証言によれば、ノートで何冊もあったそうです。

バーベリの作品の多くは、一人称で書かれています。これは彼が好んで用いた手法ですが、文中の〝私〟と作者自身の形象とを同一視して、作品の中に自伝的裏づけを探そうとするのは、まちがいです。バーベリの文学にあっては、芸術と生活との結びつきは、もっと複雑です。彼は新しい現実をつくり出したのであって、実際にあったことをたんに記録したのではありません。

時とともにバーベリの文体は変わり、厳しさと簡潔さが増してきます。ここに紹介する短編『接吻』は、一九三七年に初めて発表されました。これは、包容力ある心理小説の巨匠とだれもが認める、すでに円熟したバーベリです。しかしここでも、彼は従来通り、第1騎兵隊の行軍の記憶に忠実です。

『接吻』は第1騎兵隊員たちの生活のエピソードを取り上げた作品ですが、『騎兵隊』の中には収められていません。物語は、一九二〇年代の初頭、若いソビエト国家とブルジョア・ポーランドの干渉軍との闘争の時代の話です。

バーベリにあってはいつもそうですが、この『接吻』でも叙情性とドラマ、ユーモアと悲劇、やさしさと荒々しさが密接にからみ合っています。

バーベリは高等教育を受け、いくつかの言語を知っていました。たとえば一九三五年にパリで開かれた平和擁護国際作家会議では、フランス語ですばらしい演説をしています。

バーベリのずんぐりした鈍重そうな体格、近眼をおおっている丸いメガネは、著名な作家の風貌には似つかわしくありません。彼は話を始めるまでは、外見的にはおとなしくて、目立ちません。自分の主人公たちと同様に、彼もまた、「女たちと馬が歩いて行く5月の草原」を見るように、太陽のもやを通して世界を見ていたのです。

一九五七年に、モスクワでバーベリの『選集』が出版されました。作家のこの芸術遺産には、数十編の短編、二つの戯曲、回想記の草案が収められています。それでは少ないと思われるかもしれません。しかし、その〝少なさ〟の中には、読者の意識の中にバーベリが長く生き続けるのに十分なだけの芸術と光が含まれています。

〔短編〕

接吻

イサーク・バーベリ
山田はじめ　訳

8月の初め、軍司令部はわれわれを再編成のためにブジャチチへ派遣した。戦争の初期にはポーランド軍に占領されていたブジャチチは、間もなくわれわれによって奪い返された。旅団は未明に続々とこの小都市に入った。私は日中に到着した。いい家はすでにふさがっており、私には学校教師の家が割り当てられた。天井の低い部屋には、桶や実のついたレモンの鉢植えのあいだに、からだの麻痺した老人が肘かけ椅子に座っていた。その頭には、羽根のついたチロリアン・ハットが載っており、白いあごヒゲが、灰だらけの胸まで垂れていた。目をしばたたかせながら、老人は片言で何か頼みごとを言った。私は顔を洗って、司令部へ出かけ、夜中に帰って来た。伝令でオレンブルグ・コサックのミーシカ・スロフツェフが、私に事情を説明してくれた。からだの麻痺した老人のほかに、彼の娘であるトミリナ・エリザベータ・アレクセーエブナと、スロフツェフと同じ名の5歳の息子ミーシャが居ることがわかった。娘はドイツとの戦争で殺された将校の後家で、身持ちはよかったが、スロフツェフの報告によれば、いい男になら身を任せるかもしれないとのことだった。

「うまくやりましょう」と言って彼は台所へ入って行った。台所では食器の鳴る音がしはじめた。教師の娘が彼の手伝いをしていた。食事をつくりながら、スロフツェフは私の向こう見ずについて、戦闘でどのように私が二人のポーランド将校に傷を負わせたか、ソビエト政権がどれだけ私を尊敬しているかを物語っていた。トミリナの控え目な、あまり大きくない声がそれに答えていた。

「あなたはどこで休むんですか?」と別れぎわにスロフツェフが彼女にきいた。「もっとわれわれの近くへおいでなさい。われわれは生身の人間なんだから……」

彼は大きなフライパンに入った目玉焼きを部屋へ持って来ると、それを机の上に置いた。

「彼女はその気になってますよ」と彼は席に座りながら言った。「口には出していませんがね……」

その瞬間、押し殺したささやき、衣ずれの音、重々しい、用心深い走り音が建物の中で起こった。われわれが食事を食べ終えないうちに、松葉杖をついた老人たちや、頭からショールをかぶった老婆たちが、列をなして建物の中へ入って来た。ミーシャ少年のベッドは食堂へ運ばれ、祖父の肘かけ椅子の隣のレモンの鉢植えの中に置かれた。エリザベータ・アレクセーエブナの名誉を守るために集まった非力な客たちは、荒天のもとの羊のようにひとかたまりになって、ドアにバリケードをつくると、物音がするたびに身をこわばらせながら、一晩中、音も立てずにトランプをやっていた。そのドアの奥で私は、気まずさと当惑のあまり寝つくことができず、やっとのことで明け方を迎えた。

「ご参考までに」と私は廊下で会ったトミリナに言った。「ご参考までにお知らせしなければなりませんが、私は法学部を卒業し、いわゆるインテリゲンチアに属しています……」

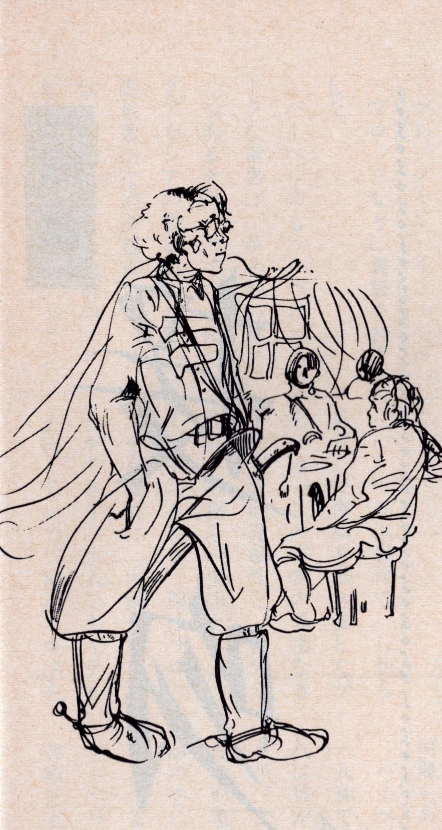
彼女は身をこわばらせ、その細いからだに生き写しの流行おくれの袖なしワンピースを着て、腕を垂らして立っていた。見開かれた、涙で光る青い目が、まばたきもせずに、まっすぐ私を見ていた。



二日後、われわれは友だちになった。教師の家族——善良で無力な人々のこの家族がその中で暮らしていた恐怖と無知には、際限がなかった。ポーランドの役人たちは彼らに、ロシアはかつてローマがそうであったように業火と野蛮の中に亡びた、と吹き込んでいた。私がレーニンについて、未来が湧き立っているモスクワについて、芸術座について語ると、子どもっぽい、おずおずとした喜びが彼らをとらえた。毎晩、赤っぽい、もじゃもじゃのあごヒゲをたくわえた22歳のボリシェビキ将軍たちが、われわれのところへやってきた。われわれはモスクワのタバコを吸い、

エリザベータ・アレクセーエブナが軍の食料でつくった夕食をたべ、学生歌をうたった。からだの麻痺した老人は肘かけ椅子に身を沈め、むさぼるように聴いていた。チロリアン・ハットがわれわれの歌に合わせて揺れた。老人はこうした毎日を、荒々しい、不意の、説明しがたい期待に身を任せて生活し、自分の幸せが何ものによっても陰らされないように、血に飢えていることによる若干の虚勢や、当時われわれがあらゆる世界的問題をそれで断じていたところの声高な無邪気を、われわれの中に認めまいと努力していた。

　ポーランド軍にたいする勝利ののちに、（家族会議ではそう決定していた）トミリナはモスクワへ行くだろう。われわれは老人を有名な教授のもとで治療させ、エリザベータ・アレクセーエブナは学校へ入り、ミーシャは、かつて母親が学んだ学校に任せることになるだろう。未来は、誰からも異議の出ないわれわれの財産のように思われた。戦争は幸福の荒々しい準備であり、幸福こそわれわれの性格の特徴であった。決まっていないのは、ただその細目だけであり、毎晩が、ロウソクの燃えさしが自家製酒のくすんだビンに映る力づよい毎晩が、その論議のうちに過ぎて行った。開花したエリザベータ・アレクセーエブナは、われわれの無言の聞き手だった。私はかつて、これ以上に夢中になりやすい、自由で臆病な存在を見たことがなかった。狡猾なスロフツェフは毎日夕方になると、われわれをクバンで徴発した籐編みの二輪馬車で、うち棄てられたゴンシオロフスキー公爵家の建物が夕日に輝く丘へと連れ出すのだった。やせた、だが背が高くて体格のいい馬たちが、赤い手綱にあやつられて、仲よく走った。無頓着な耳輪がスロフツェフの耳で揺れ、円天井の塔が黄色い花のテーブルクロスに覆われた堀の中から浮かび出てくるのだった。こわれた壁が、ルビー色の血でふくらんだような歪んだ線を空に描き、野バラの茂みが草の実を隠し、その昔ポーランドの王様たちが登った青い階段や梯子の一部が、灌木の茂みの中で輝いていた。私はあるときそこに座って、エリザベータ・アレクセーエブナの顔を引き寄せ、彼女に接吻した。彼女はゆっくり身を引くと、姿勢を直し、両手で壁をつかんで、壁にもたれかかった。彼女は身じろぎもせずに立っていたが、ぼうっとなった彼女の頭のまわりでは、燃えるような、ほこりっぽい光が駆けめぐっていた。やがてトミリナは身ぶるいし、何かに耳をそばだてるかのように頭をもたげた。やみくもに、歩を速めながら、彼女は壁を突いて離れた。彼女は駆け下りて行った。私は彼女を呼んだ。返事はなかった。下方では、籐編みの二輪馬車に身を投げ出して、赤ら顔のスロフツェフが眠っていた。夜、みんなが寝入ってしまうと、私はエリザベータ・アレクセーエブナの部屋へ忍び込んだ。彼女は本を遠く離して読書していた。机の上に置かれた手は、生きていないように見えた。ノックの音に振り向いて、彼女は椅子から立ち上がった。



「いけないわ」と彼女は私を見つめながら言った。「いけないわ、私の大切なひと」

　こう言って、むき出しの長い腕で私の顔を抱きかかえると、ますます強く、いつ終わるとも知れぬ無言の接吻を私に浴びせかけた。隣の部屋の電話が突然鳴り出し、私たちは跳び離れた。電話をかけてきたのは、司令部の副官だった。

「出動です。旅団長のもとへ出頭せよとの命令です……」と電話の主は語った。

　私は帽子もかぶらずに駆け出し、走りながら書類をポケットに押し込んだ。家々から馬が引き出され、馬に乗った人々が闇の中を叫びながら駆けて行った。立って乗馬に鞍をつけている旅団長のところで、われわれはポーランド軍がリュブリンの近くで前線を突破したこと、迂回作戦がわれわれに委任されたことを知った。部隊はふた手に分かれて、一時間後に出発した。目を覚まされた老人がレモンの木の葉陰から、落ちついて私を見守っていた。

「戻ってくると言ってくだされ」と彼はくり返し、頭を振った。

　エリザベータ・アレクセーエブナは薄い麻布の夜着の上に半外套を羽織って、われわれを見送りに通りへ出て来た。目に見えぬ騎兵中隊が、闇の中を狂気のように駆け去った。野原への曲がり角で私はふり返った。トミリナは身をかがめて、自分のまえに立っている少年の上衣を直していた。窓じきいの上でともっているランプの途切れがちな光が、彼女のやさしい、骨ばったうなじに流れていた……

　休むことなく一〇〇キロ走って、われわれは第14師団と合流し、反撃しながら後退しはじめた。われわれは鞍の上で眠った。休憩のときには、睡魔に負けたわれわれは地面に落ち、手綱を握って眠ったまま、すり減った野原の

上を馬に引きずられた。秋と、音もなく降り注ぐガリチア地方の雨とが始まった。黙りこくって、むく犬のように身を丸めて、われわれは円を描くように回り込み、ポーランド軍の包囲の輪の中にもぐり込んだり、そこから出たりした。時間の感覚がわれわれを見捨てた。教会で夜営しているときも、私はわれわれがブジャチチから10ベルスタしか離れていないなどとは、考えさえしなかった。スロフツェフがそれを思い出させたので、われわれは目を見交わした。

「肝心なのは、馬が疲れているってことです」と彼は陽気に言った。「そうでなきゃ、ひとっ走り行ってくるところなんですが……」

「そいつはまずい」と私は答えた。「夜になれば、連中は気がつくぞ……」

　そこで、われわれは出発した。われわれの鞍にはみやげ物——砂糖の塊、赤い毛皮の袖なし婦人外套、生後2週間の生きた子ヤギがつながれていた。道は、濡れた森の中をくねくねと走り、鋼鉄の星が、カシの樹冠をさまよっていた。一時間たらずでわれわれは、中央に焚き火のあとがある、麦粉で白くなったトラックや砲架やこわれた轅（ながえ）が積み重なっている場所に着いた。馬から下りずに、なじみの窓をノックした。白い雲が部屋を横切った。レースの垂れたあの同じ薄麻布のブラウスを着て、トミリナが玄関口へ走り出て来た。熱い手で彼女は私の手を取り、家へ引き入れた。大きな部屋には、折れたレモンの木に男ものの下着が干されており、見知らぬ人々が、病院のベッドのようにぎっちり並べられた簡易ベッドに寝ていた。汚れた足の裏を突き出し、口をゆがめて彼らは、うなされてしゃがれ声を立て、むさぼるように、騒々しく息をしていた。家はわが軍の戦利品委員会に占拠され、トミリナたちは一部屋に押し込まれていたのである。

「いつ私たちをここから連れ出して下さいます？」私の手を握りしめながらエリザベータ・アレクセーエブナがきいた。

　老人が目を覚まして、頭を振った。小さなミーシャは子ヤギを抱き寄せ、幸せそうな、声のない笑いを立てた。ふくれ面をしたスロフツェフが、その上におおいかぶさるように立って、拍車や穴のあいた硬貨や黄色い撚り紐のついた笛を、コサック乗馬ズボンのポケットから振りまいていた。戦利品委員会に占拠されたこの家には、身を隠すところがなかったので、私とトミリナは、冬に備えてジャガイモや蜜蜂の巣箱が入れてある板がけの納屋へ行った。納屋の中で私は、ゴンシオロフスキー公爵家の城跡に始まった接吻の道が、いかに避けがたい破滅の道であったかを知った。

　夜明けまぎわに、スロフツェフが納屋の戸をノックした。

「いつ私たちを連れて行って下さいます？」脇を見つめたままエリザベータ・アレクセーエブナが言った。

　しばらく黙っていてから、私は老人と別れを告げるために、建物へ向かって歩き出した。

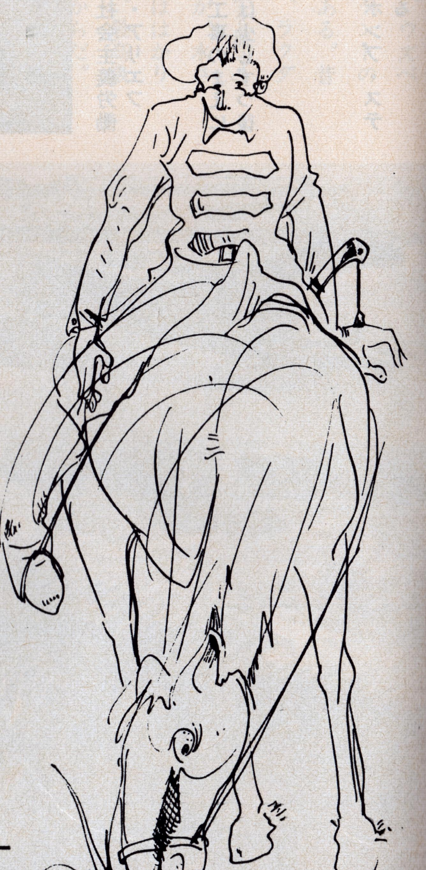
「重要なのは、時間がないということです」とスロフツェフは私の行く手をさえぎった。「乗って、出かけましょう……」

　彼は私を通りの方へ押しやり、馬を引いてきた。トミリナは少し冷たくなった手を私の方に差し出した。いつものように彼女は、頭をまっすぐ持ち上げていた。夜のあいだに休息した馬たちは、元気に駆け出した。カシの木の黒い交錯の中に、火のような太陽が昇りかかっていた。朝の歓喜が私を満たした。

　森の中に空き地が開けた。私は馬を乗り入れ、ふり返ってスロフツェフにどなった。

「もっと居られたのに……早いところ追い立ててくれたもんだな」

「早いもんですか」と彼は馬を並べながら、しずくのしたたる木の枝を手でかき分け、かき分け、答えた。「老人がいなかったら、もっと早く追い立ててましたよ……それなのに、老人は話に夢中になって、興奮し、脇へ倒れかかり……私が駆け寄ってみると、もうぐったりして、くたばっていたんです……」



　森は終わった。われわれは道のない耕された畑に出た。歩をゆるめ、あたりを見まわして、口笛を吹きながら、スロフツェフは正しい方向を嗅ぎ出して、空気とともにそれを吸い込むと、身をかがめて駆け出した。

　われわれは、ちょうどよい時に到着した。騎兵中隊では、出発するところだった。暑い一日を約束するかのように、太陽が暖めていた。その朝、われわれの旅団はポーランド王国のかつての国境を通過した。

（さし絵　V・フィラトビチ）

よみがえった大地

"飢えのステップ"の開拓事業

ゲンナジー・ヤストレプツォフ
カメラ　A・ワルフォロメーエフ



作業を指導する社会主義労働英雄アリミルザ・アリエフ

土地改良技師アリミルザ・アリエフは、あの日のことをきのうのように覚えている。トラックの縦隊が、半砂漠地帯の道なき道を進んでいた。一行はやがてとまった。アリミルザはリュックサックをつかむと、荷台のかこい越しに跳びおりた。足は灰のような砂にくるぶしまで埋まった。

「アリミルザ！」とだれかが叫んだ。「急いでテントを張ろう！　とにかく日陰をつくるんだ」

「はい！　まず周囲の様子を見てきます」とアリミルザは答えた。

灰色のラクダ草がまばらに生えた丘から、憂うつな景色が開けていた。それは、なだらかな起伏がつづく荒涼たる平野だった。その上には、色あせた、生気のない空が広がっていた。大ワシが一羽、はるか上空で旋回していた。遠方には塩沢地が白く見え、灼熱のかげろうが揺れていた。50度もある熱暑のこの土地では、どんな生物も耐えられないだろうと思われた。ゆう然とした大トカゲだけが、有史以前の姿そのままで、乾き切った、幾千年もの重みに圧縮された粘土の上を、ゆっくり這っていた。

"飢えのステップ"の開拓史

アリミルザの日記には次のようにしるされている。

一九五六年10月14日。

「このステップをだれがこんなにも正確に、正当に"飢えのステップ"と名づけたのだろう？　まったくその通り、太古から潤されたことのない土地だ。一〇〇万haにもわたる広大な死せる空地。ここを生き返らせ、ここに住みつき、生活をうちたてることができるだろうか？　しかし、やらねばならない！　まず、新しい土地の首都を建設しよう。本物の都市を。名前はもう決まっている。ヤンギエル。ウズベク語で"新しい土地"だ。運河を掘ろう。それは三〇万haの土地を潤すだろう。今日はまず栽培を始めよう。綿花ブルドーザ、スクレーパその他の機械をつくる。明日は農業にとりかかろう」

私はアリミルザ——今日では社会主義労働英雄——の日記のコピーを、本人の承諾をえて、大切に保存している。そこには、興味深い記述がたくさんある。だが、それはしばらくおいて、飢えのステップとは何か、なぜそれが注目されているのかについて、少し語ろう。

飢えのステップは、ウズベク共和国の首都タシケントの西方70kmのところにある。昔から「鳥の羽は燃え、ラクダは一〇〇歩あるいて涙を流す」と言われてきた。だが、水さえあれば、その価値ははかり知れないものとなる。最高級の綿花が栽培できるからだ。水についてのウズベク人の幾世紀来の夢は、勇士ファルハドの詩的な伝説を生んだ。ファルハドは大河を砂漠の方へ向け直して、砂漠を花咲く庭園に変えた……。何世紀もたったが、伝説は伝説のままで残った。ようやく10月革命後の一九一八年になって、ウラジーミル・イリイチ・レーニンが、飢えのステップの開発に着手するための五〇〇〇万ルーブルの支出にかんする法令に署名した。

第1次世界大戦、帝国主義諸国の干渉、内戦——これらすべてが終わったとき、国土はほとんど廃墟と化していた。工場の機械はとまり、機関車はレールの上で錆びつき、畑



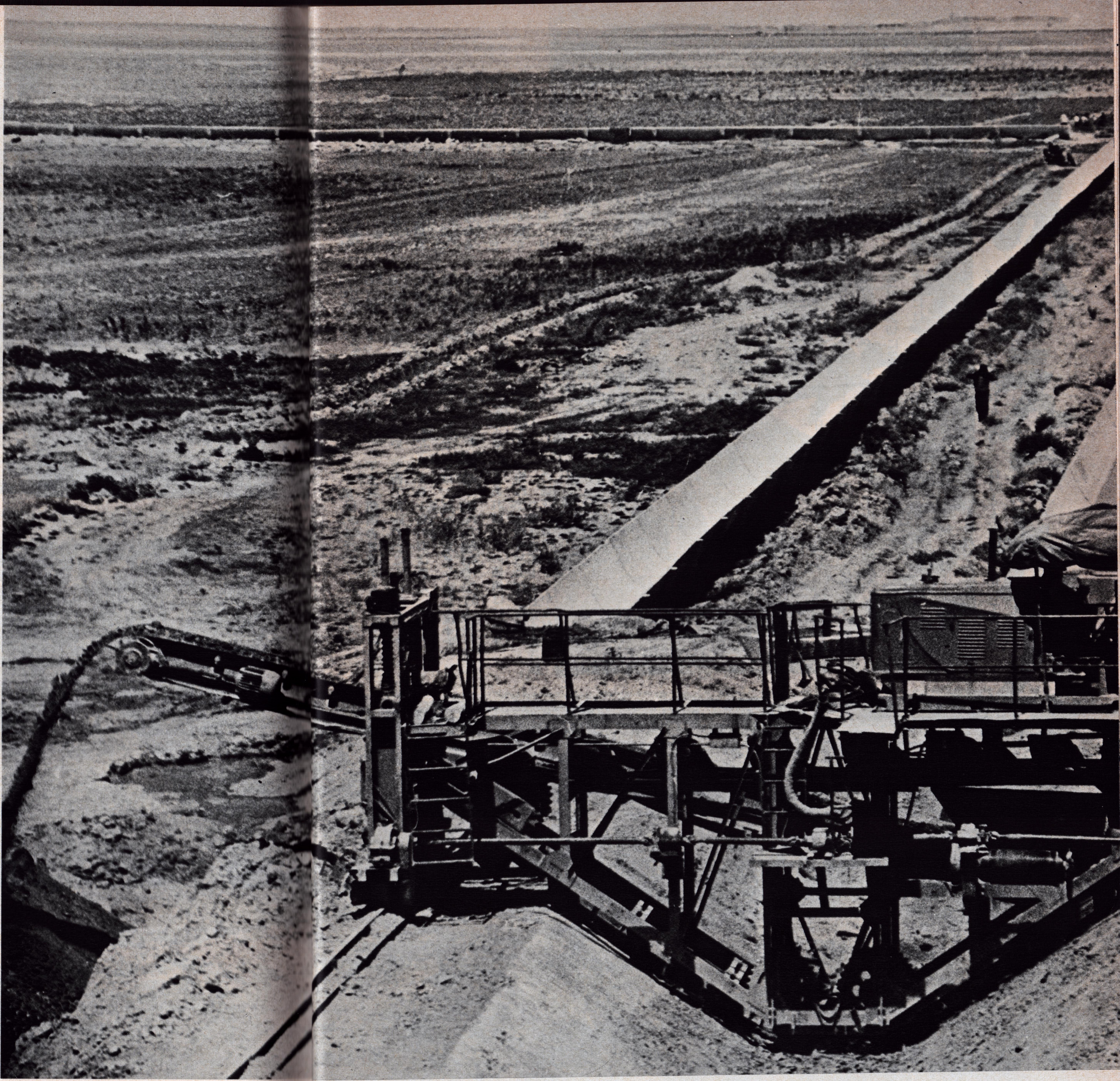
下右　着々と進む灌漑工事のまえに飢えのステップは少しずつ後退する



下左　砂漠のまん中にポンプ・ステーションをつくる



南"飢えのステップ"運河は子どもたちにとっても絶好の遊び場所



灌漑溝に水を供給する幹線用水路の建設

は荒れ果てていた。飢饉と混乱……だがそのときすでに、若いソビエト政権はあすの日のことを、不毛の荒野に庭園が花咲くことを考えていた。それ以来、毎年、不屈の仕事がつづけられた。とはいえ、資金はまだまだ少なかった。機材も足りなかった。

一九五六年から、国は飢えのステップの広範な開発に立ち上がった。一刻も早く飢えのステップを花咲く楽園に、国に綿花その他の農産物を供給する土地に変えるために、膨大な資金が投入された。

ふたたびアリミルザ・アリエフの日記から。

一九六〇年12月23日。

「東西二二六kmにわたる南"飢えのステップ"運河が盛大に開通。今後は三〇万haの不毛だった土地が、国に綿花を供給するだろう。運河沿いに、建設者と綿花栽培者のための現代的な、快適な都市型集落が生まれた。子どもたちは大よろこびだ。朝から夕方まで、水遊びをしている。一方われわれは、これからも新しい場所で自分たちの仕事をつづけ、灌漑溝をつくったり、用水路を掘ったりするだろう」

私はアリミルザが指導した工事区間の働き手の名薄をのぞいて、ウズベク人以外に、17の民族の出身者を見つけた。ソ連全国からやって来た人々である。彼らはすでに、みんなこの土地の住人になり切って、所帯を持ち、家を建てて暮らしている。

飢えのステップ建設局次長ニコライ・フラノフの生産会議での発言を引用しよう。

「飢えのステップでは現在、総合的な取り組みが行われています。それは何を意味するか？　何よりもまず、大きな国民経済的問題の解決にたいする広いアプローチを意味し

ています。世界で初めて、オアシス周辺の小さな土地ではなく、広大な半砂漠が、一度に灌漑されたのです。農業史上初めて、灌漑と同時に、地理上の一地域が、最新の科学技術の成果とあらゆる種類の建設の完全な工業化とにもとづいて、経済的にも社会・文化的にも開発されつつあるのです」

飢えのステップでは次々に大きな出来事が起こっている。みんなはもうそれに慣れっこになっているので、大事件でも日常茶飯事といった感じである。ただ、かつて半砂漠だったこの土地に、都市や集落と並んで20以上の大工業企業が建設され、約七〇〇kmの護岸工事を施された運河と約三〇〇〇kmの自動車道が走り、二五〇〇kmの送電線と一万八〇〇〇kmの灌漑用水路網がつくられていることを思い起こすだけである。

この地域の開発の全期間を通じて投入された資金は一七億ルーブル。膨大な金額ではあるが、すでに完全に回収されている。さらに現在、この土地は毎年、数百万ルーブルの利益を生みつづけているのである。一つだけ例をとれば、最近の10年間に、ここで二四〇万tの綿花が収穫された。

その収穫量は年ごとに増え、新しい綿花畑が次々に誕生している。現行の第10次5ヵ年計画（一九七六―一九八〇）の末までに、さらに二万六〇〇〇haの綿花畑が追加される。この地方のソフホーズでは、綿花の$\frac{4}{5}$までが機械で収穫されている。飢えのステップではまた、米や野菜や果物も大規模に生産されている。

最後にもう一度、アリミルザの日記を引用しよう。

一九七七年6月2日。

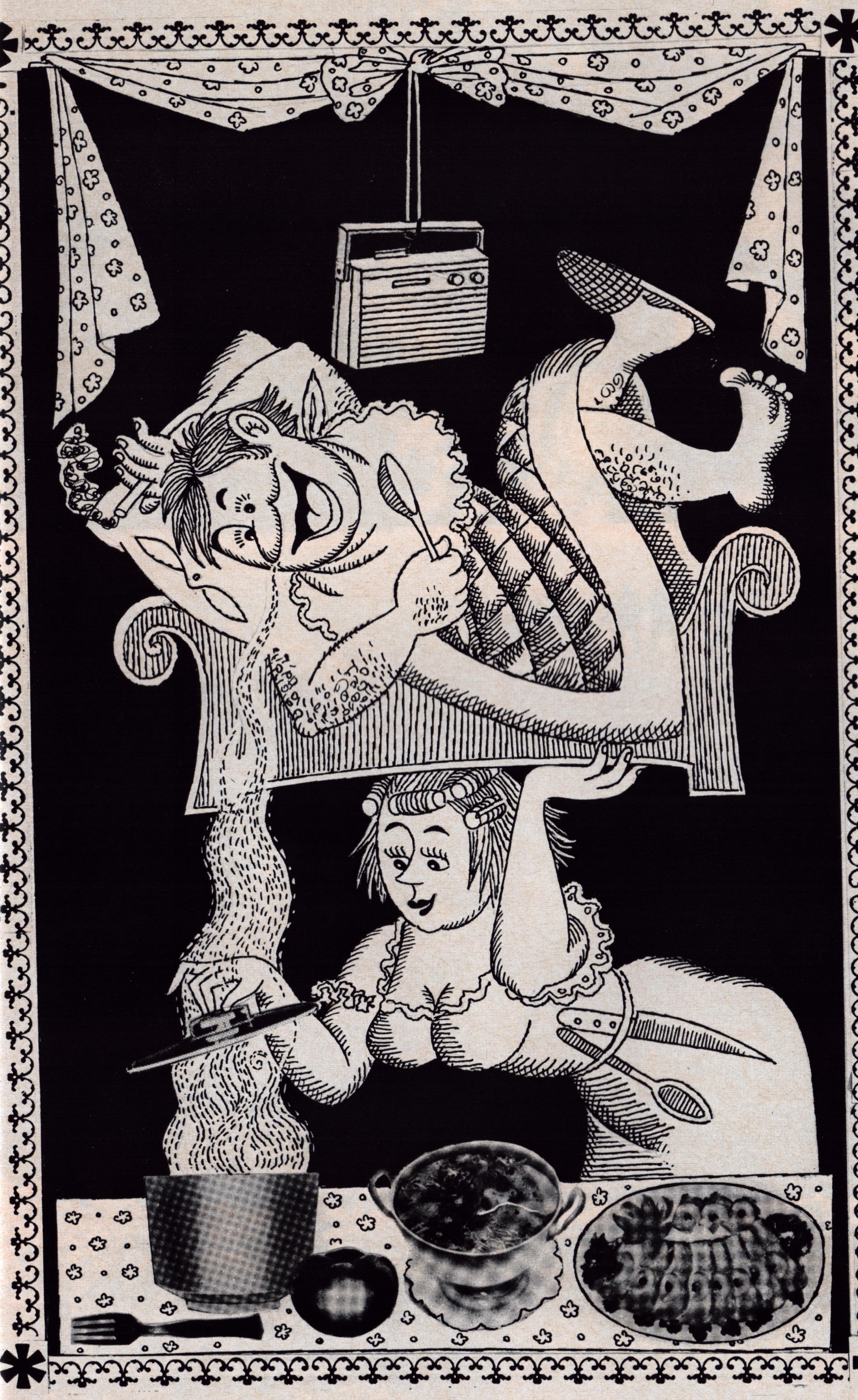
「夕方、仕事のあとで、わが家の新しい庭のベンチに私は好んで座る。静かで涼しい。樹木は葉をそよがせ、成長するにつれて力を蓄えているかのようだ。私はここ飢えのステップに、20年あまり暮らしている。もちろん、それなりの意味がある。ここに育っているものはすべて、かつては何も育たなかったところに育っているのだ。ここに建設されたものはすべて、私がこの手でつくったものだ。私は幸せだ……」


パフタコル地区のサビル・ラヒモフ記念ソフホーズでの綿花の取り入れ


かつての半砂漠で、いまでは牛の群が草を食み、水を飲む。


渇きをいやした飢えのステップは"恵みのステップ"に変わった。"白い黄金"――綿花の集積作業。

結婚生活ってすばらしい！



（リュドミラ・プロズイフ画）

仕事が終わって帰宅する。アパートの5階にあるわが家の入口に近付いて嬉しく思った。結婚生活ってすばらしい！

そら、ベルを押す。すると、妻がドアを開けるだろう。抱擁、キッス。着替えを手伝ってくれ、夕食を出してくれる。食後ソファーに横たわって休んでいると、妻はふわふわした毛布をかけてくれ、新聞を読んでくれるのだ。

私はほほえんだ。胸を張った。ベルを押す……応答がない。もう一度押す。ベルまたもなし。私の顔から微笑が消えた。毎日働き、疲れ、おなかをすかして帰ってくるのに、そのうえドアを自分で開けるなんて。

私はカギを取り出し、それをはめる場所を見付け、なんとかドアを開けることができた。カギをどう扱うか、すっかり忘れてしまったのだ。なにしろ結婚して5年も経っているのだから。

部屋に入る――暗い。おいしそうなにおいはしていない。私はとまどってしまった。電気をつけた。部屋はからっぽだ。妻はいない。あちこち見回わすと、書き付けが置いてあった。

「ドロぐつで部屋を歩かないでください。ドアのそばに小さないすがあります。それに腰かけてくつをぬぎ、スリッパにはきかえてください。スリッパはいすの下にありますから。

くつをぬぐにはひもをほどくことが必要です。ひもの先端を見付けて引っ張れば、編み上げぐつはほどけます。ひもをうんとゆるめれば、くつは簡単にぬげます。同じようにもう一方のくつもぬぎなさい。

今日は私はいませんから、ひとりで食べてください。私はすっかり用意しておきました。食事はレンジの上にあります。ただそれをあたためるだけになっています。なべにスープが入っています。なべはあなたの新しい帽子に似ており、やはり、緑がかった色です。肉とジャガイモはフライパンに、お茶はティーポットに入っています。

腹を立てないで――台所で食べてください。台所は浴室と並んだ小さな部屋です。台所がすぐ分かるように〝台所〟と書いた紙をドアに貼りました。

台所が分かったら、中へ入って窓の方に顔を向けて立ちなさい。右の方のすみに、白いつまみのついた低い小さな戸だながありますが、これがレンジです。そこにも〝レンジ〟と書いた紙が貼ってあります。

食事を温めるためにはガスに火を付けなければなりません。次のようにしなさい。絵のある小さな木箱を取りなさい。レンジの上の左にあります。その木箱を開けてマッチ――小さな棒です――を取り出し、それで木箱のわきを擦ると火が付きます。それを緑がかった色のなべの下にある、小穴のたくさんあいた鉄管のほうにもってゆき、片方の手で、窓から一番目の、小さなつまみを回しなさい。ガスはすぐに青い火となって燃えるはずです。ただ十分に注意して、やけどしないように気を付けて！

すべてが順調なら、フライパンやティーポットの下のガスに火をつけなさい。そのためには窓から二番目、三番目の小さなつまみを回しなさい。つまみを間違えないこと！　ガスが付かないと、中毒する恐れがあります！

時計を見て5分経ったら、窓から三番目、二番目、一番目のつまみを反対の方向に回わしてください。青い火が〝ボン〟と音を立てたら、消えたのです。テーブルの上にお皿を置きなさい。お皿はレンジの近くにあります。もし割ったら、もっと遠くにあるほかの皿を取って、それになべのスープをしゃもじで入れなさい。しゃもじ――それは長い柄のついた大きなスプーンです。しゃもじはマッチとならんで置いてあります。〝しゃもじ〟と書いた紙が上に乗っていますから。

お茶を注ぐとき、ティーポットのふたを落とさないようにね。もっとも、ひもでふたを取っ手にしばり付けておきましたが、万一にそなえ、手で押さえていたほうがいいですよ。

食事が終わったら、台所から出て、ソファに横になり、私を待っていてね。帰ったら、新聞を読んであげるわ。私は街角の美容院に行っています。怒らないでね。寂しがらないで！」

私はなんどか書き付けを読み返した。台所を発見した。ちょっと手でひねってみたが、それは窓のカギだった。それから新しい帽子をかぶり直し、美容院へとかけ出した。妻の手を取り、家へ、直接台所へ連れ帰った。

結婚生活ってすばらしい！

ウラジーミル・クリモビチ

АБВ

ПОПОЛНЯЕТСЯ ФЛОРА И ФАУНА КАМЧАТКИ

На Камча́тку из европе́йской ча́сти СССР при́были на самолёте необы́чные пассажи́ры — бо́лее трёх деся́тков бобро́в. Да́льнее путеше́ствие живо́тные перенесли́ хорошо́. Зате́м переселе́нцы бы́ли отпра́влены в доли́ну реки́ Камча́тки. Пе́рвое вре́мя бобры́ бу́дут находи́ться под наблюде́нием учёных Камча́тского отделе́ния Всесою́зного нау́чно-иссле́довательского институ́та охо́тничьего хозя́йства и зверово́дства, обоснова́вших возмо́жность акклиматиза́ции бобро́в на полуо́строве.

Фло́ра и фа́уна Камча́тки, несмотря́ на огро́мные разме́ры полуо́строва, относи́тельно небога́та. Поэ́тому в после́дние го́ды акти́вно предпринима́ются попы́тки обогати́ть живо́тный и расти́тельный мир полуо́строва, располо́женного в се́верных широ́тах.

На Камча́тке сейча́с успе́шно возде́лывают карто́фель, капу́сту, ре́дьку, морко́вь, други́е о́вощи. Хоро́шие урожа́и даёт чёрная сморо́дина, а в не́которых райо́нах — крыжо́вник и мали́на. Изве́стны дово́льно успе́шные попы́тки выра́щивания в доли́не реки́ Камча́тки не́которых зерновы́х культу́р. На второ́й год камча́тской жи́зни ста́ла плодоноси́ть в откры́том гру́нте клубни́ка.

Пополня́ется и камча́тская фа́уна. Так, приобрела́ уже́ промысло́вое значе́ние переселённая сюда́ онда́тра — в год добыва́ют по 20 и бо́лее ты́сяч зверько́в. Широко́ расссели́лась на полуо́строве завезённая в 1960 году́ но́рка. Осво́ились на Камча́тке и оказа́лись чрезвыча́йно плодови́тыми ну́трии. А в 1974 году́ вы́пущены в тайгу́ пе́рвые ло́си. Пополни́лся и мир перна́тых. В берёзовых леса́х доли́ны реки́ Камча́тки акклиматизи́ровались тетерева́ и ря́бчики. Тепе́рь здесь появи́лись и бобры́. Пе́рвые наблюде́ния показа́ли, что но́вые места́ им понра́вились.

本号テキストの訳文は，次号（第3号）に掲載の予定です。なお，前号のテキストの訳文は本号8ページのトピックス欄に掲載されています。

【注】

☆2行目： более трех десятков бобров 〈30 匹以上のビーバー〉

☆2行目： Дальнее путешествие животные перенесли хорошо 〈長旅に動物たちはよく耐えた〉。この場合の животные はもちろんビーバー。次の文章の переселенцы も同様。同じ単語をすぐ繰り返さないための言い換えの例である。

☆4行目： Первое время бобры будут находиться под наблюдением ученых ... 〈最初のうち，ビーバーたちは科学者たちの監視下に置かれる〉

☆5行目： ... института охотничьего хозяйства и звероводства 〈狩猟経営・毛皮獣飼育研究所の…〉

☆6行目： ... обосновавших возможность акклиматизации бобров на полуострове 〈ビーバーをカムチャツカに風土順化させ得ることを根拠づけた…〉。もちろん，この修飾句は文法的には ученых にかかる。

☆8行目： Флора и фауна Камчатки 〈カムチャツカの植物相と動物相〉。すぐあとに，животный и растительный мир полуострова という言い換えが出てくる。

☆8行目： несмотря на огромные размеры полуострова 〈半島の広大さにもかかわらず〉

☆12行目： черная смородина 〈クロスグリ〉，крыжовник 〈セイヨウスグリ〉，малина 〈エゾイチゴ〉

☆14行目： На второй год камчатской жизни ... 〈カムチャツカに移植されて2年目に露地でイチゴが実をつけ始めた〉

☆17行目： ондатра 〈マスクラット〉。ついでに，このあとに出てくる動物名は норка 〈ミンク〉，нутрия 〈ヌートリア〉，лось 〈ヘラジカ〉，те́терев 〈クロライチョウ〉，рябчик 〈エゾライチョウ〉

●なお，前号テキスト中，20行目の ... на первые четыре буквы русского алфавита, от А до Д ... は 〈A から Г まで〉の意味で，Д は含まれませんので，念のため。

本だな

ロシア語に訳された『おろしや国酔夢譚』

日本の作家井上靖氏の長編歴史小説『おろしや国酔夢譚』のロシア語訳が、このほどモスクワのナウカ出版所から発行された。訳者はボリス・ラスキン。発行部数五万部、定価1ルーブル20コペイカ。

この長編小説のテーマは、18世紀末にロシアに漂着した日本人たちの運命と、露日関係の芽生えについてである。本編の主人公の大黒屋光太夫は一七八二年12月、神昌丸の船頭として白子浦（現在の三重県）を船出して江戸に向かう途中、大あらしのために難破漂流し、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した。生き残った光太夫ら9人の日本人は、その後数年間シベリアの各地で幾多の辛酸をなめたが、ロシア人は官民ともにかれらにたいして変わることない厚意と援助を与えてくれた。

この本はドキュメンタリー小説である。ロシアに漂着した日本人の船乗りたちの話を物語るため、井上氏は日露双方のさまざまな史料を自由自在に活用したが、その骨子となったのは光太夫が漂流中およびロシア滞在中に書きとめた自筆の日記である。

この長編小説の冒頭の部分で井上氏は、光太夫が入露するよりも前の時代にロシアの大地を踏んだ日本人たちのことを想起している。周知のとおり、当時の日本のきびしい鎖国体制のもとにあっては、ロシア人と日本人が知り合えるのは、いたましい海上遭難事件の時だけだった。しかしロシアでは、これらの思いがけない日本からの客人たちはひじょうに大きな関心をもって迎えられていた。その最初のひとりのデンベイは、ロシア皇帝ピョートル一世が一七〇五年に当時のロシアの首都ペテルブルグに開設した日本語学校の最初の、そして開設当初はただ一人の日本語講師となった。

大黒屋光太夫らこの本の主人公たちもまた、ロシアで異例なほどの厚意で迎えられた。作者の井上氏は多くの史料にもとづいて、大きな共感と感嘆すら寄せてロシア人を描出している。光太夫たちがニジネカムチャツクで飢えに苦しんでいたとき、村人のロシア人たちはなにはさておき日本人たちのことに心を配っている。イルクーツクの学者キリル・ラクスマンはこの日本人の船乗りたちが長年の不在のあげくに日本に帰ったとき幾多の困難に直面することをよく理解して、かれらが一日も早く帰国できるようにあらゆる手をうっている。一七九二年（寛政4年）10月にロシア使節アダム・ラクスマンに伴われてようやく故国日本に帰ることができた光太夫は、ロシアをしのんで"善を悪で報いること断じてなき"国と呼んでいる。

この本を読むソビエト人は、勤勉で善良な日本人の船乗りたちの気立てをいつまでも忘れないにちがいない。光太夫たち日本人がその目で見た当時のロシアについての情報をできるかぎり多くこの長編に盛り込もうと努力したため、井上氏も若干の不正確な点を避けられなかったとはいえ、氏の筆力がつくりあげた各人物の形象は確かであり、興味しんしんたるものがある。

露日関係発生の由来を語り、鎖国により孤立していた日本にたいして世界と善隣への招請がロシアから発せられた事実を想起させる大作『おろしや国酔夢譚』は、日本ですでにりっぱな役割を果たしている。翻訳者ボリス・ラスキンのすぐれた力量とナウカ出版所のイニシアチブのおかげで、いまやソ連の読書人も井上靖氏のこの長編歴史小説に親しむことができるようになったのである。



ロシア語訳『おろしや国酔夢譚』の表紙

マイコープ市の柔道学校

ユーリー・ゼニュク
カメラ V・チェルノフ

「キモノ、つまり日本の柔道着はソ連の選手たちにも着こなせるようになったが、依然として世界では柔道の本家、日本の選手たちが主導権を握っている。われわれの目標は、技術で日本の柔道家に追いつくことだ」――こう語るのはソ連功労コーチで教育学博士候補のヤクブ・コブレフ。柔道の欧州、世界、そしてオリンピックのチャンピオンであるウラジーミル・ネブゾロフ選手の育ての親だ。

ソ連の選手たちが柔道で大きな成功を収めたことは、偶然ではない。半世紀前ソ連は、柔道に似た多くの技をもつ格闘技サンボの生まれ故郷となった。最近日本の柔道家やレスリングの選手たちは、サンボをマスターして自分たちの選手権大会を開催し、国際試合で立派な成績を収めている。一方、ソ連の有名な柔道選手は、ほとんど全員が始めはサンボをやっていた。

北カフカズのアディゲ自治州（クラスノダル地方）の中心地マイコープは、人口一二万の小さな都市だが、今ではソ連の柔道とサンボの一大中心地になっている。これは先ほどのヤクブ・コブレフの手柄だ。彼は体育中等専門学校を卒業したあと、主としてサンボ選手の養成にエネルギッシュに取り組んだ。彼の固い信念と説得力が物を言って、最初のトレーニングには、両親や祖父と一緒に数百人の少年たちがやってきた。これは11年前のことだった。

その後コブレフは、コーチとしての活動を続けながら、アディゲ教育大学とその大学院を修了した。ウラジーミル・ネブゾロフ選手は、自分自身にも弟子たちにも厳しいコブレフの人格こそ、マイコープ市の柔道とサンボを興隆させた原動力だと見ている。しかし、同時に彼は、これにはコブレフのコーチ、教育者としての個人的な資質のほかに、大衆性の重視とスポーツに対する創造的なアプローチというコブレフによって正しく選ばれた二つの原則が決定的な役割を演じたのだ、と強調している。

アディゲ自治州があるクラスノダル地方では、人口四五〇万のうち一〇〇万人以上が、三〇〇〇の体育団体でコーチの指導を受けて定期的にスポーツをしている。クラスノダル地方には60以上のスタジアム、七〇〇を超す体育館、約四〇〇〇の運動場があり、コーチの指導も含めてすべて無料で、だれもが利用できる。

アディゲ教育大学の体育学部長と兼任でコブレフが校長をしているマイコープ少年サンボ・柔道学校の生徒四〇〇人のほかに、何百人という児童や若者たちがこの学校の15の分校で技をみがいている。この記事の写真を撮影したジジハブル村をはじめアディゲ自治州の村や町や都市に開設されているこれらの分校では、ヤクブ・コブレフの弟子の有能なコーチたちが活躍している。

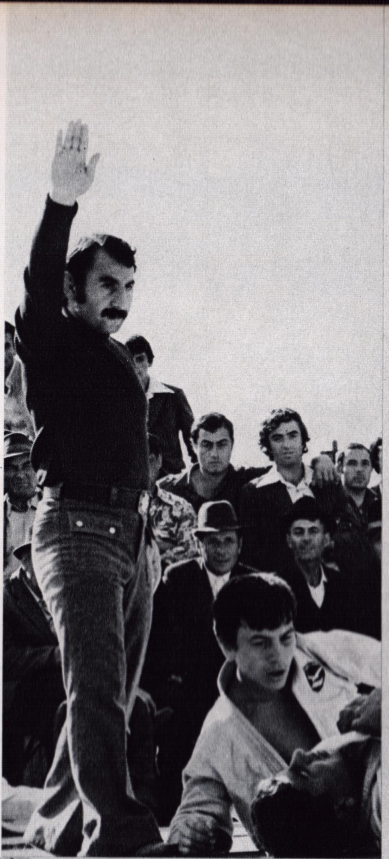
アディゲ自治州の村でコブレフが行かなかった所は一つもないだろう。この時に彼は、スポーツ学校の新しい分校開設の可能性ばかりでなく、古い民族闘技の調査も行った。



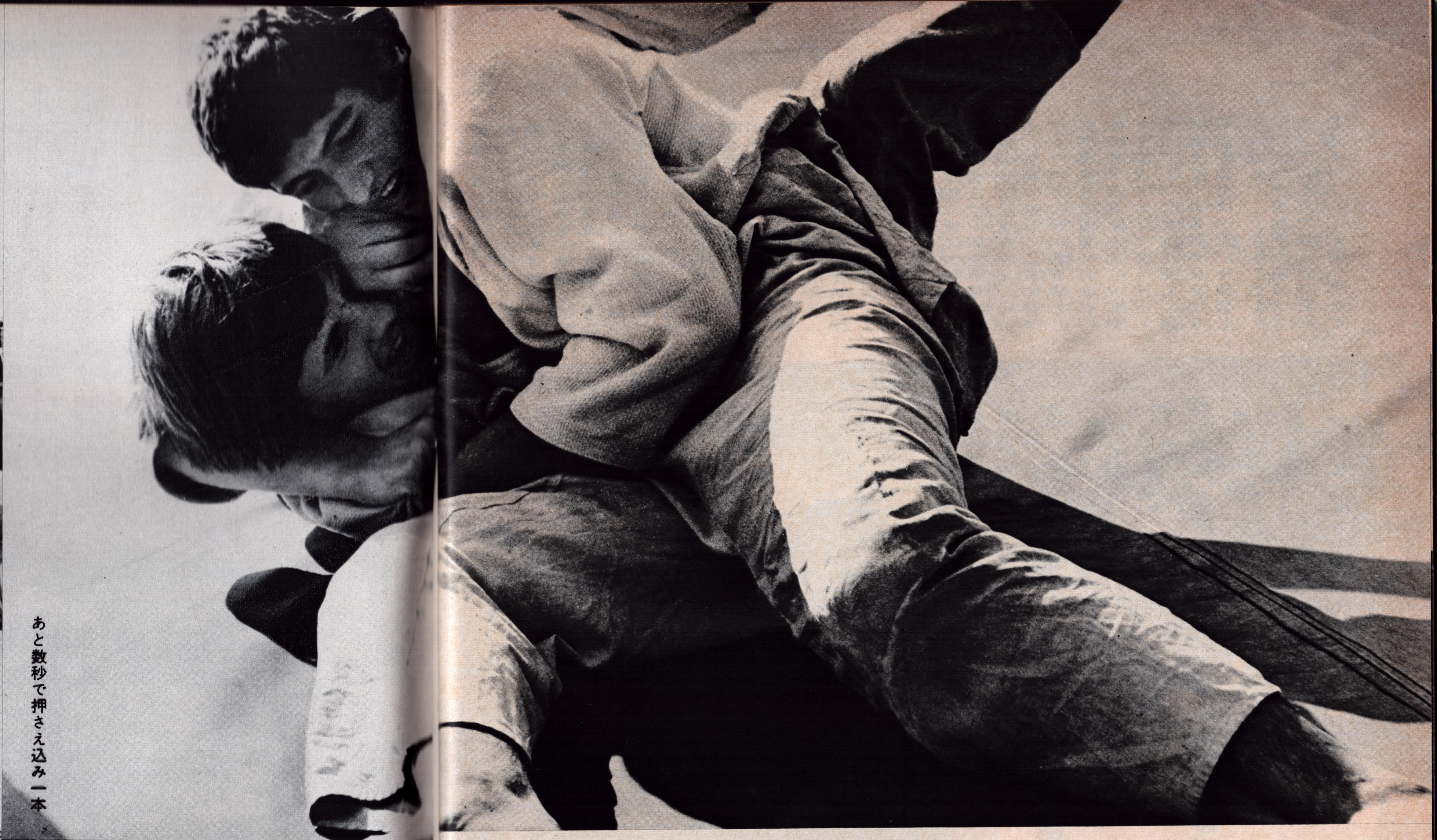
観衆の村民たちは地元選手の勝利に大喜び



アディゲ自治州のジジハブル村で開かれた柔道大会。ここにもマイコープ少年サンボ・柔道学校の分校がある。



"イッポン"(一本)の判定をするこの審判はサンボのスポーツマスター、カズベク・チェルミト

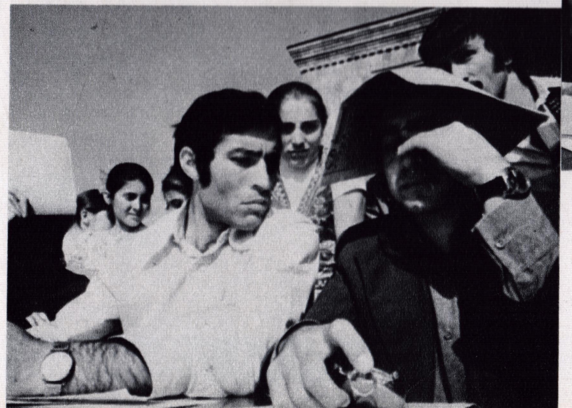


あと数秒で押さえ込み一本



勝ったチームの選手たち……

時計係を勤めるジジハブル村分校のコーチ、アダム・ガタグ





村にある"オクチャーブリ"コルホーズのサフェルビー・ツィク議長から団体優勝したマイコープ市チームの代表にカップが授与された。

老人たちと闘技の規則や技について語り合い、村々で民族闘技をしている少年たちと親しんだ。「わがアディゲ自治州の若者たちは、体格ががっしりしていて、動作が機敏で、気質的にもまるで柔道とサンボのために生まれてきたようなものだ」と、コブレフは断言している。

そういう出張旅行のあいだに、コブレフの胸に一つの考えが生まれた。それは、柔道に民族闘技の技の一部を、もちろんルールの範囲内で加えてみようということだった。この構想の実現が、ソ連選手の成功に寄与したことは疑いない。

「われわれの柔道の強味は、それが日本柔道のコピーではないという点にある」と、ソ連ナショナル・チームのウラジーミル・アンドレーエフ監督は強調している。

ヤクブ・コブレフの原則と方法の有効性が生み出した具体的な成果は、ウラジーミル・ネブゾロフ選手の勝利だけではない。彼の弟子の中からは2回も世界チャンピオンになったサンボのアランビー・ハパイ、ヨーロッパ選手権の優勝者グメル・コストフ、アランビー・エミジ等々、有能な選手が輩出している。

これらの柔道とサンボの"スター"たち（昨日のサンボ選手は今日にも柔道選手になれる。ネブゾロフもそうだ）は、全員マイコープに住んでいる。マイコープ市では毎年サンボと柔道の全ソ競技大会が開催されている。ソ連と日本の選抜チームの親善試合は、ここでは恒例の行事になっている。

日本サンボ選抜チームのヘッドコーチ、ビクトル古賀氏は、「すばらしい専門家であるヤクブ・コブレフの指導するマイコープ少年サンボ・柔道学校は日本の関係者のあいだでもよく知られています。マイコープでは、有名なチャンピオン選手のほかに、われわれはいつでも、無名だが、しかし疑いもなく有能な若い選手、十分に高い技術を持っている新人に出会います」と語った。



ソ連旅行へどうぞ！

たとえば、ロシア古建築の真珠といわれるネルリ河畔のポクロフ教会はいかがでしょう？　この教会はウラジーミル市郊外の草原にすでに八〇〇年もその誇り高い姿をそびえ立たせています。

おとぎ話の世界のようなスズダリ市の観光はいかがでしょう。楽しい遊び、音楽、ダンスが一杯のお祭りが開かれています。

ペレスラブリ＝ザレスキー市のそばにある絵のように美しいプレシチェーエボ湖の観光（ヤロスラブリ州）はいかがでしょう。

ヤロスラブリ市にあるロシア最初の国民劇場の観劇と地元のクレムリンの見物はいかがでしょう。

ロストフ、ノブゴロド、プスコフ市の石工たちが建造したすばらしい傑作の数々をご覧になりませんか。

古い歴史を持ち、そして同時に永遠の若さに輝くこれらの都市へのご旅行を歓迎します。ロシア民族、ロシアの都市の伝統が大事に保存され、増やされている個性的な観光地、過去の歴史の石のページと現代の成果が一つに融け合った個性的な観光地が、皆様をお待ちしています。

詳細についてのお問合わせは、東京都港区六本木4—1—16　六本木ハイツ内　ソ連政府観光局（電話03・584・6617）、あるいはソ連旅行を扱っている日本の旅行代理店へどうぞ。

ИНТУРИСТ

Intourist







今日のソ連邦
一九七八年1月15日号
編集・発行　ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷　大日本印刷株式会社